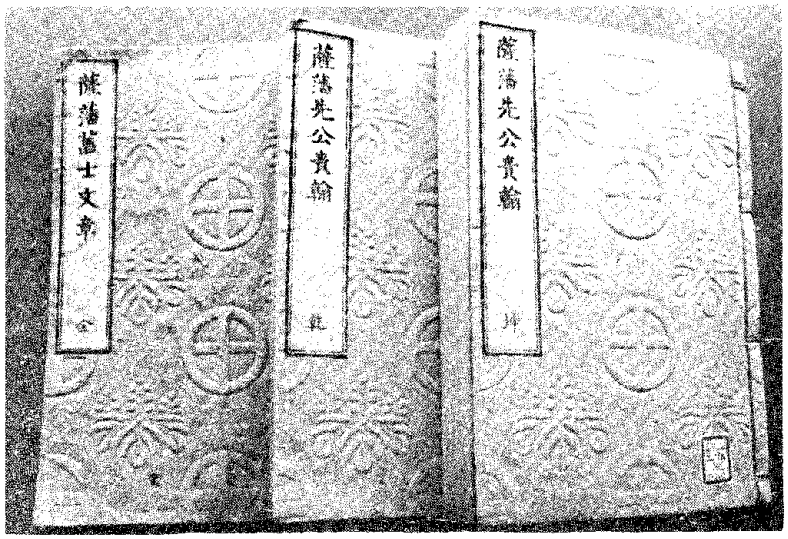
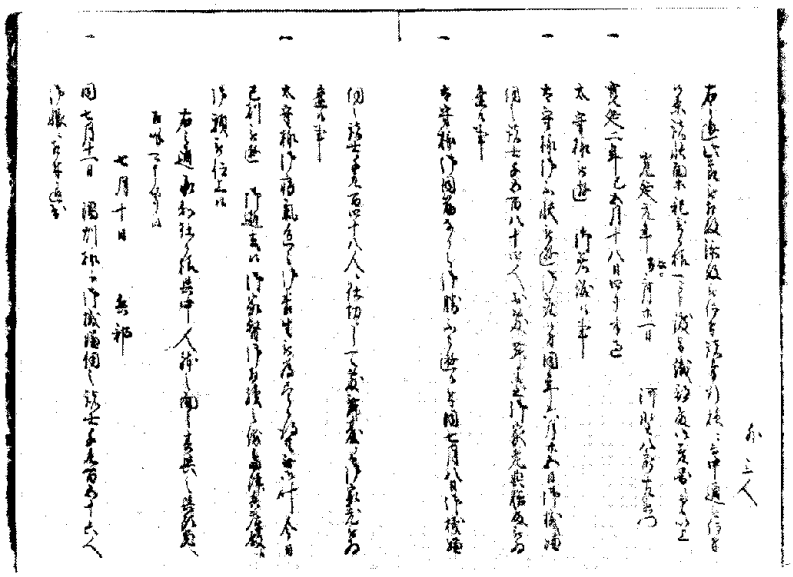
鹿児島県史料集(20)

薩藩先公貴翰

坤



王里文庫本薩藩舊士文章・先公貴翰乾・坤・舊士文章・先公遺德



同先公貴翰坤部分（519号）

刊行のことば

鹿児島県史料第二十集として、ここに「薩藩先公貴翰　坤」を刊行いたします。

本書は、戦国末期から近世初頭にかけて、薩藩歴代藩主の出した書状を中心にした史料集で、昨年刊行した「薩藩先公貴翰　乾」の続編であり、なお、一昨年刊行した「薩藩旧士文章」と併せて三部作になっています。

県史料集の刊行は、資料の保存をはかり、研究者の利用に供することを目的に進めて来た県立図書館の事業の一つで、史料集の刊行がこんにちまでとどこおりなく続けられていることは、県史料刊行委員の方々の並々ならぬご協力の賜と存じます。

今回は、鹿児島大学教育学部の桑波田興教授、おなじく法文学部の五味克夫教授に、編集・校訂・校閲をしていただきました。長期間にわたる両先生のお骨折りに心から感謝いたします。

なお、この史料が地方史の研究に少しでも役立てば幸です。

昭和五十四年九月

鹿児島県立図書館長

宇都　哲

解　題

鹿児島県史料集一の一つとして「薩藩先公貴翰」と「薩藩舊士文章」とを併せ刊行することとなった。(印刷その他の都合で分冊出版することになり、はじめに「舊士文章」を次に「先公貴翰」を刊行する。)共に中世末期から近世前期にかかる書簡を中心とした史料集である。題名の如く「先公貴翰」は主として薩藩歴代藩主の発出した掟・書状等で、「舊士文章」は主に藩老、藩主の発出した書状等である。

「薩藩先公貴翰」は鹿児島大学図書館所蔵玉里文庫本によった。乾坤全二冊。同本は奥書(坤)に「原書以亡岩切清太実和本写之、明治二十年八月、筆者児玉五兵衛、同二十一年三月二日糺合、同人、五代徳夫」とあり、島津久光の玉里島津家において岩切本を書写校正したものであることがわかる。

ところがこれとは別に鹿児島大学図書館所蔵岩元文庫本の中に、帙入りの四冊本があり、乾坤それぞれ二冊に仕立てられているが、はじめは乾坤それぞれ一冊の全二冊本であり、その各々の一枚目の右隅下に小型朱印が押捺されており、岩切の名がよみとれることからこれが玉里本の原本又は副本ではないかと推測し、内容の一々について大略対照したところほぼ間違いないと思われるに至った。詳細については省略するが、本文中「実和考」として実和の考証をのせた箇処があり、玉里本にはそのところで「岩切清太也」と朱書を加えていることなども一つの証拠となろう。但しこの事実に気づいたのは既に玉里本による書写完了後のことであり、また玉里本が岩切本を忠実に書写、校訂を加えていることが確認されたため、あらためて岩切本による原稿作成対校等の作業は行なわなかった。

このようなことから本史料の作成にはいよいよ岩切実和が関係している可能性が濃厚と思われてきたが、その内容についてみても後述の如く実和が幕末期川内隈之城の押役であった身分柄にふさわしく、在地の御仮屋文書をはじめとする地方史料をかなり丹念にみているようにうかがえる。先公の中、忠良、貴久、義久、義弘、歳久、久保、家久、光久代についてはほぼ代表的な公私の書簡が収録されているが、綱久、綱貴代以降においては「薩藩旧記雑録」等にも載録されていない地方行政関係文書が収録されており本史料の一特色となっている。これも編著書の立場を反映しているものと考えられる。もっとも本史料作成の場合、一々良質の原文書によったと思われるものは少なく、多くは不備な転写本によったかと思われ、また読解力の問題、時間的制約等から少なからず誤脱箇処のみうけられることも事実である。今回の刊行に当っては気付いたかぎりで、また一部良質の刊本、写本によって補正しうるものについては適宜書きあらためたが、底本の体裁を著しく損ずるおそれもあるので一々厳密な校訂補入は施していない。

また他に異本の一つとして鹿児島県立図書館所蔵の「公翰録」がある。

「公翰録」は全二冊の小形本で巻末に「本書川村俊秀氏ヨリ借用致、明治二十六年写終、共二参巻也、」と記されている。内容は先公貴翰とほとんど同じで異る所は慶長五、六年の関ガ原戦以後の戦後処理に関する類の往復書簡四十余点を脱していることと、先公貴翰にみられる若干の編年の乱れを修正して十数点の文書の順

番をいれかえていること位である。前者は徳川家々臣の発出した書状が多いからむしろ異質のものとして排除したものかもしれない。

「公翰録」の名は「先公貴翰」の公と翰の字をとって名付けたかと思われるが、内容については或は「公翰録」のそれがはじめのもので、これに若干増補を行ったのが「先公貴翰」の内容であるのかもしれない。なお検討を要するところである。

「薩藩舊士文章」は鹿児島大学図書館所蔵玉里文庫本によった。全一冊。同本は奥書に「原書以亡岩切清太実和本写之、明治二十一年三月十七日筆者竹内勘助、児玉五兵衛、同年八月十日糺合済、平岡之隆、五代徳夫」とあり、明治二十一年島津久光の玉里島津家において岩切本を書写校正したものであることがわかる。

収載文章（書簡）の中、とくに目立つものは藩家老等近世初期島津家々政を担当した重職の発出したものである。今収録点数の多い順にあげれば、伊勢貞昌の三一点を第一に、川上久国の一八点、新納忠元、山田有栄、島津久元の各一一点、島津久通の一〇点等があり、以下喜入忠政、島津久慶、北郷久加、鎌田政近、三原重庸、比志島国貞、伊集院忠棟等のものが各五、六点である。薩藩舊士文章の名の付された所以であろう。しかし他に豊臣秀吉一九点徳川家康一〇点をはじめ、近衛信尹、本多忠純等薩藩士以外の名士文章も含んでいる。また重職以外の平士の書簡も一、二点ずつと個々の数こそ少ないが、全体では百数十点と半数近くをしめる。この時代における行政、民政上の特に興味深い事件に関連のある書簡等を採録したのであろう。先公貴翰と違って配列は編年順ではなく、大体発出者別、事項別となっているが、必ずしも厳密なものではない。編者による年紀、人名比定も間々行なわれているが、これまた正確なものとはいい難い。

たとえば九二号の文書は九三号の文書が吉田兼里の島津家々老宛の書状であるところから同姓宛の文書ということで併記されたのであろう。九二号文書の内容は諏訪神主宇宿氏の要望により神道秘法社法等につき教示を認めることを通知したもので九二号文書と何の関係もないむしろ九三、九四、九五号文書の方が宇宿氏諏方社別当寺安養院の関係文書として関連性がある。九一号文書の内容は文永の役のあと計画された高麗出軍の催促状ともいうべきもので久時は薩摩国守護島津久経であろう。この文書は薩藩旧記雑録前編五所収の雑抄採録分でそれによれば月日は後三月五日、宛名は吉富次郎である。吉富氏は薩摩郡一分郡司で薩摩国御家人である。恐らくこの文書を誤写し吉田と読んで併録したのであろう。年号の読み方にも自信がなく「本ノママ、弘治歟」とし、戦国期以降の書状を内容とする本史料集に採録してしまったのは編者の学識にいささか疑問を抱かせる材料を与えたことになり、他の引用文書にも十分な史料批判を必要とする警報を出さざるをえない結果となった。

鹿児島県立図書館所蔵「異本薩藩舊士文章」は書写の際順序を紊したこと等の他、内容に異るところはない。ただ虫損箇処が玉里本に比して増しており、字句にも若干の異同がある。玉里本以後の書写か、或は玉里本の原本である岩切本の別本からの書写か明らかでない。「薩藩先公貴翰」と違って岩切本の所在を確認しえない現在、これ以上の考察は困難である。しかし本史料も前史料と同じくその原本所蔵者である岩切実和その人と密接な関係のあ

ることが認められ、二四五号、二四九号の文書の如く水引泰平寺において己未（安政六年）正月廿四、三日に実見との記載や、二七六号文書の如く記録所々在の注記を加えていること等から隈之城押、岩切実和編著の推測はほとんど間違いあるまい。

以上の推測をさらに裏付けるものとして「薩藩先公遺徳」上、中、下全三冊の存在がある。同書は同じく玉里文庫本、その下巻奥書には「原書以亡岩切清太本写之、明治二十一年一月十七日、筆者折田信夫、同児玉五兵衛、糺合平岡之隆、同五代徳夫」とあり、同書が玉里文庫中、前出史料と共にいわば三部作といった体の史料であることを思わせる。そしてこの「薩藩先公遺徳」については次の序文があり、また同書の内容からみても岩切実和の著述であることは疑いようのない事実である。

夫某実和嘉永五壬子の年四月初の五日隈之城抑職の命を蒙り、爰に在勤する事凡十年、徒然の慰に諸々の書籍を閲ふ、或時孟子滕文公の篇を読に、飽食暖衣逸居して無教則禽獣に近しとあり、されハ某も日々何の勤労もなく既に六十になん〳〵たる光陰を空しく送り徒食せしハ彼無教と等しく其責重し、故に思へらく、いにしへ知足軒友山ハ（大道寺内蔵之介）享保十二丁未の年八十九歳にして落穂集を編集し、或ハ府下の志士伊集院兼喜ハ（弥八郎入道道林）明和八辛卯の年八十歳にして薩陽落穂集を編集し、清水盛香ハ（源兵衛盛香）明和七庚寅春六十五歳にして盛香集を編集し、嗣子盛容に附興す、高雲堂周山翁ハ（俗名末川伊織実名久救）文政九丙戌八十八歳にして仁君遺名誌を著述す、如斯老の至るにさへ勤労し其成功を残されしかハ今専壮子の輩士道を研窮する一助の書籍となりぬ、然るに某も彼四士の志に倣ひ先公の御賢徳、且ハ旧士の嘉言善行を諸々の旧記より拾ひ集めしに、何れも数ケ条に及び尤感概に不堪ハなし、依て愛孫清一郎実次に親しく語り聞かせばやと思へと今年縱に三歳なれハ心に任かせす、責て某が素志を序文に書記し置、夫薩州の為士者は幼年より只管先公の御賢徳を仰き、旧士の実行を慕ひ、盛長するに従ひ、広く聖賢の書を読、且ハ武術を修練し、克く身を修め、父母に事へて孝を尽し、君に事へて忠を尽さハ吾家おのづから安寧ならん、此巻を名付て薩藩先公遺徳といふ、長く子孫に残さハ某か徒食安居の罪も免かれんか、今年五十九歳にしてかく隈之城旅館におひて書記する事然り、

萬延元年庚申十二月下旬

岩切氏実和謹誌

岩切実和についてはその履歴等、なお明らかにしえないが、幕末の一時期隈之城の押役として同地に赴任していたことは「川内の棟札（川内市史料集2）」隈之城都八幡社安政二年の棟札に、「地頭伊勢雅楽」の次に「押岩切清太」とあることからも明らかで、篤学の士で史書の編さんにこころざしていたことを知り得る。

さらに玉里文庫中には他に三本岩切実和関係の史料のあることに気付く。一は「御治世年表」であり、奥書に明治二十年岩切本より写すとある。二は「名士法号鑑」であり、奥書に明治二十二年岩切本を以て写すとある。三は「平佐城責記」で奥に「此書付ハ隈之城押役岩切清太殿より借入、嘉永六丑年八月九日写之取者也」と書き加えがある。また他に岩切実和編集の明らかなものとして薩藩叢書収録（薩藩旧伝集四）の「伊集院俊矩言行録」の元本がある。言行録の書出しに曰く「此書は岩切実和被集所也、実和伊集院俊矩を被信仰事誠切なり、而して俊矩の終身始終の善言行を

諸書の内より正く無誤ことを挙取り又は古老の物語の実はたかはざる事をのみ取り集て、獨観集と名付被書置しを、予も亦岩切氏と同じく俊矩を信じ仰くこと厚きによって、借用致し写置之畢、実和の序文雖有之写置くに暇あらず候、又他より借用可写置也、于時文政六年己未八月十日政福謹書」とある。以て岩切実和の見識を偲ぶよすがとなろう。ここに本史料集を刊行するに際して、収蔵史料の大要とその作成に深く関係したと思われる人物の片鱗を紹介して解題とする。

（五味克夫）

「附　記」

本書原緒纂者である岩切実和の伝記資料として、左の史料を見出したので、追記する。

「弘化四未四月十四日五人乗船東湊着、乗船山川之興喜丸（吉）図船頭平助、

物奉行ニ而代官勤　田尻善左衛門様
下目付ニ而附役　帖佐為右衛門様
御代官座書役ニ而右同　兒玉筑右衛門様（兵衛）図
見聞役（横目）図　田中沖右衛門様（休）図
岩切清太様」

（喜界島代官記、松下志朗編「道之島代官記集成」所収、一七七頁）

（桑波田　興）

例言

一、本史料集には鹿児島県立図書館所蔵、「薩藩先公貴翰」、「薩藩舊士文章」を載録した。

印刷等の都合で本史料集は二部にわけ順序をかえ、第一部として「薩藩舊士文章」を第二部として「薩藩先公貴翰」を刊行する。

二、原稿作成に際しては底本として県立図書館所蔵本の原本である鹿児島大学図書館玉里文庫本を用いた。

三、原稿作成の際、鹿児島県立図書館所蔵「公翰録」、「異本薩藩旧士文章」を参照した。また一部については島津家本「薩藩旧記雑録」(前後編・追録)等と対校し、明らかな誤脱は補正を加えた。

四、印刷の都合上、漢字については当用漢字に改めたものが少なくない。又変体假名もすべて通用体の平仮名に改めた。花押も省略せざるをえなかった。

五、誤読、欠脱等については右傍に括弧を以て私見を記し、不明箇所、難読箇所は□を以てあらわし、或は右傍に(々々カ)(ママ)の如く記載した。

六、朱字は括弧「」で示した。

七、底本によればおおむね各文書のはじめに「一」何々と「一」を記入しているが、本史料集では便宜上、それぞれの文書の頭に算用数字の一連番号を付した。

八、本史料集の作成に当り鹿児島大学図書館より閲覧調査の便宜を与えられた。記して謝意を表する。

九、本史料集の原稿作成、校訂は主として「薩藩先公貴翰」については鹿児島大学教育学部桑波田興が、「薩藩舊士文章」については同じく法文学部五味克夫が担当した。編集は両人が共同して当ったが読点その他細部についての統一はしなかった。解題は合議の上、五味が一括執筆した。

十、本史料集所載の各史料で「追録薩藩舊記雑録」(「鹿児島県史料」)「列朝制度」(「藩法集」上・下)と対校したものは、史料末尾に「鹿児島県史料二―二一三四号」とか「藩法集」(列朝制度)と註記した。また未刊の薩藩舊記後篇と対校したものは対校史料の収載巻数を示した。

258

歳久公御書

文録元年七月十八日、歳久被斬首之時、側ニ置一紙、書云、依病脳、吾と腹に刀を可立事、雖本望候、手不叶より、もんしん仕候、此々以自然之時者、太守様江御申、

辞世

晴簑めか、玉のありかを人とは、、いさ白雲のすゑもしられす、

七月十日　左衛門入道　晴簑

白浜次郎左衛門殿

比志島紀伊守殿

259

久保公御書

此表之儀、念比可書越候得共、此使者可申明候間、無其儀候、就中、當國被属御静謐候は、、追付大明國江も可被爲渡之由候間、直ニ入唐之儀も可有之哉と存計候、不及申候得共、留守居之事、何篇不可有油断候、謹言、

九月八日　久保

白濱周防介殿

冨山備中入道殿

伊東右衛門入道殿

260

此中其許在番ニ付、普請等寒天之時分夜白辛労、令察候、併近日此地ニ各可爲参陣之間、尤可然候、節々傳言被申之旨、委細聞届候、此表無事可心安候、兼又福留織部佐江薬之儀申候キ、兼而調合可差越之通、爲其方可申渡候、此趣任世江も細辞中含候、爲心得候也、かしこ、

十二月十三日　久保御在判

伊集院肥前守殿

261

只今申來候趣者、請大名急度帰朝可有様ニ相聞候、左候者尤祝着存候、貴所御占者如何候するや、御辺事ニ承度候、然者焼物を合申候而無忝々候得共、持せ申候談問(ママ)敷候得共先々、恐々謹言、

又一

伊肥州　陣所

右御本書ニも日付無之候

262

以上

一謹而言上、抑此表之儀早々可申上候之処ニ、通路不輙ニ付而延引、曽而非心底候、於様躰者、此使者可申明候間、不能書載候、

一梅北宮内逆心之儀、無是非次第候、併龍伯様無御疎意付而、公儀可然之由、満足此事候、

一晴簑事、先年以來之覚悟不相届ニ付而、今度害生之由候、不及是非候、御心中奉察候、

一幽斉様不慮被御下向、于今御在國之由候、諸事御心遣之段、自是申計候、

一今度渡海人数不足ニ付而、手前受取候番所無首尾候、最前渡海之仕立以來無尽期悪名諸家覚無了簡儀ニ候、萬一此表之始末ニ付而、太閤様風と被成御渡海先手之人数御紀明之事共ニ御座候は、、則國家可相果儀御知人中はいつれも御油断ニ而候、爲御

心得候、

一此表之儀、たとい急度被成御静謐候共、我等歸國之儀は可延引と存候、長陣之御用意弥無御油断被仰付、御見積可爲本望候、

一今度条々以書立、申上候、御事しけく可有御座候得とも、めい〳〵被仰付候而可被下候、猶此使者可申上候間、可預御披露候、恐々謹言、

九月廿八日　　又一郎　久保御判

比志島紀伊守殿

以上

253

此表大方雖相済爲躰候、武士共山中引入末出候而何共不見分候、併太閤様御威光重事ニ候之条、於様躰者可心安候、兼又梅北逆心之事無是非次第候、弥國家之始末可然候様各入魂可爲祝着候、謹言、

九月朔日　　久保御判

山田越前入道殿

此日、新納武蔵入道殿と有之、御同案アリ、

264

忠清公御書

貴札畏致拜覧候、仍従武庫様之御書遮而贈給候、忝令頂戴、高麗弥以御無爲御入候段、令承知御同前目出度奉存候、尚餘者期後喜之時候、恐々謹言、

三月四日　　久四郎　忠清判

265

忠恒様

人々御中

家久公御書

此狀認候処、昨日釜山浦へ遣候使只今参候、釜山浦江ハ今朝番船押寄互ニ銕炮取合ニ而候ひつる由、申來候、定而此陣手細く候間、取掛可申と相待申候、今度之番船者百余艘ニ而候、唐島江数百艘在之由候、跡より大勢可参候間、早々日本衆引取申候ハ、、返し可申杯と申候而、一行可仕儀治定候、手前之油断を存ましく候、來月治定御渡海ニ而候ハ、、時分相計候而迎船進上可申候間、うか〳〵と御渡海有間敷候、乍重言外成共御在國候而可被仰調、不可有油断候、

急度申上候、仍昨日十月未明ニ番船浮出あんかうら湊口江押寄申候間、如何様成子細ニて候哉と存候処、爲何行も無之、又加徳島へ押向ヶ候而、一二艘間近参候而此表手切レニ而候間、早々如日本引取候得可然候、近日大勢を可相向候由申頓而釜山浦之如く罷通候、追付小攝寺志江も使を進候、右御両所ゟも今日預使候、釜山浦江も昨日船共漕廻り、軈而かたかひ椎ノ木島江相かゝり、しかと罷居候、釜山浦江之通用も此中之様ニ渡海ハ不相成、竹島（イ罷）迄船而参、夫より陸地を参り躰候、如此罷成候時者、日本との通用可相絶申候、扨々去年中兵糧之儀人数等之儀骨ニしめ申候而、追々細々ニ申越候つるに、終ニ然々之見次も無之就中此比其許江到來打絶申候、此方兵糧之儀圖書頭存候様ニ漸手内を爲限儀ニ候つるを色々ニ而唯今迄相続申候、從是後之儀可仕様無之候而飢ニ

臨之可申迄ニ候、定而御下國以後可被入御精儀奉察候得共、御國之姿中々かゝらぬ躰ニ而候由承通候間、迚も御家相続間敷を深々存入候間、圖書頭、鎌田出雲守歸朝させ申候而存分共中上つる、連々如申候ニ罷成、諸事不相調此方へ人数兵糧以下も不參、はや手つまりに罷成候、此方之儀者縱相果申候共不及是非候、後々御家何と可罷成哉、無曲次第不可有御失念候、去年御在京之内も幾度も人数兵糧之儀申越候処、向角ニ而無見次、此方捨もちニ而候事、中々書中ニ可申様無御座候、先日如申上候人数渡海之船以下其外賦等之儀、或出物、或自力ニ而相調可罷在抔と候而、事延々ニ可罷成と申候つる、左様之段も取々ニ沙汰候はんすると存候、数年之在陣在旅又者度々之出分、出米ニ諸人爲労果と聞申候間、縱理之御沙汰ニ候而自分之調ニ而者、迚も急ニは罷成間敷候、然時者爰元はずにもあひ申間敷候間、可爲笑止旨細々申候、大形申あて候かと存候、年之明暮ニ方々之船切々參候得共、薩摩ゟ之船者一艘も不參候、定此比者中途迄者人数も參候はん哉、左様ニて候とも當時は番船渡候而在之事候間、從日本之船共輙渡海可難成候、唐島之儀も此比番船行廻り普請具取抔罷届候をも追立候而皆々逃去躰候、此方ゟも普請具取ニ少々遣候者不參候間、迎船共遣候得共、未到來無之候、此中從日本之船共釜山浦表乗迦し候船は大署唐島へ取付候つるに、彼島も右ニ如申候間、此間之様ニ罷成間敷候、御自身御渡海も三月たるへき由兼而被仰聞候、自然其はずニと思召ふた〳〵と御渡海候而も、兵糧之御用意人数等之儀不被仰調候はゝ、結句御外聞如何ニ而候する間、一月二月之儀者石治少江被仰延候而も御在國候而可罷成程被仰調候而御渡海尤ニ奉存候、此方之儀者乍若輩無越度様に可申付候、何事も〳〵兵糧無之候間、不及力候、免角〳〵此陣之躰氣遣千萬候、若敵猛勢取より行に及候する時は餘り之無人ニ而候間、無了簡ニ有御座ましく候、又人数重り候而も、兵糧之調儀無之候はゝ、結句手つまりに可罷成候、如此之躰に罷成候時は不入中事に候得共、餘り無念さに申事候、猶相替儀追々可申上候、此船も番船近所に罷居候間、夜にまきれ候而出させ申候間、不具候、誠惶敬白、

可疑
慶長二年歟　　又八郎
二月十一日　　忠恒御判

進上
武庫様

266

去十月於野々三谷、其方手之衆致合戦得勝利、首数討捕注文到（人数鎗合候而突崩之）來、珍重也、各粉骨、或討死、或蒙疵由、尤以神妙感悦無極所也、弥可抽軍忠候、恐々謹言、

慶長四年九月十三日　　忠恒判

北郷長千代丸殿

267

今度永々滞留相届、軍労誠に老後之忠節無比類候、仍腰刀一行光、遣申候、謹言、

廉長五年
三月廿四日　　忠恒御判

新納武蔵入道との

一去廿七日隠岐守殿へ御礼申候処、初而被成御逢候由ニ而殊之外

御取持に而、式々之御振舞結構成儀書中に不申得候、召列候衆なとへも悉く七五三ニ而、膳之内金に而みかき立られ、折敷計り木地に而候つる由申候、板倉殿、山口殿なとも御振舞御馳走無殘所候、上者忝候付何も如此御懇と存事候、前々之知音衆細川内記殿、福島太夫殿を初、皆々尾張丹波之御普請場より預御使者候、

268

無何事罷登候由、從大坂以書狀申候、被聞召達候、

一去月四日芦屋に而大風吹申候得共、船頭前廉ゟ致覚悟川口へ船皆々入候間、一艘も無何事遁難風申候、然者今度又四郎ゟ使申上候付而、龍伯様御傳言を以被仰聞候、其許も右同日以之外大風ニ而加治木鹿児島風あて申候由、家杯もこね申候哉、時分栖珍敷大風と申事候、

一我等駿府下向之儀、上着申候はゝ、追付打立可申と存候処、琉球人之こしらへハいかにも念入候而心静に相調可罷下由、山口殿ゟ承候間、左様申付候故来罷下候、來ル十二三日比可罷立と存候、

一からへ人衆遣候儀も、當年之御普請を為可被差置、世上江之御あしひらひに被仰出候、遮而之儀にては無御座候由、板倉殿雑談直に承候、然者下々ばはんに可遣様子相聞申候、來春禁中御普請可有御座由被仰出候、我々儀も來春は御普請可仕候、國中其用意可有之儀肝要存候、就中琉球方之儀杯も大形に無之様鹿児島役人衆江被仰聞被添御心候而可被下候、

一唐船も其後いか程参候や、是又嘆之儀杯悪無之様被仰聞候而可被下候、

一被仰聞御のほせ之早便、両人三日前上着申候、悉尊書共拝見仕候、此両人は駿府下向之刻迄召置此方之儀次第に可申下候、此者江申含候間、可被聞召達候、誠惶敬白、

慶長五（慶長十五年ナルベシ）　陸奥守

慶長五　五誤カ　家久御判

七月五日

進上

惟新様

269

庄内之儀、雖爲普代之地、依天下之例被成検使分國中就改易幸侃江被下成御朱印、近年令居住候所に無道之驕有之間、加成敗即始都城所々返し遣し一萬石令加増候、然者各依爲粉骨之地志和地、山田、野々三谷は雖殘置候、北郷家之儀、其方相続迄及十二敷、當家代々一日片時も無不忠之旨、證文候由承知候、且は銘具感、且は今度之弓箭右二ケ所宛行候、全被領地弥可被抽忠懇候、別而家老之衆江右知行之内令配分候、其方幼稚に候条入念諸式可相勤由申聞如此に候、猶平田太郎左衛門尉、鎌田出雲守可申候也、

慶長五年

十月廿五日　忠恒

北郷次郎殿

270

頃春雪のめつらか成を、龍伯様入御詠吟被遊御歌、随之各詠歌共從富隈送給候、御返歌なくては難有候間、当所衆へも少々申觸候、然者一両詩被相加候はゝ可爲珍重、則龍伯様之尊詠書附遣候、必和韻待入候、不宣、

武士の心ひかる、梓弓、
はるとはいわし、今朝のしら雪、

慶長六年歟　　忠恒御花押

仲春初六日

廣済寺
玉机下

右坊津廣大寺にあり、

271

下國以後者遠境之故不申通疎遠之至非本意候、旧冬去夏以來之懇志に而無忘却候、先以無事に令渡海、祝着此事候、此國へ消息一日迚も難栖在所難堪可有推量候、定而其許者小哥杯ニ而遊覧候と想像計候、助五遙々相隔床敷存候、便宜之刻者表之儀示給度候、責而書狀を成とも見て住吉邊之事を思ひ出し、心に慰み可申候、追々在津中夫婦之人魂、無比類儀不断申計候、女房衆達へよく傳達賴入候、恐々謹言、

霜月廿四日　　忠恒御判

臨や老
床下

272

當春慶事珍重候、仍其以來不能書傳背本意候、去春中は赤國御働手前取紛的便之刻も言傳サヱ不令申、相（脱文）先年之芳志忘候（本ノマヽ）哉、聊非心底疎略候、遠境之故其邊之儀も不相聞、切々咾迄助次無爲候哉、床敷候由申度候、將又乍輕微綾子一巻、銀子一枚進之候、寔音信之験迚候、於様躰者本田源右衛門へ申含候間、不詳候、恐々謹言、

正月十九日　　忠恒御判

臨や
床下

273

急度申候此國之儀自大明國大軍打出、蔚山、順天、泗川右三道相分、人数別而当所へ大勢相賦押寄、連々如覚悟候、晋州表へ召置候番手之者も和睦入之旨、頻ニ依令懇望小西攝津守、寺沢兵庫頭遂相談、日本と大明後代無（脱文）様ニと和平之入魂候処、自敵方令違変右沙汰有之間ニ操寄猛勢、去月廿七日古館へ爲見物少々召置候人数取籠雖欲討果候、各碎手切通無異儀當城、引籠候、乍去少々越度共候而其侭敵を引退候付、其涯不及行最前和睦之約諾を令表裏、人数少々被打捕其欝憤難散所ニ、去朔日己刻十萬騎押寄當城相固鉾楯候事、白大明國之催候間夥敷儀可有推量候、然間永々於及籠城は諸卒相勞坊戦難成と令議定、不計善悪遂安否之合戦、切崩数万騎討捕不慮得勝利、於三國發名譽候事、不可勝計候、兵庫頭様御事者不始于今儀候、我等始而之事候ニ此等之仕合者併非所人力之成候、抑当家之儀者代々守信心候處ニ、近年神社及毀破候之条、佛力神力も無頼連々雖詔之、龍伯様、兵庫頭様被碎御信心之旨不被成御志失、往古之勤故ニ候哉、（ママ）捻別当國へ平世不相見得白狐、赤狐戦場へ走出、奇妙不思議成威力、是ニ軍兵得勇猛容易打果候事偏ニ神力、旦は諸卒之粉骨、難述筆舌次第候、寺社中連々被抽懇祈方々へ可被申渡候、如右於手前得大利故、順天、蔚山を取巻候敵共悉ク引退候、順天之事者此中海陸取巻候番船爲可討果南海圍城衆寺志摩以相談調兵船押懸候処ニ、番船最早敗軍ニ而一二艘後レ行候を燒捨候、当時者何方も静謐之躰ニ候、

因茲在高麗自諸大名預使者播面目候、近日亦自敵方使官を差出無事之儀申候間、尚以小西、寺沢令談合具ニ申含、使官差遣候、無別儀於相済者頓而可爲歸朝候、今少々之儀候間、留守居衆以熟談弥無緩様ニ分別肝要ニ候、謹言、

十二日

十月二十三日　　忠恒

本田六右衛門殿
鎌田　出雲殿
比志島紀伊殿
山田越前入道殿
新納武藏入道殿
平田太郎左衛門殿
町田出羽入道殿

274

從忠恒様所被成下之尊書、謹而致拜領候、抑今度於野々三谷致軍勞候通、被仰下趣外聞忝奉存候、到向後可勵勢力事聊不可有疎意候、右之旨宜預御披露候、誠惶誠恐謹言、

九月十五日　　作左衛門尉
　　三久

圖書頭殿

275

今度從上方之両使へ返事候儀、弥別儀有ましく候、本助之亟よく〳〵得心ニ而尤候、呉々如申尽候、内府様前々之忝儀無忘却付御しんしつ之儀ニ而、被召出候は今も御懇覧罷成、悴家をも相続度儀ニ候、重而者親類中成共、乙名中成共、可差上由、申候処、龍伯身之上を此使急之由候、無心許候、隣國之様を見究候半は難成候、世上風聞候者慥成證文共ニ而被罷遣候人も違変有之由候、さて〳〵左様ニ候而は家之恥辱不及是非候、勿論百ニ一ッも難叶弓箭非沙汰之限ニ候間、中々行末之頼は相絶候唯々二度相傳之家をむさと可成果儀、無念之次第たるへく候、各北一味可成程之遂防戰可果儀本望候、此旨助之亟へ申含肝要ニ候、かしく、

正月十六日　　忠恒御判

鎌田出雲守殿

276

重而御使書被差下、殊ニ御小袖十、拜領、誠以忝奏存候、抑庄内之儀山口勘兵衛尉殿曖を以源次郎無異儀領掌申、居城始諸城明渡、源次郎も去廿八日九日之間必可罷出旨至勘兵衛殿申談候処、如何様之子細候哉、一夜之間に令違変無事相破候、条々表裏之儀絶言語候、於様子者勘兵衛殿ゟ可被申上候間、不能書載候、此旨宜預御披露候、恐謹言、

三月朔日　　忠恒御判

伊奈圖書頭殿

277

庄内へ御出馬之刻仰出、

掟

一於軍場下知衆兼日定置候、其時々之下知衆可有之候条、相背下知いか様之高名手柄を仕候共、一向不付手ニ曲事之曖甚深可申付候、若右之旨違背之仕方於有之者、下知衆前より可遂言上候、令用捨不致披露候者縱雖経日数候、到下知衆可有其科事、

一弓鉄炮射とをしの事、

278

付、分捕者、弓鉄炮可付事、
一喧嘩口論之儀、連々之法度候間、不新別而今度働候間、在所打立時より存定、縦及恥辱儀雖有之不遂其意趣、追而可致言上候、於然者依理非可有其沙汰候、若相背比旨常座座（ママ）ニ相果候はゝ、左右方共可處嚴科事、
一於軍中、身之高名を差置、可勝行を專ニ可存事、
一合言葉、あひしるし、可爲如旧例、付、御方討能々可相糺事、
一自在所腹巻可致着用事、
一蓑、笠持、小荷駄、其外夫丸等軍衆可交事、付、弁当以下ことことしく爲持間敷事、
好々之衆いひくみ不隨下知、我侭之振舞仕者於有之者、聞通り、理次第、深々敷可申付事、
一於戰場未練之軍者立合たる衆互々糺置可遂披露候、令糺明證拠於分明者、可有其曖事、
一自軍場人衆可打入時者、可爲繰除候間縦他之備ニ雖有敵、相定たる備差迦、軍場をみたす間敷事、
右、條々各へ申聞、不可有緩候、應働之趣其時々下知衆可相定候、何たる雖爲仁、下知衆之可中付儀を於相背者、可處嚴科候条、若気任之仁於有之者、下知衆より圖書頭、平田太郎左衛門迄可申理候、若両人於手前用捨候而於無披露者、到圖書頭、太郎左衛門可有其沙汰者也、

慶長四年九月廿四日

急度令啓上、先日平左衛門を以申上候儀無別条候哉、此方之事、

279

者其分ニ相究候、然者有方只今よひ山にと候而罷出候、若ぬけ候、事も可有之候、爲御心得候、爰元之儀者可安御心候、巨細は軈而以使可申候、先如此候、恐惶敬白、

慶長七年　　少將
八月十六日　酉刻　　忠恒

惟新様
参人々御中

今度備前中納言殿就上洛、其方可相下之由不及思案、令領掌不移時日打立、感悦此事候、就者路次中入念早々上着候故、公方様無異儀相済、播当家之面目候、此等之忠節永々不可忘却候、仍脇差信國、遣之候、謹言、

慶長八年
十一月十八日　　忠恒御判

桂太郎兵衛尉殿

（薩藩舊記後篇五七）

280

不断光院へ御安置阿弥陀御躰内ニ相納候、御證書、
無量壽佛全軀一躰、七條大佛師康嚴彫刻爲、以因不断光院之現住淨蓮社純譽上人奉寄附之、仍爲現世安穏後生善處也、

慶長十三年四月九日少將家久朝臣御判

実和考　岩切清太也

右阿弥陀は、実窓芳眞大姉也、家久公御母堂様ニ而候、

281

掟

一物主相定候間、彼衆以談合爲申出儀、不可有違背事、
一喧嘩口論之儀、不断雖爲歴法度、今度々別而各可相嗜事可爲肝要候、縱不圖喧嘩出來候共兼而如法度、私ニ而不相果重而可遂披露、若此旨を相背於破事者、如何様之理雖有之、不及是非之沙汰、一組可處罪科事、
一鉄炮爲持衆、或者し、鳥をねらい、或者立物を射、徒に玉薬を尽す間敷事、
一船之出入思々ニ無之様惣別同前ニ可有之事、
一其組を離れ、他之手に付間敷事、
一手に爲入島々之百姓等は少も致狼籍間敷事、
付、從大島此方泊々右同前可爲事、
一堂宮并寺等あらす間敷事、
一可相働時、海陸共ニ惣人数を不待合、無人衆ニ而致先駈間敷事
一経、其外書籍等むさと取散ス間敷事、
一無罪者、殺害一切可爲停止事、
一順風能不見定不可致出船事、
一取人一切可爲停止事、
一下知衆可申旨を不可相背事、

慶長十四年二月廿六日　　家久御判
　　惟新御判
　　龍伯御判

右、琉球御征伐御軍令之由

覺

282

一琉球よりあつかいを人候はゝ、無異儀其筋ニ可有談合事、
一いつれのみちにも利運ニ相済候はゝ、少も無逗留早々軍衆六七月之比者可引取事、
一琉球歴々之人質、其外島々之頭々之者迄質人を取候而、當國へ引こし琉球向後之諸役儀於此方可相定事、
一自然琉球國主居城ニ取籠、永く籠城之かくこと相見候はゝ、悉く焼はらひから城計ニ成、人数少もためらはす引取あたりの島島之者人質を取手ニ付候而、可爲帰陣事、
一兵粮米おさめさせへき事、此中琉球人の申付たるゟいかにもかろくおさめさせへき事、

右、條々不可有違変候也、

慶長十四年三月　　樺山権左衛門殿

283

此度者、琉球渡海辛労之段、難述筆紙候、仍彼表法度之儀、龍伯様、惟新様得御意相定候、其外心持入へき儀其、兵部少へ申含候、熟談可爲簡要候、謹言、

三月四日　　家久御判
樺山権左衛門殿

284

出船以後之到來無之間、爲見廻岩切彦兵衛尉差遣候、先勢者永良部へ去五日皆々無異儀着船之由其聞へ候、爲順風吹続由候間、漸至琉球可爲着岸候、兼而如申含候早々帰朝六七月比者帰帆簡要候、先々當時之様躰彦兵衛門尉へ悉く被相含、則注進尤候、仍大樽三十遣之候、軍衆凌波涛在陣之窮屈令察候間、誠如投（欠）於諸呵

了候、日本之温酒可成良薬候間士卒与之者也、然而抽忠節忽唱凱歌而近日帰朝相待候、謹言、

三月廿日　　家久御判

樺山権左衛門殿

285

尚々、ゆたん無之やうニたのみ入候、

其後は無音、岩切令上着新説珍重候、然者大島入之儀來秋必々可有之事簡要候、若御ゆたん候ては不可然候、如渕底当年者不漕ふね候、回江戸へ運送又縁中之儀ニ付而過分入目上下之労れニ而候間、当年大島之事相調候はすは後年までのつかれになり候はんま、、國家之爲を被思候は、折角可被入念事此時候、あまり氣遣候間悪筆ニ而申候、渡海之衆へ此旨能々可申候、謹言、

六月六日　　家久カ　忠恒御判

紹益

権左衛門

286

就祈願之儀、爲大護摩一座修法良慶坊差上候、倍当家長久之御祈祷可被凝丹精之事頼存候、委曲使僧讓演説不詳候、恐々謹言、

六月二日　　島津陸奥守　家久御判

三輪法印　玉床下

287

正文在宮内喜兵衛

追而申入候、平田太郎左衛門不處之儀候而相果候由、風説於必定は爲何者之仕候哉、糺付度事候、御才覚尤候、様子委不知候間重而念比ニ可被仰聞候、誠惶謹言、

慶長十五年　　陸奥守

七月七日　　家久御判

惟新様

288

掟

一御内之者、百姓之子不可致養子事、

一百姓物詣不可致事、

付、他所之祭礼ニ参、作懈間敷事、

一百姓、惣別私之振舞仕間敷事、

一侍百姓ニ至迄、子をうみ候而殺間敷事、

一御分國中、百姓他國ニ相替耕作并所務大形ニ有之候間、領主押而稠敷可申付事、付、女共作ニ可出事、

一諸所地頭分別を以百姓之子御内不可取成事、

一門屋敷ニ殿役分被附置候、役儀堅可相勤事、

一殿役追立被定置日数之外、若其所之役人として私ニ於召仕者、鹿児島へ可致披露事、

一諸在郷、酒作へからさる事、

右、條々相背輩有之者、可被處重罪者也、仍下知如件、

慶長十六年二月十六日　　紀伊守　権左衛門

289

掟

一薩摩御下知之外、唐へ誂物可被停止事、　御
一從往古由緒有之人たりといふ其、当時不立御用人ニ知行被遣間敷事、
一女房衆へ知行被遣間敷事、
一私之主不可頼事、
一諸寺家、多被立置間敷事、
一從薩州御判形無之商人、不可有許容事、
一琉球人買取、日本へ渡間敷事、
一年貢其外之公物、此中日本之奉行如置目可被致取納之事、
一閣三司官、就別人可爲停止事、
一押賈、押買可爲停止事、
一喧嘩口論、可令停止事、
一町人百姓等ニ被定置諸役之外、無理非道之儀申懸る人あらは、到薩州鹿児島可被致披露事、
一從琉球他國へ商船一切被遣間敷事、
一日本之京判舛之外、不可用之事、
一博奕僻事、有間敷之事、
右、條々於違犯之輩有之者、速可被處嚴科之者也、仍下知如件、
慶長十六年辛亥九月十九日

兵部少輔判
紀伊守　判
勝兵衛　判
権左衛門判

290

泰平寺薬師堂之事、前代以奉加之志雖有再興、今度者國中繁昌之時節故施府庫材令再造早、後年者不可有其例者也、仍狀如件、
慶長十七稔
仲冬後八日　少將家久
醫王山
正知院

291

正文東郷八左衛門ニ有り、口切

ひたいに火印を被押、城へ被追入由候事、
一　月廿九日てんま口、てんほう口、きす口より被押寄、川内ニ有之番船追散し、少々打取川を被越候付、惣町燒はらひ三之丸へ引入候間、被押詰三之丸限りニ被取巻由候、此日後藤又兵衛尉なともふか手をひ、大略相果候はんと落人口々に申由候事、
一町人百姓等城より出候者を、両手之指を切はたかになし城へ被追入候由事、
一落人之口を被爲聞候得者大坂内、米壱石ニ付百廿日ツ、仕由候、就其致籠城候町人百姓等致後悔迷惑仕由候、如此候間若々不致上着内ニ不圖落去候而者、咲止候間、先々我等惣人数被召列候者早々罷上可燃之由、河内守、山駿河ゟ被仰下候、又今朝伊集院半右衛門罷下候、是者從本上州尤御所様御意之由ニ而被差下候、我等上落(ママ)遅候人数少々ニ而先々可罷上由候、半右衛門者今月六日ニ御陣場罷立候由申候、去四日之ひる程天王寺口題目ニ被構候處ニ加賀肥前守殿人数無理ニ切入候得其、跡ニ人衆不続内ニ切入たる人衆は其侭相果、手負なとは堀きわニそのまゝ有之候を味方ものけ得す、敵よりも討取不成由候、如此各はけし

く此比は被進由申候、然者我等事此内海へ着揃候一日々と相待候得共、終ニ順風無之候間不参候間先々少々ニ而可罷立覚悟候、乍去昨今順風宣由申候、昨日は以之外大風ニ而候間、出船申間敷候、今日者必々可致出船歟と船かた共申候、哀々左様ニ御座候へかしと存候、猶重而可申上候、誠惶敬白、

慶長十九年　　陸奥守

十二月十五日　　家久御判

進上

惟新様

292

重而高屋七郎兵衛差遣候、然者爰許様子ニ付談合之儀候間、早々上洛可有候、此儀無疑様ニ此長銘正宗脇差、貴殿へ進候、委敷は高屋口上可申候、

熊申入候今、今度大佛供養之儀ニ付、駿河機嫌悪敷成申候間、使を以種々理申候得共、大佛之儀者捐置市正を以此三ケ条被申懸候、大坂城を明候か、又屋敷を取如諸大名在江戸歟、是不叶候は母を人質ニ出し候へと、被申候、市正迄色々理申才覚候様にと申候得共、駿府へ申合候哉覧、一圓取合不申候是非ニ此三ケ条不調候は、大阪はか、はるましく候間、つくろひ不成立之由急ニ申候、然者能々分別候へ一ヶ條も同心不成事候、兎角爰許極候間市正駿河返事参候条先々下申候御心付偏ニ頼入候、乍去路次遠候間能々御聞合専要候、謹言、

九月廿三日　　秀頼墨印

薩摩少將殿

293

不存寄候處ニ従秀頼様被成下御書、先以忝奉存候、抑被思召立儀共御座候付而、早々可致上洛候由、被仰下候、尤雖可奉應尊意候、先年石田治部少輔殿被起弓箭之時節老父兵庫入道上方へ有合候故、不能分別相守太閤様之御一筋於関ヶ原雖尽粉骨候、合戦相破御所様天下被成御安治当家迷惑ニ相極候處、被差捨御遺恨則我我被召出、兵庫入道身上迄無異儀被捐置候、然時者太閤様御一筋之御奉公當家は一篇仕候、御所様被成御取立、数年種々御厚思之儀世上ニ其隠無之事候条、背御當家申儀不罷成候、御高察所仰候、將又正宗長銘之御脇差拝領候、誠ニ忝雖奉存候、右之御理御座候間、致返上候、可然様ニ可預御披露候、恐々謹言、

十月十二日　　羽柴陸奥守　家久

大野主馬殿

294

覚

一下納屋より年中商賣方ニ付、役儀被定置候間、少も無未進其年年ニ浦奉行可致合点事、

一魚塩之商賣、納屋主執被仰付候間、所中并田舎方々荷賣之者も、納屋衆へ遂案内賣買可致事、

一魚塩之船之儀、自他之浦ニよらす漕來時者勿論納屋衆へ可買取、たとひ脇より買者有共納屋主取不存候は、、可爲曲事之事、

右、如相定候　堅可被仰付者也、

元和元年九月十八日　　伊兵部少輔

町勝兵衛尉

比紀伊守

山田民部少輔殿

295

猶々、本田上州御懇意不大形候、我等今度急ニ罷下候間、諸事不弁ニ可有之と被思召候哉、種々当時可入物共罷着候得者、振舞之道具已下三拾人分被爲持、其外毎々肴等送り給候、誠ニ奇特成儀と申事ニ候、如此候故、諸事心安く達事ニ候、

熊使札申上候、去ル十四日京都罷立一昨十九日駿府下着、以之外路次急申候付人馬疲、正躰無御座候、両日大雨故爲存より、少遲参着候事

一此地へ罷着、則本田上州へ致参上候由、申入候處翌日大御所様へ言上被成候得者、一段御機嫌克御座候而、唯今成共可被成御対顔由、御諚ニ而候而、國許之儀共種々御尋、就中惟新御事御懇ニ被成御意候由、御城より直ニ上州御出ニ而、細々被仰候、公方様へは御年寄衆中へも未申入候、平生ニ餘り相替儀も無御座候、此中承候躰者、御食一日ニ御かさニ而一ッ二ッ参由候間、早正月より至此比者六拾日程ニ罷成候条、以之外御草臥可被成と存候処、強御座候、乍去一圓ニ奠薬不参御手合之萬病圓と申丸薬迄を、参候由、就夫奉初将軍様各笑止かりニ而典薬衆之薬を、是非共参候様ニと、被成言上候得共、結旬御氣色悪之故、中々奠薬可参儀者絶終候由、能々ニ而御座候、キバと爰許当時之醫者とは何れ勝候哉、なと、御側へ被居候衆へ被仰出、釋尊サヱ薬ニ而者御助りなく候間、不及養生由、御座候とて、各笑止かりニ而候、今分ニ而者御煩急度は御快氣有之間敷候事、上州迄、軽き使御進上候而尤ニ存候、御進物は入ましき歟、自然似合敷御進物も入候はゝ、爰許ニ而談合可申候、將又鹿児島之儀被添御心候而可被下候、猶爰許之様子追々可申上候、誠惶誠恐敬白

元和二年　　陸奥守
三月廿一日　　家久

進上
惟新様

296

一世上太平有之故、公方様御前之様子、其外諸侍着合之躰、從前々も以外花麗成候事、

一江戸諸大名之屋形、皆々結構被調候、当公方様御行儀正敷被成御座、御法度強被仰付故、大名小名茂油断無之躰ニ候間、國之役儀無沙汰ハ可及氣遣事、

一諸大名内衆、馬、鞍、衣裳等奇麗ニ有之候事、

一借銀、過分ニ成行候之事、

一從来年、毎年之可爲在江戸事、右之條々、不輕始末候處ニ在國之衆、夫程ニも不存、無氣遣可送月日事、笑止ニ候、右之条目、壹ッとして銀子不入事無之、就夫、借銀過分ニ成候、江戸屋形、亦者來春上洛之調茂、借銀ならてハ相調問敷候、此返済之儀、諸士出物を以可弁済候、然者、毎年之出物未進之衆有之而、諸人覚ニも不成、銀子も過分不足候事、曲事深重候といへとも、知行可差上儀、餘痛入、何卒可相調歟と数年遠慮而已ニ而、押移候得共、其遠慮共手前之出物相勤衆も、未進之者を見合、致遲々事、眼前候、世上之様を見及候分者、用捨ニ而者家之相続可難成候、我等毎年凌波濤数萬里之、関東へ参候者事も國家之爲ニ而有之事ニ候之處ニ、家中衆奉公無沙汰輩、故家之及滅却候半事、無念之次第ニ候間

自今以後、出物末進衆、不依大名小名知行可召上候、如斯中出候ニ付、諸人も驚、我々耕作をも仕、妻子を可養可致分別事、肝要ニ候得共、國之習ニ而離知行候日迚者、緩々と押移、可及迷惑事、不便ニ候、就中分限之衆相模守、牛菊、下野守、北郷讃岐守、北郷加賀守杯之衆、人之手本ニ成候様ニ被申付、家之奉公可爲尤候、若於油断者、用捨有間敷候条、諸士同前ニ此由堅可申渡者也、

元和二年　　家久御判
七月十二日

三原諸右衛門殿
比志島紀伊守殿
町田圖書　殿

一本
本書前書如左、

一家久以公務費用不足故、七月三日令諸士及寺社、以條書、曰高之内各一旦、献二分半之地、爲公用府庫充足之後、可還与之、如此諸人困害雖察之、否則國家難支保、是以我閨中之官女、過半減除之、於衣食其外之事、亦禁美殺多、諸士其宜得此意云々、

借銀相重、國役依難成相改、條々之事、

一諸士并諸寺社知行、以上領地藏入定置、常諸出物可差置候、若或於天下之大普請、或出陣杯之時者、國役ニかゝる出物可申付事、

一如斯諸士ニ依申付、此中屋形ニ召仕女房衆之内過半ニ相除、其上衣裳等諸人目迄軽く相改候間、是を以諸士可得其意事、

一萬石より百石迄者、二分半之上地、但、百石ニ貳拾五石上地たるへき事

一雖爲買地、上地ニ付不可有口能事、

一諸國、百石より下之知行取は無之処、当家之儀者、数代小給ニ少ツツ知行遣置候故、今迄者依難捨、雖不相改、藏入依不足、今度上地之儀申付候、就夫百石より下は、三分二之可爲上地事、

一借銀返済、大方相済、世上心安時分、本之知行可返遣候間、諸所衆中當時之知行三カ壱并居屋敷於其所可遣置事、

一寺社知行三分二ヲ召上置候分は、別紙ニ相記、其外者惣別可爲無禄事、

付、於其所祈願所、菩提所二ヶ寺は当時之知行三分一殘置、可立置事、

一先祖之寺、一ヶ寺之外、不可有之事、

一三分二召上候而も知行多キ寺は應知行之高、可相續程、知行可付候、其趣別紙ニ有之事、

一右知行召上、藏入之諸所相定、惣配當可有之候間、諸士之知行海邊遠近、高ニ付無親疎可相賦事、

付、知行之高之内、斛より下は可相除事、

一自今以後、知行之賣買、堅可爲停止事、

一藏入ニ可成所早々可相定、

付、可爲海邊事、

一一所衆知行、藏入ニ難成所計於上地者、其理可有之事、

一道具衆、中間、惣別知行召上可爲切米事、

一小者衆、拾石より上は、三分二之上地、拾石迄は惣別召上置、可爲切米事、

一諸職人、知行惣別召上、爲召仕時は世間之有様之賃、可遣事、

一切米取之諸職人は、知行取同前ニ召上、細工之時は、賃雇ひた

るへき事、
一諸社再興、此節は可相止事、
一此中遣候帳、細ニ可相究事、
國遣之藏入、可相分事、
付、上方調之藏入は、國遣之藏入ニ不可相混事、
一自然出陣之時は、一萬斛取之衆は馬五拾騎可召列覚悟、連々不可有油断事、
一貳百石衆迚者、可爲乘馬候之間、兼而馬鞍念を入可用意事、
一台所諸入目、改之事、
一藏入曖衆之事、
一諸御物数年取置候衆、以紀明、早々可致返上事、
付、数年之利、可相加事、
一上知行有之由聞得、當年之出物於未進遂は、當出物之以員数知行召上、永々不可遣事、
一國中惣知行繰替ニ付、百姓取納領主へ於致無沙汰は、稠可致其沙汰事、
右條々、察諸人之迷惑、雖令痛歎、如斯於無之者、國家依難相續、申付候間、各銘心肝、可相随此旨、不依僧俗、若於令違犯者、可有不忠之御沙汰者也、
元和五年七月三日　家久御判
（薩藩舊記後篇巻七四）

298
諸所衆中近年堪忍難成ニ付而方々へ被行散候由候、地頭ニ無届其所ニ不罷居衆者、知行被召上、御内可被召離候、若人私ニ御内相離、誰人ニも於致奉公者、重罪之御曖可被仰付候、此旨を以諸所地頭并曖衆可被入念也、仍御法度如件、
元和八年六月十四日
比志島宮内少輔　國隆判
三原備中守　重種判
伊勢兵部少輔　貞昌判
町田圓書頭　久幸判
喜入攝津守　忠政判
佐多伯耆守殿　参

299
右佐多家文書之内ニ有之、
一書申遣候、然者虎壽丸之儀、爲國分之御子、當家於相續者、龍伯様御一筋弥無別儀候間、於御納得者大慶ニ存候処、別而被成満足之由候條、如右落着候、因慈來月吉日次第虎壽丸國分へ相越祝儀可被言ニ相究候、連々我等内存候得共、國分之儀相急候處、御同懐ニ而祝着不過之候、尚喜入攝津守、伊勢兵部少輔分可申達候、謹言、
元和八年歟
七月十二日　家久御判

300

下野守殿

きしよふもんまへかきの事、

一そなたにたいし、すこしも別儀有ましき事、

一中こといひ候とも、たかひに、隠しをかすいはるへき事、

一子共あまた御座候、いつれも、別儀有ましき事、

一行末そなたかわりなく候はゝ、我身としてかはること、あるましき事、

一そなた心かわり候はゝ、ことはのかきりにあらさる事、

是より午王

右いつはらは

上はほんてん、たいしやく、下はけんらう地神、日本のちんしゆ伊勢天しう大神はじめたてまつり、大隅正八幡大ほさつ、さつまの國新田八幡大ほさつ、日向くま、うどごんげん、とう所五しや大明神、天満大しさい天神、天にあらはひよくの島、地にあらはれんりのゑたとちきりおくものなり、

元和八年八月吉日　　いゑ久御判

長はしさま

旨

かはらしと、二世をかけてちかひてし、

いもせの中は、絶しとそおもふ、

右長はしは、米良三学坊姉ニ而、本名あさと言、黄門様御側へ被召仕候由、三学坊は十八才ニ而朝鮮戰死、名乗重乗と、申候由、

301

「加治木旧記ニあり」

家久公御袖判

一今度東之丸幼少之子共、以同道遠路波濤令難行苦行、加之幼稚之兩子殘置、不淺心遣之儀、難伸言語次弟候處、左様之儀をも不備心肝、結句在江戸留守を幸ニ存、誇自由依怙、御奉公方疎略之輩は、僧俗男女ニよらす不可為御家頼候事、

一諸子、馬鞍弓鉄炮并玉薬等之嗜を忘置、域者家居を荘、域は女房以下衣裳を専ニいたす儀、非本意候間、先武士道具を第一ニ相調、其餘之儀者可為才二事、

一諸士、毎朝可致出仕事、

一加治木之儀者、當時家老分之衆依無之、比志島掃部助、本田源右衛門なと致談合、諸事中渡、若題目之儀有之者、鹿児島へ相尋、其上を以可申付儀定置候条、右之衆中候様何事も可致分別事、

一老中ゟ、奉公之儀可申付時、佗之儀臺度者左も可有候、重而難澁之輩於有之者、無用捨曲事之段可申付事

一加治木衆中之儀者、連々氣任有之候間、留主中猶以可為其分、自然氣任之輩悪行於仕者、右兩人ゟ鹿児島へ申談、曲事之段可申付候事、

一一向宗、幾利支丹之儀、不新雖爲法度、右宗躰之儀、弥堅可爲肝要事、

一夜行、辻歌、堅停止之事、

一先年、一向宗致祈念、男女共ニ致崇敬、於一向宗祈念共仕候儀、重罪之至也、向後如斯輩ニおひては、可處嚴科也、

一御國之為、所之用ニ可立物沙汰、於承付者、役人中迫、可致披

露處、左様無之、落書抔を仕、所を乱候様ニ成行、堅可爲停止事、

一士、町人、百姓ニよらす、博奕停止之事、

付、たはこ、可爲同前事、

一自然、所之煩成族之者、聞立致披露たらん人、可加褒美事、

寛永元年子十二月八日

302

膳付

一常々之振舞者、二汁三菜、但、かうの物共、酒者、三通たるへき事、

一立入たる振舞之時者、二汁五菜、但、かうの物共ニ、酒は三通たるへき事、

一本具、蒔絵物、金銀はめの類、停止之事、

右江戸御法度ニ而候間、御國元之儀も堅可被相守者也、

辰卯月十二日

303

定

一年頭ニ人々之女房衆、御内へ可被罷出時は、瓶子壱双、目籠可爲如例、年其外者可爲停止事、

一(マヽ)年頭相互之礼物停止事、付、連々も可為同前事、

一振舞兼而如御定、二汁二菜并引菜重箱二ツ、酒者可爲三篇事、

一兼而如御定、諸士高貳千石取ゟ下之衆は、木綿ぬのニ可爲着用事、

但、縫箔なとの衣裳、可為停止事、

一同千石取ゟ上之女房衆も、唐物金者入、直高衣裳可爲停止事、

304

一御留守中、諸事御奉公方、各可被心掛事ニ付相應之儀、佗有間敷事、

寛永七年十二月朔日

家久公御神判

一親父讃岐守、從從幼少無両親、氣任ニ成人故、不敬公儀、不睦家臣、我心之任所之不礼、罪科之輕重、譜代忠臣、其外至下々迄、殺害人不知其数之由、世上之沙汰、数年雖聞及、讃岐守非可用意見人之間、思而不能之處、不慮之死去、不及是非也、自上古至于今、人を多害せし輩、短命して亡、其家類觸耳廣眼候、天道之赦無之と、相見得候、讃岐守於長命者、無道之奢不遁天罰、家之滅亡可為必定處、頓被相果、却而家相続之基歟と存候、雖然、其方不改先非、我心を本とし、家老之者共之諫言をも不用、諸事無談合行儀於有之者、一旦被続家候共、可爲槿花之榮候間、被尋聞聖賢之道、明賞罰、以可被守家之長久事、

一北郷家之儀、於當家無餘儀事候間、無恙可有之儀、所希候之事、

一先年太閤公之御時、伊集院右衛門入道幸侃以才覚、分國中從天下被成検地、諸士譜代之在所を繰替、右讃岐守杯も、幼少之時祁答院へ移置、幸侃其身ハ以計策、從太閤公賜過分之知行、庄内へ令居住、依誇邪儀人々誅伐、讃岐守も本領ニ被歸服候事、偏ニ我等添心候儀、其方者未生已前之儀候間、家中之衆へ被相尋、可被聞達候、如此次第讃岐守不被添心肝、忘却被背本意候事、

一山城守、被相果以後、鹿児島へ以使者被申越趣は、山城守事毒害ニ被逢候儀、迷惑之由候間、如何様成證拠有之候哉と、尋究

候処、一向無筋儀ニ而其使別ニ無申分相歸候、何之故ニ山城守を聟ニ取候程之入魂ニ而、左様之分別可有之候哉、又我等不存儀ニ、下々として何之用ニ左様之企可有之候哉、以ヶ様之儀、令察候ニも讃岐守分別くるひたる事相知候、此儀も達而於及沙汰者、何と可成行候哉、畢竟北郷家之儀、相立度存、令用捨、於于今其方へ無沙汰無之儀を以、可有分別候事、

一讃岐守被致悪行事、定而側へ召仕候衆之、内談をもいたしたる讒人可有之候、左様之者一刻も側へ不被召仕、追放尤候、若其者於働雅意者、可被行死罪候事、

一自今已後、家中之者、或者死罪、或知行没収等之沙汰、於有之者、鹿児島へ被遂披露、以其上可被相行事、

一鹿児島屋敷へ被移、世上之躰をも被見習可爲尤候事、

以上

寛永八年三月廿八日

305

きん中様よりとふかりと申、御ことをはいりう申候、みことなる事、中々申はかりなく候、ふくろ、はこ、にいたるまて申へき様なく候、御たき物も、はいりう申候、かやうの事はためしあるましきよし、申事候、まことにありかたき事其にて候、やかてくたり見せ可申候、ふくしゆとの、いつれも〳〵、御ゆかしく候、いつとなく存候事候、又々かしく、

三月一日　　ふしみより　いゑ久

や、

旨

306

寛永九年六月十一日、家久出袖判之教書一通、毎條、言應諸士所領之分限蓄武具、雖急卒之出陣、可爲事定之、備是良將者、平世亦不忘乱之義呼、自是後所載定出陣之備、或點検武具等之書記、皆本于茲矣、

御判

覚

一應知行之高、今度軍役之賦申遣候間、以此趣、於其元惣賦、能々念を入、相究其書立早々可差立事、

押札ニ、右惣賦仕、書立今度差上申候事、

一今度申遣候役儀、致其用意、自然之時緩在之間敷との致談合之判、可差出候、若、難成人有之者、其書立可指出候、即知行召離軍役可相勤衆へ可遣事、

押札ニ、右銘々ニ談合之判申候而、書物差上申候事、

一此軍役之趣、一天下之法にて候処、若新儀之様ニ存、理くつかましき儀、申輩於在之者、曲事可為深重事、

押札ニ、右諸士へ申渡候、謹而承屈申候由、被申上候事、

一從貳百石上之衆、具足并馬之鞍道具用意候衆之書立、可差上、慥なる検者相廻、可書記事、

押札ニ、右道具、以書物被申出候、検者可相廻儀、今少得御意候事、

一他國之侍者、或譜請方之用意、或俄ニ軍役之人数可入時之用意を、題目ニて、具足、馬、鞍、手前々々、可入程之人数之儀を、不断無油断心懸候故、家内之躰者、如形知行を取候衆も、やう〳〵朝夕之食を、女房衆調候而、膳をもすへなと候躰ニ有之由

候處、國之儀者、具足、馬、鞍、人數之用意者無之、其身々々、分限と不及躰ニ而家内之人をも餘多召仕、緩々としたる由、取沙汰候、是者町人之作法ニ而、侍之非覚悟候間、是非共自今已後者、先軍役之儀を可致題目儀、可爲肝要事、

押礼ニ、右之趣、謹而承届候由、諸士申候事、

一知行百石取衆、又無足之衆にも、手前成候而自然之時、馬を可乗旨存候者あらは、其身之好次第、鹿児島中無用捨、不断馬ニ乗候而可罷行儀、可爲尤、若一陣も乗馬にて爲相勤者、其以後者、知行を可被下事、

押礼ニ、右銘々ニ、以差出被申上候事、

一右之類之衆、就御免鹿児島中馬ニ乗候而候を、なぶり、かたきのもの在之者、被聞召付次第、重科ニ可被仰付事、

押礼ニ、右諸士へ慥ニ申渡候事、

右條々、不可有違篇者也、

押礼ニ、右條々、八月九日ニ御返事、申上候也、

寛永九年六月十一日

307

一國家之爲ニ可成儀を無言上して、如何様ニ而も御意次第と被申上候儀、不可然候、存寄之儀者無用捨被申上候はゝ、被聞召届以其上可有御分別之事、

一國之儀を預置候間、老中衆手前之行儀を能々被相嗜、諸人も殊勝ニ存候様、有之候而諸沙汰尤之事、

一口事之沙汰、前代ニ相替、論人を押のけ贔屓々々ニ口事之趣、申出候間、誠ニ無道之至、當代之主人失外聞候、自今以後於口事沙汰之座敷、其論人之親類方人等差出候、堅可爲停止事、

一口事沙汰、口事聞衆聞定候、評議、始終不相替様ニ、曖之首尾可有之事、

一俄ニ弓矢可有之時之儀、連々談合不可有油断事、

一當家ニ前々ゟ嫌來候、一向宗、南蛮宗之儀、弥猥ニ無之様ニ沙汰肝要候、右宗躰之於顯然者、其科稠敷可申付候、殊ニ南蛮宗之儀者、當御代天下稠敷御法度之儀候間、不可有緩事、

一御藏入百姓手前より、諸役人へ節々之礼儀停止之事、

一諸士、町人ニ目かけ候者共ヲ、致馳走何扁令贔屓候由、令承知候、向後、此儀可爲停止候、緞此中目掛候者雖有之、此節ゟ可相離候、町人之儀、町奉行を差置他ニ付而、諸沙汰いたす者於有之者、目掛候町人共ニ、其科可相懸事、

一百姓、士ニ召成候儀、前代より堅法度之儀候、若近年猥ニ成行様ニ於有之者、曲事之段、可申付候事、

以上

寛永九年九月八日

308

一主從八人、寄高五十石

高百六十石より二百石取迄、被下分、

一馬壱疋、

一さし物、

右馬ニ飼を不断者被下間敷候、御出陳之前稜より、二舛ツツ可被下候、

一主從六人、寄高百石、

高百石より百五十石取迄、被下分、

一馬壱疋飼者壱舛ツツ不断可被下候、

御出陣前ゟ六舛ツツ可被下候、

但、雑穀たるへし、

一具足、壱領、

一さし物、

右寄高百石之段錢六拾貫文、

但、百石付三人役にして、壱人付貳拾貫文ツツの夫錢ニ相定、

寛永九年十二月二日　兵部少輔

左近將監印

攝津守　印

下野守

309

其許家老役之衆、無人候之間、若年候得共、彈正大弼へ、申渡候条、諸式談合尤候、猶委細は両人可相達候、恐々謹言、

寛永十年

極月六日　家久

川上左近將監殿

下　野　守殿

310

一書令啓候、然者、其許家老役之衆、無人候之間、其許之儀、下野守同前ニ、諸式沙汰尤候、委曲、両使、可相達口上候、恐々謹言、

寛永十年

極月六日　家久

彈正大弼殿

311

家久公、北郷式部太輔忠直へ、御教訓、

覚

一知行高壱萬石ニ付、出陣之時は馬廿騎充之賦ニ候、然者其方應知行三萬石候へハ、惣別、家中より出候馬六十騎にて候之間、諸士より出候馬之数、いかほとと被相定、又、其方厩ニ被飼置馬数、合六十騎相定たる外ニ可被飼置儀、かたく可爲無用事、

一駒犬、十疋より上は、可爲停止事、孟子ニ庖ニ有肥肉厩有肥民有饑色野有餓莩、此率獸而食人也と候事、

一大事之出物有之儀候間、何事も心のまゝに用物共被申付、就中從京都下物なと過分有之儀、可爲停止事、

一衣裳、諸細工方、有度まゝに有之間敷候、君子は憂道而不憂貧、と候間、衣裳其外諸道具等を専ニ候て、下々のつかれ候儀道之外にて候事、

一鷹、多く被召置ましき事、

一諸士、被召仕様、北郷殿前々よりの次第、無相違やうに可有之事、

一大酒、可爲停止事、

一萬事を差おかれ、自然弓箭なとの時諸人つかれす候て、用ニ立候様連々覚悟肝要ニ候、北郷殿跡を被継儀者、當家のために成候様ニとの儀候処、むさと北郷殿家中くたひれ行候はゝ、其方ふかくに可相成事、

一諸士、下々ニ至迄、自然罪科可有之時者、家老衆へ、能々内談候而、鹿児島へ被申越、以其上いか程ニも可相済心ニ任せられ候而、鹿相ニ有之間敷事、

一學文ヲ専可被心掛候、家國を治事学文ニ爲過儀有間敷候事、

一百姓共、被召遣様稠無之様ニ可被入念候、百姓労候得者其國其所如無ニ成候事、從上古至于今眼前ニ候、是故ニ論語ニも節用而愛人、使民時ヲ以テス、と候事、

一惣別、百姓、町人、以下帯紐を解たる様ニ存、當代幾久しくと、仰候而こと、家も繁榮ニ可被目出度候、自然、左様之儀相替り、下々苦しみ候やうニ成候はゝ、天罰遁間敷候間、私之不及看經、右之心持さへ正敷候はゝ、緞令祈念等無之候共、しねんニ可有冥加事、

一祈念、祈禱も底心尊く思ひ、慇懃ニ有之而こそ、佛神之守も可有之候、信心有之とて、朝夕訳もなき様ニ、されことの様ニ祈念、祈禱、も候者、還而其奇特有之間敷事、

一知行も、國も同前ニ而候得共、其主人之心持ニより、人之多少有之由、古文ニ相見得候、其主人心持能候得者、人多出來候、心持悪候得者、人退候、就中、武家へは人多無之候而者、弓箭は不罷成事ニ候事、

一身持輕々敷無之様、可有分別候、論語ニ君子不重、則不威、学則不固、とは見及候ニも如斯、文章身人身持輕々敷候得者、内之者不恐候、五人、三人召仕人さへ、内之者恥恐れ候はねは、何事を申付儀も、不調候、況一郷一郡之爲主人は、先我か行儀を慎み候而こそ、下々も其躰を見習、可然道ニ可入候、氣任ニ我侭ニ分別候而者、諸事相調間敷候、天下は天下之天下也、非一人之天下と候事、

右條々、堅被相守、北郷家繁榮ニ而、當家へ可被抽忠節覚悟、可爲肝要者也、

寛永十一年十一月廿六日

北郷式部太輔殿

312

加世田小湊之内、中塩屋屋敷十石之儀、永々被召付之由、以日新様御證文趣、御侘尤候、如斯御先祖之御證文共候雖寺社家多く有之、依御法度、近代皆々被成毀破候、貴寺之儀者、無餘儀雖爲御寺、餘御知行少地之儀候間、塩屋中釜屋敷之儀、被進付候、然者、從前方相付候御領地候也、仍如件、

伊勢兵部少輔　貞昌書判

寛永十一年十一月廿八日

川上左近將監　久國書判

島津彈正大弼　久慶書判

熊嶽

寶福寺

313

寛永十一年十二月、家久擧從義久至家久盡忠而奉事功當家、家老之者姓名粗記、小傳等欲傳于不朽、且、不忠之者亦、自見傳中、嘗聞昔時、漢武治天下之後、画忠功之臣於麟閣、長示不忘、如今家久之書記、亦画圖之情乎、委備于書中矣、

覚

一少年之時、從太閤公、家督之儀、被仰出、高麗へ相渡、萬事無案内候処、龍伯公、惟新公、被仰談、伊集院下野入道抱節、鎌田出雲守比志島紀伊守を被相附、朝夕側を不離、内外共ニ可然様ニ精を入、就中伊集院右衛門大夫入道幸侃誇威勢國を傾んと

いたし候を、右三人見及、龍伯公、惟新公へ奉得御内意、諸人幸侃へ心を合候はぬ様ニと、廻計策、高麗より歸朝以來ニも國之仕置等念を入、別而石田治部少輔乱劇以後、國家危く成行候時も抽忠節、道を正しく相守候故、國家無異儀安全、當家之中興、誠其功不可勝計也、因慈、比志島、宮内少事、前方不相馴、心中之邪正を雖不知、紀伊守跡を重し、家老役申付候処、無知無能にして、背旧政、專新儀、我志之所之ニ任せ、蓄金銀、愛酒女、且又内者殺生等を輕し、無道之驕有之間、諸人見せしめの爲、種子島へ令流罪、命を助置候得共、生付不神妙之間、我悪を悔分別改重而可抽奉公志者無之、還而催悪黨、讐を可致志連々顯然候間、令行死罪候、自此方義理は不違候処、右之悪心故夫罰不遁候事、

一山田越前入道理安事、先年大友家六ヶ國之軍兵日州表へ取掛候処、爲高城主頭、連々城を可持覚悟有之の故、叔父中務少輔始、歴々令籠城、於彼地支留、龍伯公、惟新公其外、薩、隅、日三州之人衆、不殘差合、安否之合戰有之候而、被得勝利、全并三州、加之、九州大形雖屬幕下、太閤公天下之大軍を引卒し給ひ、日向、肥後、兩口より被爲押入候處、於又高城、相支、彼地ニ而和睦ニ成候、然処、肥後表者、出水より早々使を出、義虎太閤公へ被中入、何之無子細も、川内迄被爲押入、無正躰候故、龍伯公被成落髪、太閤御陣へ御参候而、當家相続候、夫より以來理安事龍伯公御家老役被仰付、別而被召仕候事、

一三原遠江入道正庵事、抽奉公、依爲義士、御家老役を被仰付候由、古來之衆物語、委く聞傳候、不幸にして子孫断絶之故、其跡を同名備中守令相續候間、近年家老役申付候事、

以上

寛永十一年戊十二月晦日

猶々、今度改ニ付所々書物之案文、札之手本、則進之候、將又、前方高札之趣之ことく、きりしたん宗旨之者申出候はゝ、褒美可被下候間、可心懸旨、可被申渡候、已上、

追而申候、書物之案書四通、并ふだの本五とをりうつしをかれ候はゝ、此本は狀と同前ニ次第ニ可被相廻候、

從長崎、半天連相走候付稠可相改之旨、被仰下候、當國は、惣別手札を取往還可仕様申付候、諸所之人衆、男女共ニ、當歳子より百歳迄、不殘木札を作、鹿児島へ所之衆、壱人、庄屋相添、持参候而燒印判を押、自由可相達候、判錢者出ましく候、札不取者は、十一月朔より從鹿児島検者を廻、見合ニ可被搦取候間、堅可被申付候、

一旅人行脚帳、一札、但、札出ましく候、

此条題目之改ニ候、堅所へ留置、可有披露候、

一地下人、衆中、在郷當年子より百歳迄、札可差上候、

一地下人之外、人之披官浮世人帳一札、但、札可差上候、

一居付之旅人、但、書物之上を以札可差上候、

一居付之乞食帳、一札、但、札可差上候、

一せいらい村、可爲別帳候、其内ニ旅人居候者、旅人帳一札可差上候、

右無油断、早々此方へ可有首尾候、恐々謹言、

拾月十七日　　鎌田出雲守

三原左衛門佐

山田民部少輔印
川上左近將監
彈正大弼

中郷　高江　水引　高城
曙衆中

右寛永十二亥年、初而札改有、同十六年卯迄済、

家久公、北郷式部太輔久直へ御教訓之御条書條々、

一諸事、仲左衛門尉并嘉左衛門尉杯へ、無談合麁忽成儀共、直ニ被申付由聞及候、氣任之至と存候事、付、重而公儀立たる所へ何事ニても使杯可被遣時者、河上將監、伊勢兵部少輔へ被相尋、以其上いか様ニも可有分別事、

一於國許、何篇心之侭ニいひつるには可相替候間、物こと無堪忍、心之侭ニ可有之儀、不可然候事、

一諸藝嗜方之儀杯一興ニ候而、少取付候而者、又、別事にうつり候様ニ聞及候、左様ニ候而者何之稽古も、成間敷候、早意、是も心中之不正と存候事、

一学文を第一ニ被懸心、以其道、修身齊家君臣之道を正、向後へ薩州へ忠節之志可爲肝要之処、学文之道ニも不入任所私情之欲、被行候者、一も善事無之、往々其身を可被亡と、笑止ニ存候事、

一餘力之時歌道をも被心懸、尤候、風流之心なき人は非侍之類、萬賤しく候間、能々可被相嗜事、

一家中之侍至下々迄、能々被加憐愍候而、行儀法度之儀はいかにも稠敷可被申付事、

一何方より歟、大犬爲來由聞得候、於爲元者連々心易爲相馴人有之ましく候、大犬者少身之人へは無之者ニ而候間、定御歴々より所望候歟、左様之儀何と被申談候哉、笑上千萬ニ存候、惣別犬者何之役ニ立候哉之事、

一先日從加治木之使ニ參會之時、無面目様被仕懸、爲失外聞由、其使之者かけ〳〵爲申由聞及候事、

一上屋敷芝之輕衆被近付之由聞及候、是又不入事かと存候、惣而輕衆なとの申事は、一も後学に可成儀は無之、道ニ至らぬ事迄（本ノママ）ニ候間、左様成衆とさはれ候は早竟、其方之心ニ爲似故歟と存候事、

一薩州之舍弟と申、北郷家之事も從本々重く爲有之由聞及候処、小姓奉公人なとの様ニかろ〳〵敷身を持成候様ニ聞及候、無念之至候事、

一先年大龍寺、喜入久右衛門尉を以申渡條目之趣、曽而無承引と見及候間、以卵打石様成異見不人儀候得共、薩州之爲候間、萬一可立用儀も哉と存、如斯候事、

一横目を付置候間、如斯異見候儀、少は用ニも立候哉、又曽而左様ニも無之候哉、後日、委敷聞届用ニ不立様ニ候はゝ、重而は少も異見がましき儀、申間敷事、

以上

寛永十三年子
五月十五日

伊勢兵部少輔殿
川上左近將監殿
下野守殿

316

覚

一永々病氣ニ候故、萬事を指置一方ニ養生候間、各諸事可被入念事、

一評定所之諸沙汰、延々ニ候而不事済由候、近年は事も多候ニ付、年寄衆使者なとも餘多相加候処、或誰之留主、或誰之煩、なとと候て押移、傍輩中之挨拶を專ニ、私かましき儀第一ニ而、國之評議は第二第三ニ候かと諸人取沙汰候由、不可然候事、

一借銀方之儀は、無案内之事ニ候爲其國を預置候条、各一途可有談合候事、

一藏入之被申付様緩ニあるよし、百姓は勞入候由聞及、無心元候、一途可有談合候事、

一口事沙汰之儀、人ニより人之存分早々相達、小身之者共は兼々不申達、いつまても其分ニ候由、風聞候事、

一番緩候由、聞通候事、

何事も老中衆、用捨かちニ而候由、聞得候事、

以上

寛永十四年七月二日

右児玉筑後守殿、東郷肥前守殿ニて被仰出候由ニて、此方へは新納右衛門佐殿を以、彈正殿、民部殿、左衛門佐殿より承候事、

丑七月三日之晩

317

尚以、毎事大学助へ内談ニ而、此方へ可有注進儀、於有之者、無油断、不寄何時、早々可被申越候、以上

國之躰依邪僻、危成行候由、令承知候、寔頼朝以來相續之所、於我等家督之時節存亡之危難、不堪愁歎候、因茲、今度野村大学助へ申含指下候間、被遂熟談、東郷肥前守なと以密談、其元之様子、細々、伊東二右衛門尉ニ而可被申越候、將又家老職之儀申遣候間、万事被相考、諸人神妙存候様、分別肝要候、不可有緩疎候、恐々謹言、

十二月七日　　家久

彈正大弼殿

318

年首之吉兆多幸々々、不有尽期候、此等之爲祝儀、太刀一腰、馬一疋、小袖一重、慇懃之至候、此地萬事無相替儀候、將又、何たる嗜之儀共候哉、学文無油断、被相勤肝要候、猶期來音候、恐恐謹言、

正月十五日　　家久御判

又八郎殿

319

北郷讃岐守忠能者、因より島津之族ニ而、領許多之采地、居荘内都城、爲日州之藩屏、雖然、忠能、其爲人以從幼早孤、專我意成長故、其行違※倫之道、賞罰不明、殺忠臣無罪、近邪曲奸巧之臣、流放竄、殛不知其数、北郷家至于此時、傾覆幸哉、忠能以去月五日卒、於是家久書数件之教訓、使川上式部久國、仁禮藏人景親、示子出雲守忠亮、如右猗歟、爲君師之道、其義斯重哉、

320

前出三一九号ト同文ナルヲ以テ本文省略ニ從フ

321

松平大隅守召列候人数

一乘馬、二十騎
外ニ替之乘馬、十騎
一小々姓、十人、
一陸之者、百三十人、
一小者、中間、道具之者、二百二十人、
一又小者、七百九十人、
都合、千百八十人
寛永十二年四月三日

322

松平薩摩守在江戸ニ召列候人数

一乘馬、二十騎
一小々姓、二十人、
一陸之者、二百人、
一小姓、中間、道具之者、百十人、
一又小者、八百九十人、
都合、千二百四十人、
二口合、二千四百二十人、
寛永十二年亥四月三日

323

急度申入候、然者、天草之儀ニ付、近所迄人数差遣、御下知次第天草へ可罷渡之由、申付候処、從牧野備前守殿、林丹後守殿、先々此方之人数可引入之由、被仰出候間、任其意候、天草之徒党其、彼地爲明退様ニ申候、巨細之段者、定從肥後可被申上候間、可被聞召達候、恐々謹言、

十一月五日　　家久御判

堀田加賀守殿
阿部豊後守殿
松平伊豆守殿
土井大炊頭殿

324

一書申入候、

肥前國於有馬表、松倉知行之百姓、令一揆之由、從肥後表注進候間、其趣先日申入候、肥後之内、寺沢兵庫頭知行、天草へも右之党類共、令蜂起之由候付、近所之儀候間、先境目迄人数少々遣置、下知次第、天草へ可致加勢之由、豊後之御目付衆へ去ル三日、以早打申断候、彼表之儀色々世上取沙汰申候得共、正儀不相知候間、爲可承達、去朔日天草へ使者差遣候得者、罷歸慥成趣承候上、可致其心得候事、

此中、節々注進雖可申入候、天草へ右之使遣候者、未罷歸候付、押移候、先々唯今之様躰爲可申入、如期ニ候天草へ遣候者、定一揆之居所、又何程之人数ニ候哉、能々爲可見届、遲々と令推量候、將又我等分國中貴理師旦宗之法度弥稠申付候、若又、一揆之者共、落來候はゝ、不遁様ニと堅申付事ニ候、尚、追々可申入候、恐々謹言、

十一月八日　　家久御判

土井大炊頭殿
酒井讃岐守殿
松平伊豆守殿
阿部豊後守殿
堀田加賀守殿

325

主従四人指宿内蔵助殿、同三人種子田喜右衛門殿、同貳人荒田助左衛門殿、同貳人種子田八右衛門殿、岩田藤七兵衛殿、吉田喜之助殿、有村少左衛門殿、田島甚右衛門殿、肱岡助兵衛殿、右之人数一左右次第ニ可甲渡候間、被打立加瀬之浦へ被差越、彼方ニ而飯米被受取、山田主計助殿、下知次第乗船可有之候、門取之外は、四人相中ニ夫賦付人躰拾貳人、外持夫二人、

右人数一左右次第、貝を吹せ可申候間、則被打立、名護浦可爲乗船、三枚帆二艘賦付可申候、壱艘ニ付、人躰四人ツヽ、可被乗候、四人間ニ相中、夫壱人ツヽ賦付何申候、飯米も福之江ゟ相渡儀候得は、被取籠候間、若無御用時、返上成兼可申候条、三日飯米手前ゟ用意ニても、可然候、難成衆之儀ニも可被受取候哉、御談合有度候、長崎迄被差越儀ニては無御座候、

以上、

亥七月六日　　賦所

指宿内蔵助殿

326

覚

一一夜々々ニ、番之人数一度々々ニ、可被書記事、

一人数遠島崎渕杯へは、小屋をも可被掛事、

一人数不足之所は、最寄之奉行と以相談可被立渡事、

一横目衆廻し候間、内々可有心得事、

一遠所ゟ人数被寄候はて不叶所は、人数可被申渡候、左候而此方へ其段早々可承候事、

一獵船は、昼は沖見渡候所迄は、不及口能、船影不見所迄、被遣出儀堅法度可被申付候事、

一自然所ニより氣任之外城有之候はゝ、則無用捨可被申越候事、

八月七日　　因幡守

彈正大弼

阿多衆中

327

御案文写

一一書申入候、然は先書如申候、天草一揆之働様見せニ遣候者、罷歸定而其許へは最早疾ニ彼表ゟ注進可申候間、遮而不及申入候、國境之儀候間、乍同事爲申來趣を申入候事、

一去ル十四日之朝、天草之内大島子、小島子、と申所を、一揆之者共致放火ニ付唐津方之衆、本砥之渡を越押寄候処、敵方ゟ大勢ニ而仕掛、唐津衆打負、癈軍、歴々衆四五人討取候、其黒具足之武者は、本砥之渡口ニ而、討死爲申を見爲申由候、一揆之者共は、鉄炮之者六人ニ而御座候、其内両人先ニ罷歸、右之趣申事候、殊之外唐津衆癈軍ニ而候つる由申候、扨々殘多腹之立申事候、

一右合戰之日、放火之躰見及候哉、口之津ゟも彼宗旨之者共、小船餘多ニ而天草へ爲來由、

一當時之躰を承候分は、一揆之者共大畧百姓共之由候、若其内ニ自然浪人之者共も少々可有之哉、其列之者共、或五千、三千、雖有之大將かましき者有之間敷候間、中々臆病之行可有之候間、少々人数被差遣候はゝ、可相済歟と存候、唐津之衆定而若者共不圖仕掛、手合ニ崩立候而、惣崩ニ爲成者歟と存候、我等國之者共計ニ被仰付候はゝ、無異議可申付候事、

一先書如申入候、天草近所之者共へ先申付、獅子島へ遣置候、今

度合戰之之儀相聞得候而ゟ、追々人数申付如長崎表遣候、尤、
御下知於有之は、麁相ニ不罷渡、御左右可相待之由、申付候事、
一天草へ隣ゟ人数可遣之由、若被仰出候は、、當國へは三日も遲
く可相聞得候間、筈合申間敷歟と、是のみ心遣存候、將又、先
にも如申候、一賦之者共次第ニは訳もなく成行、方々へ可落散
歟と存候間、分國中之儀左様候は、、不遁様ニ弥堅申付候、尚、
相替儀御座候は、、追々可申入候、恐々謹言、

寛永十四年十一月七日　　家久

堀田加賀守殿
阿部豊後守殿
松平伊豆守殿
酒井讃岐守殿
土井大炊頭殿

328

一銕炮五匁、池之原伊予守殿、　一同五匁、山田主水殿、
一同七匁、池田内膳殿、二十一人、畧、
一山田主水佐殿、一人、　萩原藤右衛門殿、一人、
一池田内膳殿、一人、　坂元与左衛門殿、一人、
一寺正覚寺、一人、

寛永十四年丁丑十一月十七日

右弥寢新助殿、被写置候本を以うつし置、尤、本書ニ二十
一人名前畧スと有、惜哉、

329

吉書

一神社、仏閣、修造興行之事、
一可専勧農事、
一可徴納國々年貢事、

右任三ケ条之旨、可有沙汰之狀如件、

寛永十五年正月十一日　家久御書判

330

家久公御遺言

一可詩成（ママ）専、
一御子様多御座候間、如何様御分別疎御方も可有之候、雖然、被
成御救御家御相（ママ）肝要之事、
一欲心之事、
一後世御供衆、御留之事、
一中納言之御位ニ御座候間、上方へ被成御尋、御位牌之様子御定
之事、
一御位牌脇へ五人之事、

以上

花にめて、月を心の内にこそ、うきよのほかの佛なりけれ、

寛永十五年二月廿日

右伊勢兵部貞榮文書之内、

331

下國以後不通候、無何事令着陣、武庫様懸御目、多年之本望此
事候、龍伯様、御無事御座候哉、旦暮御床敷奉存候、抑兩人事、
就奥方別而頼置候、定可爲辛労候心よはく遠慮なとニ而緩成儀於
有之者、後日至兩人稠敷可令沙汰候、女方之儀者、平生法度たゝ
しき家中も、人間之迷ニ而不可然儀共出合外聞悪儀、毎事有之事
候、況、御家内之儀者ゆるかしき由兼而承及候間、いさゝかもう

つけたる儀共見及、聞及、切々不寄男女可申聞候、誰ニ而も候得、理くつたてなといひ候はん仁は、心付可申越候、龍伯様御座候間、達不及申候得共、歸朝之刻、留守様躰可相尋候間、兼而如此候、不可有油断候、恐々謹言、

霜月十六日　　忠恒御判

平田豊前守とのへ

川東善左衛門とのへ

332

一人数六十五人、　一番立衆、

右島原爲御加勢、可被罷立候、分限之衆は、人数成次第、無足之衆は、三人間ニ夫壱人ツヽ、才覚を以可被召列候、賃、後日可給候、鹿児島持合之知行所之衆、領内ゟ可被召列候間、所よりは被構間敷候、持道具は鐵炮、弓、鑓、たるへく、普請具は、先日被仰渡様ニ可有推量候、飯米は出水船元ニ而可相渡候、物頭より指出を以可被相請取候、

寛永十五年五月五日　　鹿児島　賦所

阿多衆中

333

其以來不申通候之處、此度栗野迄爲音信着物送預候、令祝着候、殊我等爲祈念御神前至別而参上勝之段、御太儀難申謝候、弥御祈念頼存候、就中、武庫様、長々御在陣御留守之儀、栗野御見舞雖無申迄候、御入魂肝要候、万々重而可申候、掘者渡海之事、致延引何とも心遣迄候、猶期後音時候、恐々謹言、

九月廿日　　又八郎　忠恒御判

334

神鏡院　御同宿中

太閤様以御諚分國検地之儀、依被仰付、諸侍知行就改易、本領相離殊打上候、用数無足候条、可爲迷惑候、雖然、知行方之儀、龍伯様、武庫様へ得御内談候間、各之儀別而入念、可然可申付候条、聊不可有機遣候、狀如件、

文禄五年　正月廿日　　忠恒御判

源七郎殿

335

今度者其表働之儀、頼存候処、別而被入精人数等大勢被相催、外聞可然之田、其聞候、乍案中連々之眞實、令顯然感入存候、剰、山田之儀、被切崩一段被成辛勞、手廻之衆、或討死、或被蒙疵之由、各軍勞之儀、難述礼詞次第候、然者、弥可取詰儀簡要候間、爲可遂談合、河上左近將監、伊勢兵部少輔差越候条、被成御熟談委可被仰越候、仍雖不可然候、刀一腰進之候、猶兩人可申候間、不能詳候、恐々謹言、

慶長四年　　少將

六月廿七日　　忠恒御判

中務太輔殿

336

今度和睦就調達、度々上洛感悦之至候、爲其忠節、知行三百石宛行候、弥可抽奉公事、可爲神妙候也、謹言、

正月四日　　忠恒御判

旅庵

尚々、如此申候へは、何そ事ありうに候へとも、勿論別之子細無之候、人は又何かとおはねを付、可申候間、何となきやうに、被仰付候而可被下候、以上、

追而申上候、細島迄迎之儀、被入御念被仰付候て可被下候、世上之外聞日者心遣之儀も御座候間、鹿児島へは鎌田出雲守一人罷居、椛榷、桂太郎兵、相新、なと皆々参候やうに、御故実尤候、伊平平、なとも、遮而御用無之候はゝ、御遣奉頼候、元巢事も老者之儀候間、不用も不有之候、ちと被仰聞尤候、猶追々可申上候、恐惶謹言、

正月七日　　少將

忠恒御判

進上
惟新様

猶以申上候、古織部殿琉球人のうたを萬事けいこにて候、如何様数寄ニ入たる事こそ可有之候間、惟新様も内々被成御稽古尤奉存候、織部殿如此故ニここもと数寄をたち皆々被取持候事、

此方爲御見廻、先日被成御上候、早使先々当時之様子爲可中上、差下申候、

一上方相替儀無御座候、我等上着仕候へは則本多佐州、同上州へ、以書狀中入候、一段懇切之御返札其ニ而御座候、御前別而御機嫌能候間、可御心安候、

一伊東殿、秋月殿、高稿殿なと、丹波之御普請場へ被有之候處、我等伏見へ罷着候由被聞付、或日歸、或一夜留杯に、爲見廻、被相越候、右三人之衆は大坂へも人を被付置、川口迄迎共被出候、御前之御取持も悪候はゝ、如此各御取持も有之間敷と存、祝着申候事、

一藤堂和泉守殿も丹波御普請奉行ニ而、此中彼地へ逗留にて候、御普請相済、伏見へ被相越候間、彼宿へ見廻ニ罷出候処、殊外之馳走ニ而乱舞、躍なとさせられ候而、種々會尺共御座候つる、駿府、江戸ニても御前御取合可有之由候事、

一於爰許、隠岐守殿御懇不淺候、其外板倉伊賀守殿も別而御懇ニて候事、

一來春禁中可爲御普請由候、然は公家ニなられ候大名衆へ、可被仰付由候、如此出合候刻、板倉殿御前ニ被有合、御意之通聞せられ候とて、物語候、薩摩なとは遠國ニて候間、人数上方へ不上共、日向邊之松材木なとを船にて登せ候はゝ、可然候半かと、御意被成候、如此候も御普請御積りなと不相定、以前ニ人之手を不付やうにと、思召がやうニ被仰出候、奇特成御事ニて、よき御贔負をもち申候間、世上人の心遣無之由、板伊賀殿い候ひ（コマ（いはれ候））事ニて、御座候つる、何も來年御普請之様子は定而、委承究可申下候事、

一羽左太殿、細内記殿、寺志摩殿、竹中伊豆守殿、毛利伊勢殿、此衆は尾州名護屋へ御入候、是も我等上着之由きかせられ、早早預使候いつ比駿河へ罷下候哉、日限御聞候て、中途迄可有御出由御懇ニ被仰越候、從細内記殿は、両度迄使給候以之外御普請ニ取紛ニ而候処、遠路へ如此候儀共、皆々御御眞實と申事候、

然は我等通道之儀、美濃尾州一の筋は、普請衆人ごみに候間、
從伊勢地舟ニ而、三河へ渡候而可然由、羽左太殿、寺志摩殿な
とより被仰越候間、如此仕候、就其渡へ舟なとも右之御衆可有
御馳走由、其聞候、藤堂泉州へ舟之儀可有馳走由、山口殿迄被
仰候由候事、
一名護屋御普請之儀、尾張國中ニは石曽而無之候故、三河、遠江
境より舟にて三日路ほとおくよりとられ候ニ付而、以之外造作、
日本之普請はしまりてよりかやう成普請は有之間敷由、其沙汰
候、方々之商人共くりなと持來候、殊之外高直ニ賣候を買候ニ
付而、金銀之人事難述言語候由候、羽左太殿なとは大方貳千貫
目程ニ而手前之分可相調被仰候つれ共、三千貫目程ならては、
可難調との取沙汰之由申候、日本ニ而は一二番之かねもちニ而
候由、申候得とも、今度之御普請ニて蔵あき可中候由申候、扨
扨如此候処、我等へ貳百貫目借給候、此節は難受取存候斟酌之
様ニ申候つれとも、最前約束之はずにて候、是非共可被渡由候
相調申事候、御普請を不仕候さへなりかね候処、御免許誠ニ難
成儀申も疎候事、
一丹波之御普請は、石場も近く、其外心安可早々相済申候事、
一琉球人一段めつらしく候由ニ而、各御取持不大方候、板倉殿、
藤堂和泉守殿、古田織部殿なと別而おもしろかりニ而板伊賀殿
へも、藤泉州も、山駿州なとも、振舞にて、藤泉なとは金子を
琉球相中ニ被遣候、駿府、江戸も琉球人可有御覧とて、殊之外
御催之由候事、
一唐へ人数遣可申儀、題目ニ被仰付ニ而は無之候、當年御普請爲
可被指置世上へ之聞へに、被仰出たる由、板伊賀殿、被仰出候、

339

ばはんなとを、少々遣候而可然候はんよし候、猶、駿府、江戸
之様子從鹿児島へ便召列(ママ)候間、追々可申下候、誠惶敬白、

七月廿日　　陸奥守　家久御判

進上
惟新様

掟

一御内之者、百姓之子不可致養子事、
一百姓不可致物詣事、付、他所之祭礼に參り、作おこたるましき
事、
一百姓惣別、私之ふるまひ、仕ましき事、
一諸侍、百姓ニ至迄子をうみ候而、ころすましき事、
一御分國中、諸百姓他國に相替、耕作并所務大かたに有之候間、
領主として稠可申付事、付、女とも作ニ可出之事、
一諸所地頭、以分別、百姓之子御内に不可取成事、
一門屋敷に、殿役分被付置候條、堅役儀可相勤事、
一殿役、追立被定置日数之外、若其所之役人として、私に於召仕
者、鹿児島へ可致披露事、
一諸在郷、酒作るへからさる事、
右條々、相背輩在之者、可被處罪科者也、仍下知如件、

慶長十六年二月十六日　　紀伊守
　　権左衛門

340

急度令啓入候

一先年御検地之砌、現作之外荒地田畠分別札ニ被調置候、後年は可作明之由候ッ、雖然其後とかくの沙汰無之候、定現作ニ罷成候田地も、可有之存候、雖為少分納之儀、巨細者浮所奉行より可被申越事、

一大坂落人不依男女童、何方へも隠為者於有之者、被改からめとられへきよし、御法度之儀候間、其心得尤候、縦大坂之者ニ而無之なと、申候者共、一切許客有間敷事、

一大坂御普請役ニ付而、來秋出物遇分ニ可被仰付候由、相聞得候、兼而ゟ其用意肝要たるへく候、下去不申下々ニ至迄、不入事ニ不致雑作、出物方一篇ニ才覚、油断有間敷候、恐々謹言、

六月廿七日　比　紀伊守

國貞判

町田勝兵衛

久幸判

東郷曖衆中

御宿所

341

御勘氣之衆、自前代為寺役、被相拘儀候、然者寺領を乍堅存、或は所中かけかけ走行仕、或は愚宿(ママ)へ緩々罷居候儀、曲事深重ニ被思召之旨、被成御意候、自今以後於被相拘、私之儀者其人へ以右之趣能々被相堅、可被拘置候、己十竟、寺主之難ニも罷成候、又牢人為ニも不可然事候間、門中衆へも可演説候、自然此上に緩疎之儀、於有之者、其寺主可為越度者也、仍所被仰出如件、

元和四年七月廿五日　比志島紀伊守

三原諸右衛門

町田圖書頭

下野守

342

年始之祝儀、為可申越、今度伊勢六郎左衛門尉指越候、弥以其地皆々可為無事候、此國も無相替儀も、我等所労之儀、此節は少少快様ニ覚候、乍去長病之草臥ニ候条、急ニ可致本腹躰ニも無之、干今も喉之痛共相残候、折角久志本殿(ママ久志本式部少輔、幕府ノ官医)腹用養生最中候之条、次第可加験氣候、近々吉左右可申越候、將又、此比高麗人多人数江戸へ参府之由、風聞候、よき醫者伯楽又者樂人なとも参候様、聞候、何程之醫師ニ而候哉、喉氣なとの養生をも能相心得たる醫者ニ候哉、我等喉氣は常之喉痺喉熱之類ニ而は無之候、様子被聞合候而追而可有注進候、謹言、

寛永十三年ナリ

極月廿三日　家久御判

伊勢兵部少輔殿

343

光久公御書、并仰出、

急度致啓上候、然者島原之儀ニ付九州衆、不残今月十二日ニ御暇被下、従御城直ニ被打立候、衆も御座候、大暑十二日之夜半被打立候、我等儀は兎角不被仰出候間、翌朝伊勢兵部少輔を以御年寄衆へ得御意候処、十三日之昼程御城へ被召出御暇被下候、即、十四日之晩打立、駿河、府中迄十六日之晩罷着候処ニ、昼程ゟ大雨ニ而阿部川以之外出来り申、渡り不相成(イ罷)ニ付、十七日は此地へ致滞留(イ在)候、渡り御座候はゞ夜中なり共打立可申候、大名衆皆々輕尻ニ而人をも不列、上り之躰ニ候間、我等年若ニ而

344

緩々と仕候而は江戸之聞得如何ニ候間、爰許より供之者三人程騎馬ニ而召列、輕尻ニ而大坂迄可罷登之覚悟ニ候、就中最早御國之人数之儀、有馬表之上使より爲被申越由、御年寄衆より被仰候定而可罷渡候、於大坂承合未御國之人数有馬表へ不参候はば、如其許早々罷下人数召列尤ニ候、亦有馬へ人数参候者、直ニ彼表へ参候得と、御年寄衆ゟ被仰聞候間、致其覚悟候、我等出陣仕迄は、御國之衆不残可罷立候、就中、御馬験今度申請、高麗以来之御佳例ニ持せ申渡候間、被仰付可被下候、委細之儀者伊勢兵部少輔、其許家老衆へ可申遣候間、不能詳候、誠惶誠恐敬白、

正月十七日　　薩摩守　光久御判

進上
黄門様

光久公御代被仰出條々

一今度歸國以前、於御城、公方様御直ニ被仰聞候趣は、國中不奢萬花麗之儀無之様ニ可申付之旨、御諚候之間、各可被得其意事、
一國中諸沙汰之儀、黄門様御時ニ不相替可申付事、
一諸士諸事氣任士之儀、於有之者曲事之段、稠敷可申付事、
一切支丹宗之儀、当家代々禁制候処、近年は天下之御法度稠敷被仰出候付、弥令其沙汰候間、此宗躰之儀、片時も不指置、不可有緩事、
一於江戸、被仰出御法度之趣、不相背様ニ連々心懸可念入事、
一自然、於天下御弓箭、共於有之者、別而可致奉公候間、諸士連

345

連武具馬鞍等之嗜、軍役可勤心懸可爲肝要事、
一酒女之儀、能々可相嗜事、
一黄門様被仰出候儀、不相違可申付候、自然、其旨相背之輩於有之者、少も無用捨、其科可申付候間、能々可承置候事、
一諸士知行、相応出物、未進無之様ニ可相調儀、肝要候、然ハ連連不入儀ニ費米銭、花麗かましき儀、一切令停止、出物、軍役等可相勤心、懸不可致油断事、

江戸御條書之内

一刀之尺、貳尺八寸より上、脇差壱尺八寸ゟ上、同朱鞘、大かくつはの事、
一下々之者、下髭つり髭、并額、大なてつけ、大はつさけ(そりさげヤ)之事、
一小者共、袖へり上下之帶絹之事、
一結徒党、致荷擔、或妨をなし、或落書、張文、博奕不行儀之好色、其外不似合事業不可仕事、
一大身小身共ニ自分用所之外、買置高買利潤之構不可致事、
一陸若党、衣類、紗、綾、ちりめん、平島、二重絹、紬布、木綿之外不可着之、小者中間衣類萬可用候事、
一物頭、諸役人萬事ニ付而不可致依怙、并諸役者其外之品常ニ致吟味、不可致油断事、
一上意之趣、縦如何様之者申渡といふ共、不可有違背事、

右條々、無緩疎、可相守者也、

寛永十八年七月朔日

右光久公御家督日後、初而御下國之節、被仰出候、御書附之写

346

謹而言上

誠ニ懼多申上事、其恐不少候得共、我等儀從黄門様御少年之御時至御当代、続而御心易召仕馴候之間、餘人ニは相替申候条、愚成心を不顧申上候、尤理ニ不叶儀而已たるへく候得共、其段は被聞召捨、若亦御用ニも可立儀於有御座ニ、可達上聞儀、所仰候事、

一此前も度々申上候、大事之御身ニ御座候間、御身之御冥加を不断被掛御心、大道を御祈御尤奉存候、其故は御兄弟様過分被御座成候中ニ、御惣領ニ御生被成御家督之儀、不軽御事ニ御座候、於日本二ケ國を御領し候御方御一両人ニ過キ不申、大形ならぬ御果報、天之与る所ニ而御座候間、いか様ニ被成候而も、自然之儀と可思召候得共、左様ニ御心をゆるされ候得は、心天の咎め御座候而、天地を響かす程之威勢之人も儻と悪事出来り候例し、古今多く候、御家御代々御信心専ニ被遊候、近くは、日新様、伯囿様御事は承及、龍伯様、惟新様御行儀は、朝夕奉見候、御自身珠数を御取、大道を被成御祈候、左様之奇特にても御座候哉、大事之御難を、度々御遁候而、御家危き事共も、而白く相続、于今如斯目出度御座候、ヶ様之儀者古風を弥無御捨、御信心之御心持、可爲肝要候哉、乍去御自身御着経杯、深く被遊候儀は、入申間敷候、御心持さへ御座候得は、御自身御祈候はても、おのつから天之御恵み、可有御座候、就夫申上候、天道を御祈候儀、強而佛神を御祈候迄ニも有御座間敷候哉、或者御先祖を被成御敬、或人之罪に沈候を軽く被成御沙汰、鰥寡孤獨之類を御憐可成儀、肝要ニ奉存候、國之爲、御主人は諸人之親ニ而御座候間、人を御憐候御志第一ニ而候哉、是仁之道ニて候歟、被治御國候はゝ、萬歳迄、以仁道、御國を被治候はゝ、必長久たるへく候、先諸士町人百姓等ニ至迄、御家萬歳迄も目出度かれと可奉仰候、是則天之御守ニ而可有御座事、

一此度始而御家督ニ而御入國之儀、御座候付國中雖申上不及、萬事御思慮可被用候、兎角仁義を大形ニ被成候はゝ、御治り申間敷候事、

一三ケ國之太守之御事ニ御座候間、御身持軽々敷無御座様ニなされ、君臣之道は如斯有之儀と、諸人ニ御見せならはせ候はゝ、御法度かましく不被仰出候共、自然ニ諸人心持正敷罷成、御國可日出度候、因茲君子不重則不威云々、然時は平生之御身持、亦御雑談等も軽々しからぬ様ニ御賢慮御尤ニ御座候、下口ニ而色々取沙汰仕候得は、世上之取あつかひニ成可申候、隣國之御用心入可申事、

一御國之御作法、前々之御様子を、何事ニても御替候半とも思召候はゝ、縦思召定候儀ニても、餘多之衆へ被仰聞、其上ニ而御定、御尤ニ奉存候、後代迄善悪之沙汰ニ成可申事、

一何事も以学文之道、御政道於有之者、當末共ニ目出度可有御座候、学文之道は手ぬるきなとゝ、申人も可有之候得共、夫は一旦理はやき様ニ候共、萬事首尾不致諸人同心申間敷候之間、其御心持専一ニ奉存候、世上之取沙汰を能々聞召、其上ニ而之尊慮可爲御尤候哉、堯舜程之大聖人さへ、辻々ニ人を被立置、或は庭ニ諫之鞍を被置、世上之物沙汰を聞かせられ、天下之政道御座候、天下国家を被治候義は、不軽儀ニ御座候、日本ニても、信長公、太閤公杯天下を掌之中ニ被治、異國迄も責なひかしたる、大利根成人ニ而御座候ひつれ共、少も学文之心無之、我心ニ任せ行はれ候故、不及二代ニ、其跡消申候、御當代二十代

ニ餘り候付而臣下衆も代々仕へ來候衆ニ而御座候条、其心得を以先祖以來別而被召仕候衆之子孫共ニ候、被御心付御引立被召仕候様ニ於有之者、諸人御頼母敷奉存、進而御奉公可致候、若又少悪事御座候とて御退候様ニ共候はつ、當時上ニは其色不見得候得共心中ニは述懐をさしはさみ可申候、左様ニ成り候はは、御家危可罷成候、古文ニも以少瑕無蔽其功以一悪不忘其善、と御座候、然時は其身一代ニ而も、御奉公能爲仕人は、少し悪事有之候共御捨不被成様ニ、御心持可目出度候、如何様之大忠節之筋目ニても御國之仇に可成と、被御覧は候はゝ、早々被打果御尤候、兎角人を御上候半も、御下候半も、餘多之口を聞召其上ニ而御定、御尤たるへく候、人は久敷御馴候はては、本心は相知申間敷候、此趣孟子ニ委々相見得申候事、

一此度於御國、御沙汰之儀共、江戸ハ細々相聞得可申候間、御心遣肝要ニ御座候事、

一御法度、毎々御座候、其書出を毎月被爲読、各承候而尤奉存候、公義御法度之條々、皆々失念候而は越度ニ可罷成事可有之候間、度々被仰出候御法度之条々、月ごとに御読せ候而、評定衆心ニのり候而罷居候様ニ被仰付可然奉存候事、

寛永十六年林鐘初六　伊勢兵部少輔

貞昌

伊勢兵部少輔貞昌ゟ、島津彈正大弼久慶へ之狀、

覚

御物之出候儀專御沙汰ニ而諸人述懐ニ罷成儀、不思召寄歟と存候事、

一出銀、未進、利銀ニ割、

一黄門様、御納戸銀、借用之衆、返上利銀三割、

一押前、利銀二割、

右之銀子之御沙汰之儀は、道理至極いたし候間、如何様ニ被仰出候而も、御無理非道とは申間敷候、殊ニ押前、出銀、未進之衆は、黄門様御存生之時より之御沙汰ニ候得共、終ニ無首尾より、今度急ニ被仰出候、是も御道理至極とは申なから、御當代ニ急ニ被仰出候とて、殊之外迷惑かり可申候、乍去、押前、出銀未進なとは其侭ニ而被召置候得は、御借銀之煩ニ罷成候間、不及是非候、ヶ様之儀、今時分ニ重り候事、薩州様御不祥ニ罷成候歟と存候、然処、亦從先年別而御奉公共被仕候衆へ、米ニ而御手附共被成置、其米知行ニ被召成、被下候衆皆々如本米ニ而、被下知行可被召離之由、急ニ被仰出候、此儀は被成御延引、今些御談合も可入候哉、黄門様御時辱御意ニ而如斯候処ニ、御當代ニ知行被召離、迷惑之由皆々可被存候、若人々痛候儀、重り申候間、御心得入可申哉之事、

一諸人心揃候様ニ於無之は、自然世上ニ六ヶ敷儀、出來之時、御國危御座候事、

一御弓戦(ママ)なと出來候時、人之心揃候而御下知法度ニも隨候様ニ、連々被成置可爲肝要候哉、若世上ニ事起り候時は人之心任せニ罷成候と、相見得申候、去年有馬立之時少之間ニてさへ、以之外氣任せ爲仕由候ヶ様之儀を、俄ニ御法度かましく被仰出候而も不罷成者ニ而候間、諸人之心持平生能聞召、其上ニ而御心持可入哉之事、

一天下いつも泰平ニ可有之と思召候而は可爲油断候事昔ゟ天下を

五代三代と爲被治は無御座候、將軍家ニても頼朝三代ニ而相絶申候、其後皇子杯ニ而御次候得共、或二代或三代四代杯ニ而相絶候、其後足利家と新田家と將軍争ニ罷成、終ニ足利理運ニ罷成、天下を十二代御掌候、是尊氏之御事也、十三代目を光源院殿と申候、此公方様殊之外たいたんニ御座候間、古法を御破古キ士共皆退キ、官領なとも被爲立退後ニ、三好家ゟ御腹召せ候而公方相絶候ヲ、信長御出京候而、天下ニ公方無之候はゝ不叶由被仰、光源院殿御舍弟奈良一乘院御門跡ニ而御座候ひつるを、還俗させ御申候而、公方ニ御備候ひつれ共、是も還而信長へ敵なされ、都を御落候而中國へ御下、毛利家を被成御頼、其侭ニ而終ニ公方相絶、信長天下を御存知一代ニ而相絶候、其後太閤是又不及二代相絶、從其當公方様權現様御三代ニ而御座候、御子孫無之儀天下之氣遣ニ而御座候、若如何様之儀出末候時は、殿様御在國之時分ニ而候へは、目出度、御在江戸之時なと天下六ヶ敷儀も承候はゝ、世上并次第被成候而、江戸へ成共、何所成共、被成御座候而社、可有之候、其侭御國許へ御入候儀は、中々罷成間敷候、然時は御國無異儀候而、諸人御歸國を奉待候様ニ御座有度儀ニ候、私事とも中出まちまちに成行候へは、何事を思召候而も罷成間敷候、ヶ様之御氣遣は奉始忠直公霜台老野州老杯より外ニは何を存候而も、或他家、或小身ニ而、罷成間敷候、明日も可及御氣遣と、常々思召候而無御氣遣人に心揃不申候而は危き御事ニ御座候事、

一於天下自然御弓戦(ママ)出來候時、御一手ニ而被成御奉公度由、今度於江戸酒井讃岐守殿、御直談被成候、然時は明日如何様之儀共歟出來候半も不知申候間、左様之時、御人数可被出御格護肝要ニ御座候哉之事、

一乘馬衆如何程は可被出候哉、天下之御法之様ニ而候へは、一万石・貳拾騎ニ而候間、七十萬石ニは千四百騎之賦ニ而御座候、中々左様ニは罷成間敷候間、責而五百騎も御出候而、其上は陸武者を如何程と被成御定置、其人之遠方へ可罷出仕立、人夫之出様等、兼而談合候而不被召置候はゝ、俄ニは中々罷成ましく候、

一軍衆兵糧之事、

一弓、鉄炮衆、賦之事、

一右之人数、夫賦之事、

一矢種、鉄炮玉薬之事、俄ニは罷成ましく候、

石火矢之事、去年有馬立之時、見申候ニ日々仕寄之鉄炮、石火矢、口夜事々敷儀ニ而御座候ひつる間、ヶ様之儀人ニ御後候而は、江戸ニ而被仰上候儀、無首尾ニ可罷成之事、

一堺目を大形ニ思召候歟、と存候事、

一堺目之地頭々々ニは、被付御心、所之衆中も恐相付候様ニ被召置候はては、御用ニ立間敷候、江戸なとニ而は被成様、亦他國之様をも見聞仕候、萬事其心持ニ而無餘儀所へ被遣候衆へは、過分ニ御心付有之儀ニ候事、

一堺目ニ被召置候衆、亦内場之如く被召寄ニ付、最前之移加増、返上被申候を、被召上候時、三ヶ一歟、半分歟、被下候歟、亦被仰聞様も可有之候哉、兎角御沙汰なしニ被召上候而は、其衆之心持如何ニ御座候、是も黄門様御時被入御念候間、其御心付入可申候哉之事、

一鎌田源左衛門、下大隅へ被召移候、又仁禮主計助、加治木之儀

可承之由被仰付候、定是も可被召移候哉、此両人杯は、専可被召仕衆ニ而御座候処、他所へ被移候付て、御用ニ立間敷事、

一右両人、加治木、下大隅へ被召移候はゝ、心持も如何候半哉、鹿児島被召遣なから、両所之儀承候而、時々加治木へも、下大隅へも罷越候様被仰付候而可然候半哉、無餘儀御奉公仕衆、大形ニ罷成候得者、御爲ニ罷成間敷事、

一近比推参之儀ニ候得共、殿様被遊御学文候得がしと歎息仕候事、

一世上を見候ニ、長久成家は少く御座候、昔は古キ家多御座候ひつれ共、當世ニ成、不恐天道、我心之行クまゝに被行候故、不長久と見得申候、信長、太閤なとは飛鳥も落候程之威勢ニ而候つれ共、学文之道無之、利根ニ任せて、我心次第被行、可長久心持無之故不到二代候、

一御當家之御事、御代々御信心被成、専学文之道を以被治御國候遠き事は不存候、近くは日新様より已來之儀、承及候、龍伯様、惟新様へは仕申候而見申候、学文之道ニはつれたる儀、少しも無御座候つる、日新様なとは、朝之御膳を参候而より六韜を御読せ候而、爲被聞召由承及候、如御存知、御當家は日新様中興ニ而御座候事、

右條々我等罷立候刻、式部様、圖書頭殿へ申入置候へとも、比条書ニは左様ニ小書キを不仕候、貴公へは委我等存分之儀を、申進度候間、如斯候、被御覧置事之次なとに、自然被仰上儀も候半哉、御分別次第ニ候、已上、

伊勢兵部少輔
貞昌

寛永十六年八月六日

霜台老様
参

348

從黄門公知行被給之由、幸甚々々誠ニ満足之段令察候、此等之爲祝儀ニ付公方様拝領之御刀吉家進之候、永々可有秘蔵候、恐々謹言、

閏十月三日　　光久御判

又八郎殿

349

去年從黄門様知行被賜候爲祝詞、刀進之候処、爲祝儀至遠、早々使者殊ニ太刀一腰、馬代珍重候、猶伊勢兵部少輔可申候、恐々謹言、

二月十二日　　薩摩守
　　光久御判

又八郎殿

350

覚

一當家二十代餘無恙相続不軽儀候、中興日新様、伯囿様、龍伯様、惟新様、黄門様之御時、右御連枝之衆、対御家無疎意、度々粉骨之条は、定而可被聞及候、就中於當代者、連枝之衆餘多有之事候の間、行末頼敷存候、縦國中轉変之時節改有之、不混于他不可過御家長久之賢慮候之事、

一去々年於江戸、継目相済之刻、家郎之衆迄ニ、公方様御直ニ久敷家ニ而候なとゝ、難有上意共承、誠希代之面目不過候、然者自然於天下被仰付人数儀も有之者、抽忠勤度内存候条、軍役之儀を題目、染心肝萬事分限相応ニ、花麗無之様可被用倹約之事、

一被忘置儒学、弓馬、其外道々敷嗜方、或任氣、佚遊之樂、或夜行等、みたり成行儀、令停止(不脱カ)早并預置一所候衆、不節用地頭所

之見廻、可有遠慮之事、
一登城之時異様ニ無之様ニ慇懃可被相勤候、將又、先祖之忌日、寺へ參拜之時者、長袴着用候て、いかにも可被畏敬之事、
一相背國家之法禁、輩於有之者、雖爲各可及沙汰候、付、世間は挾私意、以計策、或密事を告、自他犯人之意、或可結朋党躰ニもてなし、懇切ニ被寄族も可有之候、一旦者贔負之様可被思召候、其志向後は還而可爲誰候歟、若又、兄弟衆之間ニ如何様之和讒も可有之刻は、此等之次第速可有言上之事、
一老中衆へも無談合、或企諍論、或任短慮、事を破、旦復軽内者殺害等、麁相ニ被致沙汰間敷候、何事も黄門様以來、被付置候衆へ可有内談之事、
一横目を中付置候間、諸事不可有油断事、

以上

御使
川上因幡守
鎌田治部少輔

351

寛永十七年正月廿四日

右光久公より御舎弟北郷式部太輔久直へ、被仰遣候御書付之写、

一同年十二月光久公分城下士、爲十隊、命之一番組、二番組、毎組定隊長、曰組頭、其下受令而傳旨、于隊中者曰小組頭、外置一隊爲家老組、令島津彈正久慶、島津圖書久通、長補家老職者列之、隊下之士者與十隊、無異有寺社家組諸役座組、十組之外十六組、都定二十二組也、所謂一番組頭、島津安藝久雄、新納四郎久辰、二番組頭、島津市正忠弘、佐多又四郎久孝、三番組頭、桂又十郎忠心、吉利下総忠張、四番組頭、島津左近久守、

352

桃山又九郎久尚、五番組頭、町田出羽忠尚、種子島左近忠時、六番組頭伊集院源助久立、島津美作久基、七番組頭、伊集院右衛門久國、川上上野運久、八番組頭、弥寢七郎重永、川上將監久將、九番組頭、鎌田又七郎政由、入來院伯耆重尚、十番組頭、伊勢兵部貞昭、島津中務久茂也、於是所令逮於置與郵傳内整外備矣、而後、正保三年合二十六隊而爲七隊也、及自一番組至六番組外、置家老組、

組頭衆へ、被仰出條々、
一組中へ、野心不忠之者可有之時は、早々可被致言上候、各與頭油断ニ而於不申上者、與頭并談合衆同意之心底たるへき事、
一組中へ喧嘩、口事出合候はゝ、早速寄合、致談合可相済事、
一御奉公方之儀、談合候而與頭・申付事、付出物首尾之事、
一作病其外、御奉公方ニ難澁申氣任之輩於有之者、以談合致言上曲事ニ可申付事、
一與中へ、鬼利支丹宗并一向宗於有之者、可致糺明言上可中事、
一與中於緩者、與頭談合衆可爲越度事、
一訴詔其外、申分之儀、與頭へ尋不申候而、氣任ニ公儀へ雖爲申出、受付有間敷候間、可有其心得事、

以上

353

寛永十九年午十二月十三日

與之衆へ被仰出條々、
一一組之衆、與頭之下知を背間敷事、
一從與頭、可被申付儀有之時、氣任之輩於有之者、曲事ニ可被仰

付事、
一御出陣、或者在江戸、或は狩等之儀、可被仰付時、異儀申間敷事、付、出物首尾之事、
一喧嘩、口論、に事、出合候半時、與頭へ可申入致遲々間敷事、
一訴訟其外、申分之儀、與頭へ尋申候而、公儀へ可申出事、
以上
寛永十九年午十二月十三日

354

急度令申候、
一今度御奉行所ゟ、以御奉書被仰渡候様子は、於奥州筋、きりしたん宗門之族数多被搦捕候、強御穿鑿之儀ニ候間、きりしたん宗之同類共、逃散事共候はん間、諸國在々所に、可入念之旨、御分國中、在々所々、自然不審成者於有之者、早々可被申出候、若行衛もなき旅人共罷通候はゝ、一刻も宿をかすましく候、勿論其所中早速可被追出候、萬一緩之儀共有之候而、脇よりきりしたん宗旨之者相知候はゝ、其所之曖衆并五人組へ稠可及御沙汰事、付、先年ころひきりしたん心中ニ宗旨を不替于今隠レ々々、きりしたんの作法仕ものも可有候間、其所中より、横日を被申付、可被聞立候、其外不審成者入念承たて可有披露事、
一於諸國在々所々、新錢鑄事御法度ニ候、若相隠し鑄出輩あらば可申出候、縦雖爲同類、其科をゆるし御褒美可被下、自然、訴人於有之者、本人は不及申、五人与をも可行同罪ニ其所之もの迫可爲曲事之由、右同前ニ以御奉書、被仰出候条、御分國中ニ而も新錢鑄者、於有之者、見立聞立早速可被致披露、天下御置目之ごとく賞罪之御沙汰たるへき事、
一此中金山へ罷居候他國之者、自然、當國へ諸外城、田舎へ隠居事も候半間、念を入其所中可被追出事、付、他國之行脚徘徊人之類召置間敷候、右之旨聊緩有間敷候、恐々謹言、
寛永廿年三月朔日、
民部少輔　印
左馬頭　印
下野守　印

355

白次
地頭
曖衆中

今度、就論之犬追物、問答五ケ条致赦免候、當家秘傳之儀候間、聊他見有間敷者也、
正保四年丁亥正月五日　光久御判
樺山若狭守殿へ

356

右正保四年丁巳(亥)十一月十二日、武陽江府王子村ニ於テ興行犬追物、備將軍家光公之台覧、茲年正月、從光久公、犬追物二十五ケ条忝御傳授也、其時之御書、

置目之條々

一今度留守中諸置目之儀、前々如申付置候、堅可相守事、
一組頭相集、留守中與下之人衆諸事氣任無之様、調可申渡事、
一留守中、諸士以下氣任共申者於有之者、依罪之軽重、或寺領、川よけ、或溝堀、板取、或日数之番等可申付事、
一國家之爲ニ可成儀も、不成儀も、老中を初諸役人より無言上

何事も御意次第と被申儀、不可然候、存寄之儀者無用捨申上候を聞届、以其上可致分別事、

一諸事家老衆手前ニ而可相済儀者、無延引可被事済事、

一死人之相手、

付、死罪、八付、火あふり等之儀者、可致言上、併公儀之罪人他國ニ相掛罪人者、其時之相談ニ應すへし、籠舎、流罪、捕者之儀者不及申上、家老衆ゟ可被申付事、

一各存之ごとく、國之風躰ニ而何事も談合相究候儀を何かと候而、其首尾訳もなく成行候儀毎事有之事ニ候、當時相究候趣、少も違変無之様可相守事、

一口事之沙汰、口事聞衆聞定候評議、始終不相替様ニ曖候首尾可有之事、

一自然國中并隣ニ至りて俄事出來候儀も可有之候、連々以談合其用意不可有油断事、

一前々ゟ之法度、于今中絶之儀も可有之候、惣而諸法度之儀者、何事によらす堅固ニ可被申付事、

一評定所談合之儀、輕々敷洩候由、風聞有之候間、先年如申付置、言口を相紛、可有其沙汰事、

右條々堅可相守此外宗旨之儀ニ付、改奉行ゟ申出儀於有之者、能々可有相談者也、

慶安四年二月廿日

（鹿児島県史料一の三六九号）

一鹿児島中若者共、不依大身小身、弓馬、兵法、鑓、鉄炮之内、面々得方之儀、致鍛練候様、平日稽古可仕候、勿論及論問、致立会ましく候、

一右ニ付而付諸道具不好結構、早竟、用向之善悪を専、穿鑿可相調事、

一鉄炮打候儀、近年は立物を小くいたし、あたりの数を好候迚之由、不可然候、此以後は随分達者ニ打習候儀を、第一ニ可致稽古候、

右之趣、與中へ可申渡置旨、申越候様ニと、御意候、

十一月

右之通、被仰出候ニ付江戸詰御家老中ゟ、左之通申来候、

此以後は、弓馬、鑓、兵法、鉄炮修錬之ほと、時々不圖可被遊御覧、御様子ニ候、來年之御在國迚之御儀ニも無之、後年御不樂之節なとに、幾度も不圖御覧可被遊、御様子ニ候、

一馬之儀者、馬形亘迚を好不申、足強く有之を第一致吟味、飼置候筋に何れも相心得可申儀ニ候、兼而御馬廻之格ニ不被仰付置者ニても、馬乗候儀、心掛之者は向後可被遊御覧候節は、御馬をも被為借、又は致借馬候而成共乗候而罷出候様ニ、被仰付儀も、可有之との御沙汰ニ而候、

一此節仰出之通、馬具等美麗を好申儀無用ニ候由、御沙汰ニ而候、

一弓之儀、此以後不圖可被遊御覧節は、弓法之規式ニ及、矢貳本ツツ射迚ニ被仰付候、御覧可被遊儀なとも可有之との御沙汰ニ而候、是ハ其業之達者をも修錬仕為ニ候、弓場事規式までを被遊御覧候得は、弓道具等調候付而内々難達候付、不非心其列ニ罷出候儀難成者、可有之と被思召、右通之御沙汰かと恐察仕候、

一鉄炮之儀偶心掛候者も、近年は當り数迚を好み、地中ニ腰迚掘入

台を仕掛候躰ニ仕打候由、鉄炮之儀は別而達者ニ打ならひ、不申候得は、無其詮事候間、向後は立居共ニ達者ニ打習ひ候儀を、専可心掛事候、被遊御覧候儀、可有之節は、立居共、打方ニ被遊御覧との御沙汰ニ候、

右は此節仰出ニ付、御内々右之御沙汰ニ而候間、与頭は面々内々ニ而其心得ニ而罷在、向後不圖可被遊御覧節、無滞様、兼而組中へ申付置候様、内意可被申置候、以上、

十一月

右之通、申米候条、可被得其意候、以上、

十二月

與頭衆中

358

士之子、其行跡不宜、度々被仰出趣、有之候得とも、於于今風俗不相直、依之、此節、委細被仰出候、

一御當國之儀は、譜代之士共ニ而候故、殿様を大切奉存、御奉公ニ付老若共ニ身命を差捨候、志は可有之候、然共、平生之行跡不宜ニ付而傍輩中少々憤有之候得は、屏、垣を崩、礫を打込、或は辻ニ集居、往還之障相成、或往來之者共へ悪口を申掛、及口論、自身之非分は不顧打擲又は打捨候儀共、多く有之、右式之仕形、末々之事ニ而、奉對殿様、不奉公之儀とは不存段、何れも了簡違ニ而候、右之通ニ不成合、行跡少ニても人之障ニ罷成候儀、御當國ニ限り、右之風俗有之候事、御仕置不宜筋ニ他國へも聞得早竟は御難題之事候間、此議を以段々御法度を被立、被仰渡候事候間、老若共、右之旨を奉承知、学文武藝を相嗜若輩之者ニは、親兄弟、年長者共ゟ、時々申聞、風俗相直候、

359

儀、當然之御奉公ニ候、

一右躰之風俗故若輩共之交無慇懃ニ有之、纔之事ニも傍輩中、或ハ及口論、或打果候、差究メ無拠恥辱ニも相成候儀は不遁筈候得共互ニ所行不宜所ゟ事起、是以堪忍相済筈之処、早竟、忠節孝義之程を不存、無穿鑿故、私ニ身命を差捨候儀、忠孝之道ニも相背、一類迄も迷惑仕候儀、幾度も有之不便之至ニ被思召上候、傍輩中、下々ニ而も不屈之儀有之候はば楚忽ニ事を破不申、其場を致堪忍遂披露、不宜儀と實落着仕候はゝ、成程心安御奉公ニ候間、行跡とも相改可申事候、

一屏垣を崩、礫を打込候儀、士之家來、其外寺門前、町人之子共士之眞似をいたし、右之働仕儀も有之と相聞得候、此段、士之風俗宜時は下々迄も其風俗ニ可相成候、又士共所行不宜候得は、其仕形を相眞似候、早竟は士之子共所行之依善悪、末々ニ相掛事候得は、専可相嗜事候、

一士之子共、学文武藝を心懸、行跡能者は、組頭中ゟ相糺、可申出候、左様成者は速々ニ宜可召仕候、

一所行不宜者は、無藝無能ニ而、徒ニ罷居、何之業をも不仕候ニ付、悪行を仕外無之筈候、殿様へ御世話をも掛上け、其身は親子一類まて迷惑ニ成事をいたし候者は、不忠不孝之者ニ而此旨能々親々よりも可申聞事、

右之通、段々思召之通候間、御家老中奉承知、先キ様最通候様、可被致相談旨、御意候、以上、

寅八月

歳暮之御祝儀爲可申上、橋口松浦方差下申候、仍御肴、両種、

御樽、一荷、致進上候、猶餘慶明春可奉得尊意候間、不能詳候、
誠惶謹言、

十一月廿二日　　松平薩摩守
綱久

進上
光久様

360

爲歳暮々祝儀、使者被差下、殊ニ二種、一荷、被爲持珍重之至、
悦入候、尚來(春カ)喜之時候、恐々謹言

極月廿八日　　大隅守
光久

薩摩守殿

361

新年之慶事、不可有尽期候、國家太平之安堵、猶乂珍重々々、
此等之爲税儀用使札候、幾久可述佳詳候、恐々謹言、

正月六日　　少將
光久

薩摩侍従殿

362

覺

一船中之儀、先般奉行是枝喜右衛門へ相尋可有渡海事、
一五節供二者、對面所へ被差出出仕可被見候事、
一表江被通候道筋者居城之うしろを可被通候事、
一表之番功之入候もの六人充四替ニ可相定候事、
一遊山江可被出時者おさと馬場を可被通候、供衆者留城戸より可
致供候事、
一関猟可爲無用候、小人数にて之狩者百性不痛様ニ以見合可被致
候、
付諸殺生候時者功之入候者、手廻拾人計之間ニ而被出尤候事、
一釣ニ被出候時者つきだしよりゑつつうニ可被乗候、供船も小舟
可爲一二艘、篠原大藏乗船ニ可被乗之事、
一諸士ニ馬を乗せ被見候時者、廐之亭より被見尤候、廐之責馬ハ
常のことく其外諸士より馬出候時者一日ニ三疋歟、四疋歟、五
疋程充可被見候事、
一雉子之鳥屋待ニ被出候時者、裏門より被出、可爲吉野(鹿児島)候、供之
射手一兩人、供衆ハ菖蒲谷(鹿児島)之崎こくりうニ可遣候、但山口善右衛
門・有川十右衛門可被列候事、
一吉野(鹿児島)之鹿猟可然無用、狩者谷山(日置郡)・春山可然候事、
一伏見へ上着候者、永野石見守殿へ可被見廻候、於大坂者御城番
衆・町奉行へ可被見廻候事、
一於鹿児嶋あなたこなたの振舞ニ被参候儀、可爲無用候事、
一湯治へ節々爲養生、可被参候、頴娃(指宿郡)安楽(給良郡)可然候事、右之條々諏
方丞右衛門へ申含候、其外萬事多人数ニ而目ニ立、或遊山等も
夥敷在之儀可爲無用者也、

承應四年卯月十二日

363

覺

一新御殿未出来候ハ、小書院ニ御座候様ニと御意候事、

（鹿児島県史料第一巻〔薩藩旧記雑録追録〕No.五六二）

一御成可被成所安藝殿（島津久雄）・筑後殿（鎌田政勝）御家老中其外者無用之由御意候事、
一御門外へ御差出之時、御供御城之小番大番之内ゟ、其時々之見合にて可被召列候、
一雲齋御国元迄御供、左候て可罷上由、御意候事、
一向之嶋（鹿児島・桜島）西堂ニ而御狩可然由御意被成候事、
一鉄炮吟味之事并弓場事無用之由　御意候事、
一黒葛原治部右衛門納戸、河上五兵衛奥ニ詰衆、新納小右衛門御代官、

右者四月十一日之晩　御意被成候事、

一安藝守殿・筑後殿へ萬事可得御意由被仰出候、藝州老御事、節節御参被成、御供なとも被成候而可然候由候事、
一獅子嶋（山水郡）ニ而せこ十人計ニ而御狩可被成由　御意候事、
一おこち・おやま御側ニ御奉公可被申由　御意候事、
一福崎新二郎・赤松諸兵衛・宮之原筑兵衛奥方へ罷通御用可承事、
其外之御近所衆者奥へ遠慮可仕出候事、
一吉野（鹿児島）御馬追ニ者御のほり可被成由候、福山（姶良郡）御馬追ニハ御無用ニて候由候事、
一盛市一官御用之時者可被召寄由候事、
一番衆賦之事、御老中へ可得御意由　御意候事、
一御指圖之外御一門中御家老中御供被成間敷由候事、

右者四月十九日之晩　御意被成候事、

一伊集院長右衛門事、今度被召列候、来春御上洛之時も可被召列由候事、

承應四年卯月廿日

364

右承応四年寛陽院様ゟ、泰清院様へ之御取次、御口上書、泰清公御年二十四之御時也、初而御暇御賜御下向之時歟、

（鹿児島県史料第一巻No.五六六）

覚

一御屋敷中ニ被相詰候衆、従前々被仰出候如御法度、折々外江被罷出間鋪候、御定之日数無相違様ニ堅可被相守候、自然其上ニ罷出人者、星帳を以可致其沙汰事、
一夏冬共ニ衣裳内々規模を被相定可有着用候、御番之日并無御隔心御方江御供之時も、日野紬・郡内等之着物可然候、惣而結構成小紬上下着用仕儀可被致無用候、就中又被官之衣類、従先年如被仰出、日野紬木綿之間着用可然候、小袖一切被爲着間鋪事、

付分限之衆之内小姓者公儀江被召仕儀多々有之候間、衣類主人之勝手次第たるへき事、

一傍輩中着合之刻、近年者殊之外内々奢之躰之由被聞召上候、依其常々者酒肴なと取調被出儀曽可爲停止候、勿論互之振舞并音信物取遣儀、弥以令禁止候、若致結構人於有之者、横目を被付置候間、可有披露候、其意得尤候事、
一在京・在江戸之輩、其旅中ニ而、古き訴詔被申出儀、向後在之間鋪候、尤旅中之儀者可爲各別事、
一従前々相定候御賦之外、重候侘言被申出間鋪事、
一右同御扶持方佗之儀、右同断之事、
一御年寄衆御振舞之時は、小々姓衆江熨斗目長袴拝領被仕御法ニ候、自今已後雖爲国人之御客人、熨斗目長袴着用被仕候者可被下

候、若兩度ニ及候者、長袴計可被出候、夏者帷子長袴其時々可被下候事、

一従御國元被召列候御醫師并従前々江戸江被相詰候御醫師之外、新敷或木薬代或賦重之儀被申出間敷事、

右之條々御請合之上を以今度被仰出候間、此旨を堅可被相守候、頃日御供之在江戸衆、帰國前ニ銀子ニ手迫、御物銀過分ニ恩借被仕儀不可然候、向後者銀子借被下間敷候旨御相談相究候間、人々の相應ニ能々被致省略、御賦良ニ而相續候様ニ心得専一ニ候、尤江戸町人之銀子如例年家老衆口入ヲ以借用候而被遣儀も有之間敷候此等之通被承届銘々判形可被仕者也

明暦二年十一月廿五日

（鹿児島県史料第一巻No.六七三）

御判

掟

一領國之内郡代役儀嶋津筑前（久賴）・新納右衛門（久詮）江申渡、郡奉行被相附候条致相談、国中之儀諸事入念可申付事、

一国中耕耘之時節、収納方并起荒地・開新田・水廻等之見立可爲専要、郡奉行國中節々可行廻、依躰郡代も差越所々見計可致沙汰事、

一前代之検地親疎有之由依有其聞、今度相改之際（悪カ）従郡奉行諸所之役人共ニ令對談可致沙汰、後日随善要之行、必可加賞罪事、

一領国之百姓農人等至于女童迄、耕耘ニ可出之由幾度も可申渡、不用之族者稠敷其罪可申付事、

一右同断之者共家居衣食等、萬事不相應之驕無之様ニ堅可申渡、百姓以下之分際程ニ可致格護事、

一百姓ニ可成者、或寺社家之内致居住、或号又被官、或紛町人濱村之者隠住之由有其聞、此節急度致沙汰、百姓ニ可申定事、

一士之被官應分限可抱置事、

一不分藏人・給地、百姓之沙汰自郡奉行可承事、

右之條々聊不可有緩疎者也、

明暦三年七月十七日

（鹿児島県史料第一巻七三六号）

（島津光久）（花押）

覺

一此中申付置水廻之儀、所之労ニ不成様ニ入念可爲差引肝要、

但右普請ニ付、其在所之者別而入精於致奉公者、相應之褒美可遣之事、

一新田開之儀者心得有之印即付之条、彼失墜相濟迄者野村内藏助方江取納可申付事、

一諸士新田開之在所、見立望申人於有之ハ、弐百斛迄ハ可致免許、二百石以上之高出来之地ハ幾度も披露可仕、依人可令免許、勿論出高之儀ハ此中如定置可被下事、

一田地者永々重寶ニ成事ニ候之間、彼井手普請入用之竹木者其方角より早速可出之旨山奉行へ堅申渡可相調事、

一普請見廻之者、或背申付旨之族、或無作法之所行之人於有之者、
大山三郎右衛門・野村内藏助郡奉行其外金山之物奉行打合致相
談曲事可申付、若可及死罪儀者可遂披露事、
右條目之上を以、萬事首尾能可申付者也、
寛文三年卯二月十二日　　嶋津(久通)圖書殿

367

（鹿児島県史料第一巻一〇〇四号）

本ノママ
本右同

條々

一新田方、此節郡座へ相附候条、井手溝并不違耕耘之時節、堅固ニ申付、取納方可有之事、
一領國之人民、不労様ニ相談、可爲肝要、并百姓住、年貢等之差引、可有之、付、背法度之族は、沙汰之上を以、曲事可申付事、
一右新田開は、有心得申付候間、普請入目之失墜、相済迄之間、野村内藏助方へ取納可申付、但、新田方役人之者扶持并井手溝修理等之入目は、取納米之内ゟ、拂方可有之事、
一百姓移、先年雖申渡、干今無人之在所有之由、其聞得候之間、國中百姓配、漸々可申付、別而新田作人之手當、可爲専要、但、百姓移之儀は、郡奉行可致支配事、
一古来之田畠、入念可申付、且又、新田高、相増儀、可爲肝要之条、郡奉行并井手溝見廻之者共、其外役人等、別而可出精事、
右條目之趣、此外萬事首尾能様ニ、可申付者也

368

寛文四年辰八月廿七日

覺

一町人刀大小差候儀前々ゟ御禁止ニ候、然處頃日猥有之由被聞召上候、自今以後町乙名者合口之脇差迄を可被遊御免許由候、向後相背、中脇差、尤刀差候もの於有之者、直ニ各可被仰上由上意候事、
一如右刀之儀御禁止ニ被仰出候処、喧嘩仕、刀ニ而勝負於有之者、双方不及理非之沙汰、御仕置ニ可被仰付由候事、
一諸役人皆進物猥受用有之由被及聞召候、右之段茂各方より承立可被申上候事、
一百姓脇差差候儀前々ゟ御禁止ニ候処、頃日猥ニ有之、喧嘩仕候者刀を以勝負いたし候、自今以後弥以刀差候儀御禁止ニ被仰出候、若此旨相背切疵相付候もの不構理非、双方共ニ可被處厳科旨上意候事、
一右不限候可被申上儀者、桂李(忠保)之助・仁禮覺左衛門(景治)ニ而直ニ可有言上由被仰出候事、
右之條々大山伊豫を以被仰出候、以上、
寛文六年午六月十二日　　源左衛門
　　又左衛門
　　圖　書

大横目所

右は
寛陽院様御代仰出候由なり、

369

当國御留守居、被仰付候間、爰許江罷移、可相勤之、數年右役儀明候而、御念遣被思召候、佐渡儀、年生も能候付、右役儀被仰付候条、家老中、其外諸士之上、無遠慮可被申上之、定而病者ニ而相勤儀、難儀ニ可被存候得共、別ニ可被仰付人も、無之候間、則、御受、可被申候由、御意候事、

寛文六年八月十七日

370

覺

（光久）
（花押）

一家老中其外之面々結徒黨國家之障ニ罷成儀有之者、雖為縁者・親類無用捨可被申上之、

付口事其外鼻屑之沙汰於承付者無遠慮可被申上之事、

一留守中不意之儀於令出来者家老中致相談急度可被相鎮、若致遅滞及大破者可為越度事、

一隣國如何様之儀雖有之、全守國家分國中不致騒動之様ニ常々可相意得事、

一評定所へ無構禮日其外時々ニ致登城、用事可被承之、勿論家老中可入意得儀於被見及者可有相談事、

一鹿児嶋并外城之士付百姓町人以下ニ至迄、兼々申渡相守條目家職不怠可相勤儀可為肝要、若無作法之族於有之者、家老中致相談仕置可被申付事、

右之旨堅固可被相守之者也、

寛文六年八月十七日

371

仰出

（島津綱貴）
又三郎様御側へ相詰候使衆替被差上時分ニ而候、年々替合ニ相詰候へ者御勝手を不存ニ付、遠慮多候而存寄をも申上得間敷候、右式ニ而御氣儘ニ御生立被成候儀、別而御氣遣ニ被思召上候、誰そ御指南をも可申上人御見合被為成候へ共、何茂存之前左様成人無之候、雖然其分にて難被差置儀候、就夫被遊御思慮候者、唯今之御行跡肝要之御年生ニ而候間、北郷佐渡（久加）を被付置度候、此比ニ御留守居役被仰付、無程役儀被相替候儀も如何ニ被思召候へ共、双方御考候ニ御留守居役者數年無之候而も調候、

又三郎様御事題目ニ被思召上候、萬事淳ニ被成御座候様ニ守立被申候ハ、、御家御長久之基たるへく候間、是非共被成御頼度候、此等之趣佐渡へ可申渡之旨上意候、但島津圖書へも相談仕、於同意者佐渡へ、可申渡候旨、御意候、

寛文七年正月二日

右從光久公、北郷佐渡久慶（ママ加カ）へ、綱貴公、御守役、被仰付候節、御書付之写、

（鹿児島県史料第一巻一一七〇号）

372

又三郎様御守役被仰出候、次而ニ被遊御咄候者、佐渡儀病後ニ而此中被仰付候御留守居役をも苦労ニ可存候處、又三郎様御守之儀者在江戸仕事ニ候条、弥以難儀ニ可被存候得共、大守様御参府之砌折節ニハ御暇をも可被下候、何とそ一節成共相勤被申候へハ、

御喜悦被　思召上候、又三郎様御事以之外御才發ニ被成御座候上、當世風御覧ならわれ弥利發を能と計可被思召と被遊御推量候、尤當時之様子能事ニ而者御座候得共、御國之儀者久敷　御家ニ而物毎古風相残り、當世之格式ニ而者還而不相應之儀有之、左様成所を能味ひ御指南をも可被申上と被思召被仰渡事ニ候、佐渡御請被申候へハ御念遣も無之儀候条、使衆者誰ニ而も為差登候而可然旨上意候、以上、

寛文七年正月三日　　勘解由
　　又左衛門
　　帯　刀

（鹿児島県史料第一巻一七一号）

373

佐渡江被仰渡御口上覚

又三郎様御方へ御奉公可被申由被仰付候處ニ、致領掌、御當地江被罷下御満足被　思召上候、御若輩之儀候間、何篇御行跡之儀存寄共可有之刻者、無用捨可被申上候、尤御近習ニ被召仕候衆無作法無之様ニ堅可被申付候、且又下御屋敷之儀、此中嶋津中務致御仕置候通可被申付由被　仰出候、以上

未七月五日

（鹿島県史料第一巻一二〇〇号）

374

覚

一國中仕置可被申付之旨前々ニも申入候、弥被入念尤候、稽古之為ニ而候間、万事被聞達無遠慮可被申出候、とても大方ニ有之候而者、以来國家之仕置も如何ニ候間、能々可有其意得事、

一仕置之儀可被申渡時分者、幾度茂家老中江内談肝要ニ候、心易召仕候若き者共、其外内證之縁取を以、贔屓ケ間鋪申儀も可有之候間、曽而被致承引問鋪候、萬事卒尓ニ無之様可被相心得事、

一諸士内證之驕、遊山ケ間鋪儀、其外無作法無之様ニ被申付肝要之事、

右之旨入念差引可被申付候、以上、

寛文七年七月廿六日　　大隅守光久

松平薩摩守綱久殿

（鹿児島県史料第一巻一二〇一号）

375

覚

一五節句并毎月之禮日ニ者可有出座事、

一学文之儀可為専要候、第一國家之仕置無学ニ而者、行當事のミ有之物ニ而候間、連々可有其意得候、算勘之儀も簡要不存候而不成儀ニ而候間、不楽時分者ケ様之儀為存者をも召寄可被尋聞事、

一諸士武藝嗜之為ニ、若キもの者弓馬兵法等をも申付、折節被見申候者何も心掛自可相嗜候間、内々可有其覚悟候、犬追物稽古之儀も申付置候、是も折々被見候而可然事

一大酒之儀養生為ニも悪敷候間、曽而無用ニ候、小盃ニ而一ツ二ツ、者苦間鋪候、是とても毎日者可為無用候、不過様ニ可有心得事、

一何方江も振舞ニ被越儀可為無用候、肝付半兵衛宿所（兼屋力）其外相定寺々可為格別事、

寛文七月七月廿六日

右貳通、光久公より、綱久公へ被仰遣候、御書附、

（鹿児島県史料第一巻一二〇二号）

376

御袖判

一江戸火事出來付、金銀入重、台所方不相続之間、蔵入方并諸役所念を入、差引可爲肝要、縱雖古例、不入儀は、致僉議可相減事、

一金、銀、米、錢、出候儀、訴訟申者雖有之、家老中相談、當時ニ可致延引、上方借銀も返弁不相済、其上當分蔵入方代成、給地相替減納有之候間、被存其旨、可致簡畧事、

一蔵入方田地之指引、菱刈孫兵衛、汾陽次郎左衛門へ、申付候間、代官萬事之儀、両人へ得差圖、百姓も不疲様、且又、代成も増候様ニ可申附事、

寛文九年三月十九日、

島津帯刀とのへ

377

覺

一國中之仕置此以後者其方萬事被承可被申付之、第一諸人之浮沈・道理非義之分・善悪之沙汰者國主之能不致了知候而不叶儀候間、連々之心懸可爲肝要、未讓家督付遠慮於有之者、後年仕置ニ可被致疑擬之間聊疎意有間敷事、

一縱家老中申上候儀者如常使衆可致取次之、其節佐多内記使衆ニ相加罷出、使衆申上様之筋相違無之様ニ可仕、返詞之趣ニ付内記存寄於有之者、委曲被聞届家老中へ之返詞可被申聞事、

一方々へ振舞ニ被差越儀可爲無用、國主何れ茂此儀遠慮有之子細口上ニ相達之候、縱雖爲一門中可有用捨事、右之條々可被存其旨、委曲新納又左衛門口上可申上之間可有承達之候、以上、

延寶二年九月廿八日　　中將

松平薩摩守殿

（鹿児島県史料第一巻一六三〇号）

378

覺

一多人数召仕儀者奉公人之善悪を能不知候而不叶事候、召仕者共不依男女當時之挨拶ニ而氣ニ入候様ニと計仕事候得者、常ニ其心得肝要候、或近習之者ニ取寄り、或奥方ニたより、知行を望、扶持を貪る輩有之事候間、此旨專可有覚悟事、

一口事裁許之段家老中より相伺之刻、使衆申上様之句面により、一方を能様ニ申成儀も可有之、又詞之品により非を理に聞、理を非に聞誤事も可有之間、心を外に不移具聞届、其上ニて能々了簡候而可被致判断、口事之扱細密ニ無之候得者諸人恨を含、不致帰服之基、第一仕置之瑕瑾ニ候間專要ニ可被意得、三息思唯九思一言之語忘却有間敷事、

一家老中諫言を加、又者信切に存寄之旨申上者可有之刻、縱氣に指當り無興候共、其私意を押へ叮嚀に請付聞達之、至極之理におゐてハ用之、道理に不當儀者尤可被差捨之、主人之氣に入儀者人々申上やすく、氣に逆儀者申かぬる事候間、少ニ而茂異見を得候様ニと可被心得、我心儘に仕候儀者私欲にて國家を亡之媒と慎之、縱差當心に不立乗儀にても國家之仕置ニ可成儀者、勤而

可被行之、欲勝義則亡義勝欲則昌之語に可被着心、當家数十代相續之儀、外ニ例茂無之事候之間、猶以長久に有之様ニと被存仕置等無邪様ニ別而可被入念事、以上

延寶三年九月廿八日

右貳通、従光久公、綱貴公へ被仰進候、御書付、

379

（鹿児島県史料第一巻一六三一号）

猶以、用捨共候而は、可悪候、少も不殘書物候而、申越尤候、自然、かくし共被仕候而は、其方後日可爲油断候

使者可有指登候、以上、

一書申進候、其地諏方御祭礼之頭取、東郷肥前せかれニ被申付候、然処、齋籠前より肥前宿所ニ而度々相撲興行候由、相撲之儀は前々より御法度被仰付置候処、猥成様子共ニ候、其方も爲見物由聞付候間、尋申候、若輩とは乍申御法度之儀を被取用候儀、無心之候、乍去肥前手前より申請候哉、又自分之企ニ而見物被仕候哉、承度候、其外見物衆、多々爲参由、左様成衆も銘々可承候間、其座中不殘書立、各有様ニ可被申上候、爲其如此候、謹言、

九月廿四日　　光久御在判

伊集院源介殿

380

（上書）「伊集院源介殿　　光久」

猶々おしけ事ハ弥二之御丸ニ詰申筈ニ可在之と存候、一筆令申候、然者此節よしほへ相付罷下候おしけ事、頃日平産いたし候ハんと存候、左候ハ、御子者男子ニても女子ニ而も、御臺所へおきまいらせられ御そたて可被成候、御乳壱人可被相付候、外ニ御臺所へ居申候女房衆之内壱人相付、

中將様御子様方御幼少之御衆と同前ニ御養育可被遊候旨中將様被仰出候、尤中将様に御もらい被成候而、

中將様御子分ニ被成、末々御子様同前ニ被成筈ニ候間、万事いかにもかろく臺所へ被成御座候御子様同前ニ可被仕候、此旨其方へ具ニ可申越由、御兩殿様御意ニ御座候間如此候、委細市正罷下可申達候へとも、一刻も早く申越度此度之急便ニ如此候、恐々謹言、

延宝三卯カ　九月廿七日　　新納又左衛門久了判

嶋津市正忠廣判

伊地知權左衛門殿　御宿所

（鹿児島史料一の一六三二号）

381

今度二丸へよしほ同道ニ而下り候女房衆之内ニ、二階堂源太夫妹懐妊之様子ニ候、就夫眞修院方ゟ被頼候ニより其方迄申越候、彼女致産候ハ、則臺所へ引越、乳を相付可致養育候、其元おさこ方へ申聞、我等子分ニいたし養育可仕覚悟候、此旨其方ゟおさこへも申聞、以来共ニ召置覚悟可仕候、前廉よしほへも申聞、其心得尤候、最早致産候ハ、早々如臺所可有召寄候、我等前ゟ眞修院方

（延宝三年卯九月十七日吉貴公生母二階堂氏眞修院ハ綱久）

公御夫人、松平隠岐守定頼女
へ右之越申談候間、何れも子分之様子ニ可有取持候、又表方へ萬事入目等之儀も我等子分之様子ニ申入可然候、二丸ゟケ様ニ候なと々世上に沙汰無之様ニ相心得尤候、以上、

十月朔日　　光久　中將御印

伊地知權左衛門方

（鹿児島県史料一の一六三五号）

382

御両殿様、御参勤御替合時分御国元へ御座間有之候条、御城代可被仰付被思召上候、別而御見合之人も無之候間、佐多内記殿へ可被仰付候条、其旨可申渡候、彼人之儀者、江戸へ被罷登儀難成人ニ而候得共、弥可然被思召候、世間火事其騒動之時分は早速被致登城、萬事可被承候、尤御家老衆承難致儀共、可有之儀者、内記殿可被承候、若又家老中不和之儀共可有之時分者、内記殿被肝煎候而、左様無之様可被致覚悟儀、肝要之由被仰出候事、

延宝四年辰十月廿四日　　御使　相良主税

大山権左衛門

383

一踊被仰付小々姓、稽古仕廻候而、直々方々へ参候由、被聞召及曲事ニ被思召上候間、向後者何様之儀雖有之候、曽而他行仕間敷候、尤稽古之隙日ニも他出仕儀、堅可爲停止事、

一於宿所、若き者共を呼入候儀、堅可爲停止、尤彼方ゟ尋来候共、右之断を中達可相除事、

一被召仕小々姓、知音懇切ニ申合候人之儀、従前々御法度ニ被仰出候、尚以右之旨、堅可相守事、

右条々可相守之、若緩之儀於有之者、至親々、急度曲事可被仰付旨、上意候間、慥ニ承知仕、聊緩有間敷候、横目被仰付候間、可被得其意者也、

延宝五年正月十一日

384

一連々、若キ衆、無作法有之候付而、毎度雖被仰渡候、曽而不相守、其上皆弥以無作法之由、曲事至極候事、

一近比四本甚七、家来御法度を相背、はまなけ之儀、基ニ相成及喧嘩候由、此儀畢竟若キ衆無作法を見眞似、左之通之出合有之候（ママ）と不届ニ被思召上候、依之主人之儀、父子共遠方へ寺領被仰付候、右躰之儀見分仕なから無作法之儀仕人は、可爲重科候之間能々可其意事、

一御小々姓并若輩之人々、宅へ多人数押込、又者右屋敷之近邊ニ而、無作法之爲躰仕候之旨、是以不届至極候、向後は何様之用事雖有之、出合堅可爲停止事、

右條々具ニ致承知、堅固ニ可相守之、若違背之族於有之者、其人之儀者勿論、至親々、急度其咎可被仰付候、此節別各ニ横目被付置候間、聊緩疎有間敷者也、

延宝五年正月十一日

385

一一所衆之内、地頭持之衆者、漸々地頭所可被遊御免由、兼而被仰出置候、弥其筋可有之候、

知覧ニ衆中七八人有之由候、右之衆中を穎娃衆中ニ召成、知覧内記殿一所へ可被申渡候、

一一所衆ニは地頭所不被仰付筈ニ候得共、内記殿儀御城代被仰付

置候付、地頭職被仰付候、向後も一所衆ニ御城代被仰付候はゝ、内記殿同前ニ地頭職可被仰付由、御意候、以上、

延宝五年六月八日　　御使　大山權左衛門
　　野津安右衛門

覚

一御子様を初、諸士之衣類、常々日野紬之外着用堅可爲停止、或他国へ之御使者、或使者見舞等之砌有、絹布着用無之候而者不叶儀候間、内々其覚悟あるへし、急於爰元不相調候而不叶節者、御藏ゟ申受ニ可被仰付候条、可被得其意候、但、小身之衆も可爲同断事、

一女性方之衣類、右同断、但、御姫様并御子様方之奥方は、羽二重迚は着用可然候、帷子之儀者、越後布晒布之外令停止候、尤夏冬共ニ縫金糸入かの子物、堅令停止候、

一家中之女、衣類内外共ニ、下着迚木棉之外堅令停止候、　但、御姫様并御子様方之奥方衆、乙名職者上着計、日野紬令免許事、

一諸奥方、供之女房衆、乙名職之外、貳人、未衆壱人、士、四人、今度相定候事、

一諸士供之人数定、別紙有之候間、可被得其意候、たとへ大身たりとも中間、草履、取大小差之儀、令禁止候事、

一元服、婚礼、嫡子誕生、其外振舞令禁止候、但、振舞者、二汁五菜相定之通、酒宴かましき儀、堅可爲停止候、役者衆召寄候儀、今程可有遠慮事、

一諸奥方、立笠、對之排灯、令禁止候事、

一右祝儀之外、互ニ酒肴之進物、令禁止候事、

一御姫様并御子様之奥方を初、御城方之女房衆へ進物右同断之事、

一諸奥方へ客人之節、振舞堅令停止、旦又引手物、同断之事、

一不依大身小身、正月之祝物、親子兄弟之外、前々より禁止之、弥以可相守其旨、就中女姓方之礼儀者、十五日より内ニ仕廻候様ニ、可有覚悟事、

一諸士家中之者、当時御奉公可相勤程、可被召拘之候、下女之儀、猶以可成程可有減少、内々奉公をも不相勤、徒成者共養置、自分之御奉公之障ニ罷成衆、在之由不可然候、向後右躰之者、或日堪忍（本ノママ）、或親類付ニ可被差遣之事、

一江戸、京、大阪、琉球其外、旅へ差越候衆へ、餞亦帰國之、節土産物前々ゟ令禁止候之處、此比猥ニ有之由、不届候、自今以後堅可爲停止候、尤断之委細候而土産物餞遣候人有之候共、曽而致受用間敷事、

右條々、連々雖被仰渡儀候、今度御当國大火事ニニ付、諸士致困窮候儀、笑止ニ候、畢竟御領國中之衰微罷成儀、別而御気遣ニ思召上候、猶以令間畧、可被申付旨、御両殿様被仰出候付、大抵相定之候間、若此ケ条之外ニも内證之儀、別而可有儉約、就中小身之面々右之趣を以可成程令省略、身上相続候儀、可爲専要候、苦大方之族於有之者、横目密々ニ致見分申出候様、申付候間、聊緩疎有間敷者也、

延宝八年申五月廿一日

右延宝八年申正月十二日、御城下士屋敷大火有之節、光久公仰出御書付之写、

387

（鹿児島県史料一の一七七二号）

毎度被仰渡候得共、於今緩ニ有之候条、亦々被仰出候、当所若き者共比日弥風躰悪敷、或者月代之致様、額之取様、別而見苦敷、或白頭巾ニ文字を書散し、又異様之頭巾杯大勢一様ニかつきつれ、衣類之着し様、刀之差様、惣而作法悪敷、或者路次屋敷をも不嫌、竹銃炮を打込、無用之所ニ而高声をあけ、何之所作有之共、不相見得徒、ニ夜白行廻之条、不屈深重ニ被思召上候、殊ニ御代替之砌ニ而候処ニ、仕置大形ニ而右通有之様ニ相聞得候得者、旁以下可然儀ニ候間、自今以後萬事、行跡詞をも相嗜、学文、武藝、心掛傍輩中寄合、慇懃ニ仕風俗をも可相改旨、急度可申渡、於其儀者、面々組所へ召寄、稠敷中渡置、自然仰出之趣相背族、於有之者、曲事可申付旨、被仰出候、

天和二年戌二月五日

388

私儀、数年筋氣ニ而、次第ニ行歩不自由ニ罷成、月次之御礼を不申上、迷惑奉存候、其上今年七十貳歳罷成候、依之隠居之儀、奉願候、同名薩摩守ニ家督相続被仰付被下候者、難有奉存候、不苦思召候者、何分ニも御取成之儀、奉頼候、以上、

七月六日　松平大隅守
筋気手振候付而、用印判申候、
被成御免可被下候、光久印

大久保加賀守殿
阿部豊後守殿
戸田山城守殿

389

御用之儀候間、明廿七日四時、同姓薩摩中同道、登城、可被有之候、恐々謹言、

貞享四年
七月廿六日　忠昌判

松平大隅守殿　戸田山城守
忠昌

（鹿児島県史料巻一　二〇六四号）

390

口上之覚

御自分儀、御持病不快候者、島津式部少輔名代可被差出候、已上、

貞享四年
七月廿六日

（鹿児島県史料巻一　二〇六五号）

391

一山奉行、外城廻之節、木竹拂方直成、前々之様被申付儀、悪敷候、直付者奉行前より、時々輕く被中付拂候はゝ、竹木もすたる間敷事、

附、竹木、前々頼之直定も除き、奉行次第ニ可被申付事、

一家老衆、不入所へ念入依被申付、諸役人疑、御為ニ成儀もも扣へ候事、

一家老中、諸事細事を依被申、諸役人大底ニ仕脇を兼存寄候儀儀（本ノママ）共扣扣へ御為ニ不成候事、

一諸役人、不調法者於有之者、早々承付、役替可被申付事、
但、小役人家老衆、致贔負、大低ニ仕被申候故家老衆之機嫌計を取、御為は、脇ニいたし候事、
一家老中ゟ之憐愍として、訴訟を取持扶持方を重メ、被下候儀、惣而可為無用事、
附、家老衆奥方ゟ諸役人取入ノ訴訟、口事、或は人之善悪を被承候事、可為無用事、
一家老衆、雖為功者、不義被申候はゝ、承引有間敷事、
一家老中功者之人、申出候事計を能々存、萬事被申儀、善悪を吟味専用之事、
付、用人衆、奏者衆、人躰を能見合被申付候儀共、専用候、我が気ニ入たる人を、取持有敷候事、

392

仰出

先比、家老衆へ被仰出候七ケ条之御書之趣、弥被相守、可然候、右之趣、喜入次兵衛、大山主馬、村田為左衛門、平田盛右衛門、相良主税へも申聞置、向後家老衆不存寄儀も有之時、右五人之衆より存寄無用捨、家老衆へ申置可然候間、左様ニ相心得候様ニ上意候、以上、

十一月五日　御便　佐多豊前

393

覚

一國中之仕置、并諸事法度等之儀、ゆるかせ通被聞付候者、無用捨、幾度も家老衆へ可被申聞、次第ニ者仕置をも可被申付儀候間、遠慮有間敷事、
一儒学者文字を識之用のみにあらす、正心修身之基にして、國家安寧之仕置不邪様ニとの、戒之条、朝暮心懸不怠様可被相勵事、
一先祖ニは歌人有之たると承候、詩歌之道慈悲を旨として、萬民之難儀をも察、第一政道之助ニも可成候、いつれ不被知候而不叶儀候、近代ニは義久様、家久様、歌道御嗜之間、無用被過候而者殘多候事、
一身近き一門衆、且又家老、物頭、并諸士ニも心持被為聞候者、内證ニ而可承候、卒爾之校量有間敷事、
一隠謀、讒訴之後人、有之物ニ而候間、常々其段用心之事、
一不依誰人、國家之労を存せす、機嫌よき様諂言、可申人躰も候半間、思慮専一之事、
一無申迫候得共、何篇世間之心遣候而、古來替りたる珍敷為躰、無之様意得、可為肝要事、
一内證之驕、不題目道具すきなと、禁止之間、毎物質素、意得尤候、就中近習之者へ其段可被申付事、
一部屋栖、為念入知行四万石、先指分遣候之間、諸事仕方等、右之高を以、可被相調由中付候条、可被得其意事、
一此度、堀四郎左衛門相付、勝手宣様可仕之旨申付候之間、家老衆へ可被申聞儀も、先内談可然候事、
一奥方へ召寄、用所被相達、近習之人被定置、猥内證へ不通様ニ可被申付候事、
一なくさみ迫之狩なとに向之島其外諸所へ越候刻、多人数被召列儀無用候、或は関狩、或馬追被登候事從前代人数つかひ、為可被見之儀候間、以其心得差引肝要候事、

一何のよしをもなく、一門参會之節、酒宴すきさるやう心得可入事
事、

寛文五年乙巳三月廿八日

右件者、太守光久公、仰出之覚

394

一貴殿事、家督初血入國之儀、別而怡入候、因茲先祖代々相傳之
家珍別録之通、譲與之間、堅固被致所持、到于子孫万万々歳可
被譲渡之狀、如件、

貞享五年八月十二日　中將光久

少將殿

395

重物之目録

一系圖、
一文書、五帖、
一同巻物、数十帖、
一御判物、
一記録、
一源氏重代、膝丸之御太刀、一腰、改小十文字、光世作
一頼朝公、御太刀、一腰、号大十文字、無銘、
一頼朝公、御守脇、差一腰、鳩作、無銘、
一五指量愛染明王、一躰、引法大師、一刀三拝之作
一忠久公、御鎧一領、
一太刀一腰、兼永作、
一旗二流、一流ハ、時雨之旗、一流ハ、白旗、二流共二、貴久公、御実名御座候、
八幡十
一太刀、一腰、青江恒元作

一般若之劔、一振、波平行安作、
一太刀一腰、宗近作、
一劔一振、血吸之劔弘法大師作之由、
一冑、一頭、小泉
於伏見、太閤様ゟ平野肩衝之御茶入と、此御冑、義弘公へ被進候、
一手鎚一本　城州長吉作
一一本杉、馬験一本、
一太刀、一腰、眞利作、
鷹之巣
一脇差一腰　宗近作、
右從太閤様、龍伯公へ於泰平寺、御拝領、名物御脇差之由候、
右先祖傳來之重器、此節譲渡之間、被致秘蔵、可被相傳、于子
孫萬代、無疆候、仍如件、

貞享五年八月十二日

（鹿児島県史料巻一　二一二四）

396

覚

一琴、一面、遠雁、
一尺八、二管、一管ハわし、一管ハかつみ、
右貳行、將軍家御参内之時、家久公へ、後陽成院様ゟ御拝領
一衛府、太刀一腰、眞真作、
一鞍一口、鎧梨子地、蝶之高蒔絵
紫大綱、虎皮泥障有、
一旗、一流、八幡大菩薩之文字有之、
右頼朝公之御旗、文覚上人手、
一太刀、一腰、康次作　　疆　疆
一脇差、一腰、包平作、
平野有衝
一茶入壱、
一腰物、一腰、正宗作、
一太刀、一腰正恒作

一脇差、一腰、貞宗作、
一鎧、一領、
一旗、一流
一腰物、一腰、吉房作、
一鎧、二領、
一鉄、二口紋猿、金具、
一轡、一間、正宗作之由、
一鎧、一領、

貞享五年八月十二日

（鹿児島県史料巻一　二一二五号）

397

綱貴公御書并仰出

御領国中之女、路次行候節、古來ゟ布之かつきを用ひ候處、近年綿帽子をかつき候儀、様子不宜候間、當極月朔日ゟ綿帽子かつき候儀、令停止、何れも右例之通、布之かつきニ而路次行可申旨被仰出候間、被相定日限以後、綿帽子かつき候はゝ、横目右之帽子押掛可取之候、かつきの布、人々之應分限、地染共結構無之様、麁相ニ相調可申候、且又、士之妻子并又家中之者、歴々之女性、供之女迚、壱式かつきを用來候程之者は、かつきの袖をとち付候而、用之、町方之者は油を其侭ニ而かつき候而、武士方、町方之女かつきニ而相分候様ニ、前方も爲有之由候間、弥右之通仕候様ニ与中へ可申渡者也、

元禄三年九月十八日　　評定所

398

覚

一當家代々連続之内、當代、別而繁榮候殊殊ニ三代一所ニ進官位、致江戸詰儀、外聞實儀他家ニも例稀成事候間、此旨を能々被慎存、偏當家長久之念望、可爲專要事、
一其方爲部屋栖料、此節高三萬石差分遣置之候、萬端不如意ニ雖可有之候、江戸詰相續、公界向之時宜繁多ニ候、其上領國遠境故、毎不勝手候、付而如此候随分可被用簡畧候、惣而無驕様可被相心得事、
一右之高ニ而奥方、所帯扶持方等迄、相調、家督方と不致混雑様、役人共へ堅可被申付事、

元禄七年四月十五日　薩摩守御判

松平修理大夫殿

（鹿児島県史料巻一　二四一一号）

399

覚

爲部屋栖、高三万石差分遣置之候得共、所帯方可難被続候、依之右三万石は、家督方へ相直、今度新規ニ五万石差分之候間、前方ニも申聞置候通、萬端被入念、所帯相続候様、可被心掛候、尤家督方と不致混雑様、役人共へ堅可被申付者也、

元録（ママ）八年五月廿七日　　御名御判

松平修理太夫殿

400

（島津綱貴様）
（花押）

一修理太夫殿、爲部屋栖料、高三萬石差分遣置候得共、所帶方可難被續候、依之、右三万石者、家督方へ相直、今度新規五万石、差分候間、所帶方、萬端入念被相續候様可致事、

一當時公界向、別而華麗之處、領國遠境故、不勝手ニ而毎物難調、其上父子江戸詰相續、弥以所帶方可難續と、令了簡之間、能々用倹約、右之高ニ而奥方、所帶并扶持方等、迄相調、向後在江戸可被相勤様、專可心懸事、

一高、差分上者、家督方と不致混雜様、役人共へ慥可申付之、大形於有之者、高分之無詮之条、可有其心得事、

右條々、堅固相守、可致差引者也、

元禄八年五月廿七日　　島津助之亟とのへ

（鹿児島県史料巻一　二五一〇号）

402

覚

一修理太夫近習へ召仕之者共、第一学問、武藝、有職方之儀、無油断心掛、毎物早省之儀、無之様ニ可相嗜事、

一側へ召仕之者共者、外様より諸事之儀、目を付候間、行跡可相嗜事、

一近習へ召仕候者之善悪を以、主人之賢、不肖迄外ゟ相察事ニ而候、然者萬一側へ召仕候者、内々不善之行跡於有之者、無存知主人之爲不宜儀候間、成程心を可磨事、

一近習へ召仕候者共私を存、奉公を次に致間敷候、人ニより候而者、己が心ニ不相叶者は、善人ニ而も主人へ不善人ニ申成、己か氣ニ合候者者不善人ニ而も善人ニ申成儀、古今有之事候間、心を正直ニ可存事、

一近習へ召仕之人者、於勤之場所不行跡之儀無之様、可相勤候、諸事奉公立心掛、肝要候間、猥ニ飲酒等之儀、致間敷候、其心懸於無之者、不時之用等も有之節、勤方可難成候、沈酔之上ニ而者、其身之行跡を乱し、不宜儀候条、大躰之儀、随分可相嗜事、

右五ヶ之趣ニ付修理太夫殿へ此節相達趣有之候条、此段致承知忘却無之様、可相守者也、

元禄十三年庚辰月日

403

覚

一此節倹約之儀、内證向驕ヶ間敷無之旨、被仰渡趣、御家老中承知可申渡筋、於此元書付、被仰付今口之使ニ而被差越之候、御一門を初支配有之頭々相揃、御右筆ニ誦せ可申渡候、

404

仰出写

佐多豊前殿儀、先年從寛陽院様御城代被仰付、其後御留守居御家老被仰付候得共、大身分ニ而江戸へ御供被仰付、公方様へ御目見も有之候處、御家老儀被申儀不相應ニ被思召候間、御家老役之儀者被遊御免、御城代役ニ被仰付、二千石之御役料者、御城代役ニ付而可被下置候、御納戸方、御記録方之儀者、此内之通致差引可然候、此儀ニ付而者、先々は被思召旨も候条、右之段をも可申渡之由、御意候、以上、

元禄十年丑潤二月十六日　　御使　種子島蔵人

右之通申渡候節、御家老中面々ゟ右ニ相應候様ニ、口達有之趣者、於其元ニ美作より同役中ニ相達置候様と、御意候付、申聞置候通ニ相心得可申候、

一仰出之旨趣、得心仕候得者其人々之爲ニ成事ニ候處、心得違も有之仰渡之儀不用之、隠々相背人も於有之者無詮事ニ候間、無油断相守候様にと、支配中へ可申渡由、口達ニ而可申聞候、

一此節ニ不限、仰出之儀、者縦令迄（今カ）ニ被仰出御事ニ者無之候處、其とをり不相守人者不宜候間、能々奉得其意可然候、

一内所驕者不及申、妻子召遣之女、衣類ニ至り、費仕間敷候、可成程麁相ニ相調、尤ニ候、

一地へに之衣類、御國染者被差免候譯も候、就夫者上方地紅染、花を御國染ニ被成候人も有之候条、是又少得違無之様ニと可聞儀候、

一先年光久公之御代ニも、衣服之調様被仰出段々有之、御家老を初、木綿衣類令着候儀も有之候得共、内所向之儀ニ付而者、表向木綿衣服着用之譯と者致相違、其詮無之候、表向ニ者、面立候人ニ者相應之衣服ニ而も、驕之訳ニ者不成儀ニ付、内所向を別而令簡略候儀、専一ニ候、

一御一門方御家老其外之人々物入之振舞之様ニ可相心得候、折目之祝儀ニ付振廻者、其通ニ可有之、勿論、右祝儀振廻之節とても、輕キ方ニ有之可然候、

一不依大身小身ニ、振舞以後酒宴之遊興、費ニ付及大酒候得者、不宜候間、曽而致無用簡畧可申候、

一右之段々、御家老中尤可致口達候、此外右ニ付而不洩様、可申聞候、

一島津兵庫殿、奥、同内匠殿、奥、島津又四郎殿、内所、島津筑後殿、奥、圖書、袋、入來院主馬殿、袋、北郷作左衛門、袋、種子島彈正、奥、伊勢弥九郎、袋、島津主水、奥、穎娃主膳、奥、北郷作左衛門、奥、桂外記、奥、島津大蔵殿、島津頼母殿、内、桂宇右衛門、内、阿多淡路殿、内、島津伊豆、内へは、或差引之人中押、或家中之儀兼而相續人可有之を召出し、右之通表向ニ而被仰渡候旨趣、御家老中ゟ相達候段々をも委細御用人を以、相達可申候、此段も縦（今）令迄之様ニ何れも被心得、其イ不相見候見者、被聞召通重而者思召之程も可有之候、御仕置之儀を、大身、歴々、守次第端々迄も相守儀ニ而候處、聞違背之躰ニ外様ニも会見分、諸人之心入疎畧之様ニ成立候得者、不可然候、此旨を以、内所方へも御届之趣ニ付、御家老中の家内を初、此外歴々内所方へ者、縁續を以同断ニ申通可然候、

一右之通、御懇ニ被仰出御儀ニ候條、御國中、御家老中、申越之、在旅之同役へも致着之節、相達候様ニと、是又御意候間、可奉得其意候、以上、

元録（ママ）十四年　　新納美作
二月六日　　島津圖書

島津助之亟殿
喜入安房殿
種子島蔵人殿
肝付主殿

（鹿児島県史料巻二　八九四号）。

午正月十二月　　式部川上久重
安房喜入久亮
市正新納久珍
助之烝島津忠馬
大藏島津久明

（鹿児島県史料巻二　一一三七号）

404

覚

一御関狩之儀、御家代々有來御作法、且、組中之人数行儀、并多人数集候場所、爲鍛錬、諸士不撰老若、罷上候樣被仰付儀ニ候之處、至頃日年長候人者令懈怠、年若面々迄罷登事之樣ニ存、狩立之人数相減之由、不可然儀ニ候条、狩場之歩行相叫候人者、不依老若不罷登事、

一鹿児島組中之人数、不殘與頭召連、罷登儀ニ候處、申ノ年火事（延宝八年申正月十一日、田尻八兵衛失火、）以後、組分ヶを以罷登候筋ニ今以被仰付儀ニ候、一與之與頭、漸壹人宛被罷登候節も有之由候、向後者一與之與頭何れも不被罷登候、其與之人数追立罷登儀ニ候得者、月番之與頭も尤可被罷登候、據御用於有之者、其譯御家老中へ可被申出置事、

一外城串目下知、騎馬之人乘馬御棧敷邊ニ召置、人数引立候節、歩行爲稽古出立ニ而罷在事ニ候、雖然、萬端爲物馴被仰付事ニ候、依時宜者馬上ニ而駈廻り可加下知儀も可有之候間、乘馬御棧敷前ニ不立置向後其身跡ゟ牽せ可申之事、

一小頭之内、兼役ニ役所之勤仕候人も有之候、御狩之儀付、纔一日之勤ニ候間、役所之支無之筋ニ申合、御狩ニ罷上候樣ニ、連々相心得、可被申渡之事、

一諸役人之儀、前代ゟ役所不明樣ニ申合、可罷登之旨、申渡候、近年者諸役人罷上候儀被差止置候得者、其役所不明樣、申合不罷登之事、

右之條々、此節組頭中へ申渡、與中之人数へ御狩前以、申聞せ、向後無懈怠相守候樣、可相達之旨、御意候間、可被得其意候、

已上、

元禄十五年

405

一諸事用検約、御奉公相勤之儀、肝要之旨、節々被仰越之処、其慎區ニ而妻子以下之衣類、結構、就夫者、内所向之驕ヶ間敷も有之由、被聞召候、依人躰者、内所向之飾ニ而外向ニ不相知樣ニ、心得違も可有之候得共、衣類其外、於上方調候品々者可致露顕候条、不依誰人相慎、應分限可成程令簡略候樣、支配中へ、急度可申渡旨、御一門を初、支配有之頭々へ申渡之、可然候事、

一上方調之地紅衣類者、弥以無用候、御國之紅花を以、帷子自分ニ染調着用之儀者、勝手宜候間、不若旨、可中渡事、

右之趣、承知仕、可申渡旨、被仰付候、以上、

元禄十四年巳十一月　　日

406

教訓條々

一爲一國之守護、為一郡之主、行國政、撫育士民事、不知文武之道難成、文武者車の兩輪、鳥之兩翼、不可欠一事、

一志者、諸道之根本也、大本不立、則萬事不遂故、先志不堅固事、

一翫物則喪志、是聖人之格言也、況於專遊與好勝負事、佚樂而酖

酒色乎、此等之事曾而不可爲之事、

一忠孝、愛敬者、人性之自然、順之則、榮逆之則亡慎、以可順其性事、

一雖一日空不可過、少壯而不学、老大而後悔不可有其益事、

一能聞諫則必為良將、三畧有之將能受諫能採言、云々、実能可思之事、

一以臣知其君以友察其人、故不知臣下之善悪則之日、暗將然者先能辨近近之邪正而正直之寛之邪曲之者教之而歸正道、是、君師之道也、如此則何陷佞奸之謀哉、能々心懸肝要事、

右此條数者少して詞雖短、其儀則廣遠也、平生是を身邊ニ置て讀之、可味之、あしく心得、事新敷樣ニ引請ては、却而忠言逆耳良樂若口、能々得心して可有信用、其方今年十六歳、已去年元服して益成長特我等爲ニ者二男也、修理大夫爲ニ者差次之弟、家中一門之中ニおひては諸士之崇敬第一也、然者修理大夫治世之節ニはおのつから政道補佐之任其方を差置誰か可有之哉、躰により守護代をも可被勤事なれば、国人之所瞻仰節、彼南山可均歟、邪心之才力を以ハ、中々不及事也、其例を言に遠き周世にては、周公旦、聖徳を以成王を補佐して、天下を治め、近く我家にては、日新齊、賢徳を以て陸奥守貴久を翼け、島津之正統、中興之主となしませる、是等は皆聖徳賢才之所爲也、されは並々之心懸にては、却而諸人之笑を招、先祖を恥しむるの基也、武門にをひて不珍事といへとも、朝夕讀四書、五經、而通其義、弓馬武藝之儀者、勿論、能軍法を学習、或手跡なともつたなからす、書嗜賦詩、詠和歌、彈琴は、風流之事皆以左文右武之業にして、ひともかける時は車の一輪を折、鳥の一翼をおれるにひとし、光陰如箭、時不待人、可勤学者今年生也、相構て徒に日を送る事有へからす、それ我島津之元祖、豊後守忠久者、右大將源頼朝公之庶長子にして、文武之達人也、其文徳及武功東艦に載て昭晰たり、文治二年之春、八歳にして島津之御庄、薩隅日之三州に封を受、同五年奥州之泰衡退治之節、先陣之大將に命せられ、無事故逆賊を討亡して領國に歸り、以仁義士民を撫給ひしか、其積善之餘慶、五百年來到于我等今二十代、相継て三州を領、且又、代々之先祖志を武將之家といふに、決して文武に不暗し故也、近代にをひては修理大夫義久、近衛関白前久公を師範として古今和歌集之奥儀を傳、青連院尊朝親王に附て入木之道を学ひ、九州を討随て太守と仰れ給、是文武之徳を兼備して能旗下之將士を指揮し給ひしゆへならすや、義久之舎弟兵庫頭義弘初は守護代として政道を補佐し、幾度か大敵を討亡し給ひし、就中朝鮮國之大捷異國までも無其隠、是又、文武之徳にして賢志の所致也、中納言家久、初又八郎忠恒と申せし時、秀吉公之命に依て朝鮮にわたり、義弘に力を戮せ、在陣之中、或逢風景者詠和歌、或帷幕之下に燈を挑、昭高院如雪親王之御手跡を習学給ひしとかや、軍中にも文を忘れ給はぬ御心さし、偏是元祖忠久頼朝公之長庶子、日本第一武將之後胤、島津之家聲を穢すましきの心さしゆへ、朝鮮國泗川之新塞におひて、明兵二十萬騎寄來し時に、義弘と一擧に切崩討取給敵三萬八千七百餘、異國本朝無雙之大勝利を得給事も、偏文武之道に身を投て勤学し給ひし證據也、其方事此記置條数之旨を專に相守、文武之道を学ひ令名を後代に可殘、志を能々決定して愛親敬兄之義を忘さる、則是忠孝之道中武將之器なるへし、敢不

可油継仍教訓之狀、如件、

元禄十五年六月廿五月　　綱貴

島津又八郎殿周防久侍之事也

（鹿児島県史料巻二　一二三三号）

407

乘輿、馬上、其外途中式對之覚

一兵庫殿、周防殿、小源太殿事、大御目附以上之御役并獨禮之面々者、下馬下乘可有之候、其以下者下馬下乘ニ及間敷候、與頭御番頭格之内依人或乘物を居、或馬を留、式對被致も可有之候、其以下は乘物を居、或馬を留、被致式對儀も可有之候、右之外士と見得候はゝ、乘物之戸明ヶ、馬上ニ而自分式對可有之候、

一大御目附以上之御役ゟ、鑓爲持候役格之者は、可致下馬下乘候、鑓不持格之者へは縦向より致下乘候共、下馬下乘及間敷候、大身分、獨禮馬上輿ニ而行合候節は、互ニ下馬下輿ニ不及、式對可有之候、向歩行ニ而候はゝ可有下馬下乘候、

一寺社奉行、御勘定奉行、與頭、御番頭、御用人以下之近付之士へは、可致下馬下乘候、双方馬上ニ而候はゝ、互ニ下馬ニ不及候、大御目附以上御役入ニは何時も可致下馬候、

一兵庫殿、周防殿、小源太殿は格別ニ候条、不依誰人何時も下乘可有之候、

一御當地士中、雨天之節重役之面々へ行合候節、木履を抜致式對者も間々有之候、向後互ニ木履ニ而行合候節は軽き方より木履を抜候而式對ニ及間敷候、格別重く取持申筈之面々木履ニ而参候時は、勿論木履抜可申候、自分等輩ニは木履無構行掛可致式對罷通候、右式之儀は雨天ニ木履抜候而者不自由成節も有之候付、右之通ニ相定候、

一誰人ニても、其身之格式ニ而無之様子を輕くいたし行候儀、有之候はゝ、行合候者より不致式對通候而も不苦候、以上、

宝永元なるへし、
辰五月　　相良權太夫

408

一惣而、琉球王子御當地参勤於途中、兵庫殿、周防殿、小源太殿へ被爲逢候時は、下馬下乘之事、勿論、王子被致下乘式對可有之候、

一大御目附以上之御役人、并獨礼之方ニも下馬下乘可有之候、王子も下乘可致、

一右以下、手鑓爲持候人へ被行合候節は、乘物を居、不及　乘式對可有之候、

一手鑓不持人致礼候時は、乘物之戸を明、致式對、可被罷通候、

以上、

宝永五なるへし、
申五月
御兵具所

御袖判

一物頭之儀、兵具并足軽之支配申付置候間、兵法不事欠様、常々随分心掛可令沙汰、自然入用之儀有之候様不具候得は、別而不宜候条、俄之入用ニも諸式無滞様ニ可申付儀、可爲肝要事、

但、兵具無損失様ニ取扱之者、致職分入念可相勤事、

一武藝嗜之儀、呉々申渡候得共、就中、物頭役之者共、武藝修修練之次第人数之與合、手配、大勢を繰出候手筋等、其外軍用向之儀、内々可致穿鑿事、

一足輕働之儀、不鍛錬ニ而は用向相懸候節其功無之事候間、連々其者共得方之武藝早業等折角致稽古、支配之者共相働候様可心懸候、且又、急ニ召仕候節、不依遠近無遲滯罷出、下知乱ヶ間敷無之様兼々致吟味、時々其趣可申聞置候、勿論勤方様子物頭中毎々見届可爲出精事、

右條々、堅可相守候、若大形之聞得於有之者、物頭中急度可令沙汰者也、

寅八月

右誰様御代、御袖判、不分明、暫く、綱貴公御代之部ニ、書載置、

一御家老座、

右、評定所之事、

一御勝手方、

右御物座、御國遣座之事、

一御用人座、

右日帳所之事、

一奥大番、

右御里役之事、

一奥付足輕、

右、定衆之事、

右之通、向後唱可申旨、被仰出候、

宝永二酉二月

409

小番大番之面々、代之節、請取番之人、一両人も罷出候得は、前番之人数皆共罷帰候由候、右躰候而者受取番之人、皆共不罷出内、御番所ニ無人之儀候間、向後代合之儀、請取番之不罷出内、前番之人闕取置数少き闕を取候人より、代番之人罷出候はゝ可被退出候、爲其闕取、壱通ツヽ両御番所へ相渡置候、右闕筒疎畧ニ取扱、或者取散、或紛失無之様ニ格護可有之候、尤、御番継渡之節、慥相改受取候様ニ可被申付之候、芳綬之儀於有之者、可及沙汰之条、堅可申渡之候、以上、

元禄元年辰十二月十三日

新左衛門印　左

主殿印

又左衛門印

大学印

縫殿印

中務印

410

御袖判

一去秋大玄院様御卒去無遺方仕合ニ而、未齋も不終内繼日無相違被、仰付、被任少將、累代之領國首尾能令相續、此節御老中上使ニ而國元江之御暇被下置、拜領物等段々先格不相替結構被仰付、難有次第候、國中之者共謹而可存此旨事、

一兼而從　公義被仰渡置候御條目之趣、且又時ニ被仰出候御法度之旨堅固ニ可相守之、就中切支丹宗門之儀御大禁之事候條、自然隠れ居る儀聞付候者早速可申出之、一向宗之儀義子細有之、當家代々令禁止之條不可有違犯事、

411

一家老中より申付候趣致違背間鋪候、其外奉行・頭人ゟ申付候儀支配中之者共無異儀可相勤、惣而下役之者共其分ケ相立候様相心得、禮儀正鋪相交、頭人ゟも下役に對し無禮なく叮嚀に相交、役所之風格無作法無之様ニ互可相嗜、且又不依何篇黨を結、類を引、連判等をいたし妨ニ成候儀者從前代禁止之事候間、弥此旨を可相守若違犯之者あらば重科可申付尤荷擔之者は本人同罪たるへき事、

一平日學文武藝を相嗜、親子兄弟其外類中にむつましく傍輩中之交無表裏、萬端風俗を不亂正道に可相勤、武具馬具等之儀、其用にもとつき分限相應に可調置、見分迄を存異様之道具又者不應分際結構之道具調間敷候、兎相に有之候而も不事欠儀をもつはら相考、可致置其用意事、

一領國之者共者代々當家江随身いたし來候付、都而古來舊友之筋目候、然者尋常何分にも致熟談、喧嘩口事出入等不致様に可相慎、自然口事出入等有之候節者、組中又者支配頭より可相濟、其頭人共大形に取扱、輕き儀を致被露爲及沙汰候ハヽ、其頭人可爲越度、勿論支配中之者頭人之扱を不請我儘を申ものあらハ、先例之通可行重科事、

一若キ者共髪月代惣而爲躰を見くるしくいたし、何國にも士之風俗にあらさる無作法之所行共有之付、從先代稠敷(ママ)被仰付候へ共、于今其風儀不相改由不届候、武藝鍛錬につき勇さましき業は可有之事候、容躰之儀者眼前之事候故氣を付へき之處、愛念之一通にまとひ若輩之者共を氣任ニ生立置儀早竟親兄弟不届候此已後者親兄弟其外親類共より稠敷可申付、乍其上不用者あらハ應其謂科可申付、勿論常々申付様大形成者ハ親兄弟親類共江其咎可申付事、

一不依人身小身無益之費無之様可令欠略、衣服等之儀、男女共に前々より被定置候趣有之、唐織類者雖不用、絹紬にても内々過分に衣服を調候得者、費といひ法度之無詮事候條、此節相定趣家老中より可申渡之間、其旨を可相守事、

一不勤故身躰及衰微、申付候奉公も勤かたく成行候者、或我意を働き諸人之妨になり候もの、或亂心之催有之候者共ハ、服忌相懸る程之親類、又者家につき無據者共より急度引受首尾能様可相計、若右躰之從類無之者ハ、遠き親類縁者たりといふ共引取宜相計、致油斷家を禿させ、又者及怪我候ハヽ、其可計親類中可爲越度事、

一農民之仕置題目之事候間、飢寒之苦しミなきやうに救之、耕作之時節を不違、年貢徴納等之儀無油斷様に、田地之支配人并地頭職之もの共精を出し可申付事、右條々無緩疎可相守、國中之者共者譜代之筋目ニ候得者、聊於心底疎略者有間敷候得共、代々之舊恩に馴心得違之者有之、他方之及批判儀なと候而者不可然候條、譜代之好を存、當家之瑕瑾に不成様にと於心掛者可悦入候、勿論行跡よろしく面々之職分堅固に相勤候者者、不依高下段々品能申付、又者應其働時々可加褒美、地頭又者一所之地を遣置候もの共、其外奉行頭人等も件之趣を以支配所之仕置入念可申付者也、

宝永二年十一月十五日

（鹿児島県史料二　二一三四号）

412

御袖判

今度繼目無相違被仰付候付而者、領國中申渡趣雖有之、
諸外城之儀者鹿兒嶋をはなれ段々ニ差置事候條、士之古風を不
亂地頭より申付候旨專相守、武藝之儀者勿論、山坂之歩行早馳
り其外達者業致肝要、急事到來候節者勤場江早速駈付候儀者、
兼而可心懸、就中若き者共なまぬるく無之樣、平日地頭より可
申付置者也、

寶永二年十一月十五日

（鹿兒島県史料二　二一五三号）

413

御袖判

一去秋　大玄院樣御卒去無遣方仕合ニ而末齋茂不終内、繼目無相
違被仰付被任少將、累代之領國首尾能令相續、此節國許江之御
暇被下候付而茂旁先格不相替結構被仰付、難有次第候條可存此
旨事、
一神社佛閣修造興行之事、可專勸農事、可徵納年貢事、
右三ケ條者政務付而萬事相通事候故、曩祖以來每年吉書ニ記、
面々江茂急度見せ置候儀當家題目之政規、誠以曩祖之御賢慮不
淺次第ニ候、弥其旨忘却有間鋪事、
一此方之行跡又は申出候儀ニ付而存寄旨可有之時は勿論無遠慮幾
度茂可申聞事、
右之趣御家老中得其意、代々之舊式を以應當時之事、士以下諸
事之仕置明白ニ令沙汰、累代首尾能令連續候家風、至此方代不
易樣猶々出精候者大慶不可過之者也、

寶永二年十一月十五日

（鹿兒島県史料二　二一六九号）

414

出水之儀外城第一之廣所、殊ニ他國境之事候処ニ、今以古風を
守、罷在候儀、奇特思召候、今般之儀、御旧式之侍踊被仰付候処
ニ、早速大勢馳集、行列正敷勇猛之勢ニ而踊候、面々之心底奇特
千万思召候、若き者共向後之儀、弥古風を養ひ、風俗正敷何事ニ
不依、急事到來之節、遲働不仕樣ニ平日心懸候樣ニ常々可申付候、
旦又、長キ刀之儀は、一腰たり共數多なり樣ニ是又可申付候、此
由我等より各へ可申聞旨、御意候儀誠ニ以何れもニ冥加之仕合、
所中之規摸不過之事候条、御意候旨聊忘却無樣ニ役人共を始侍中
へ能々申聞置、猶以若き者共不乱風俗、武藝之儀は不及申、歩行
早走り、其外がんぢゃう業之修錬、專要候、常ニ心懸宜者は勿論
地頭ゟ無油断其沙汰可有之事候、以上、

酉八月廿八日　　帶刀

白尾登後右衛門殿
市來木工右衛門殿

右は吉貴公御入國之節、於出水被仰出、両人は出水地頭ニ而
候由、

415

一御當國之儀者御譜代之士共ニ而候故、
殿樣を大切ニ奉存、御奉公ニ付而者、老若其身命を差捨候志者
可有之候、然者平生之行跡不宜付而傍輩中少々憤有之候得者、
屏垣を崩シ礫ヲ打込、或者、辻々ニ集居往還之障ニ罷成、或ハ往

來之者共ニ悪口を申掛、不謂及口論自身之非分者不顧致打擲、亦者討捨候儀共多々有之、右式之仕形末々之事ニ而奉對、殿様無奉公之儀とハ不存段、何れ茂了簡違ニ而候、右之通士ニ不成合行跡少ニ而茂人之障ニ罷成候儀□(虫喰)、御當國ニ限右之風俗ニ有之候事御仕置不宜筋ニ他國江茂聞得、畢竟者御難題之御事ニ候、此儀を以段々御法度被立被仰渡御事候間、老若共右之旨ヲ奉承知学文武藝を相嗜、若輩之者共ニ者親兄弟年長候者共ゟ時々中聞、風俗相直候儀當時之御奉公ニ候、

一右躰之風俗故、若キ者共之交無慇懃有之、纔之事ニも傍輩中或者及口論、或者相果シ差究無據承辱ニ成候儀者不遁筈候得共、互ニ所行不宜所ゟ事起、皆以堪忍仕相濟筈之事候處、畢竟忠節孝義之程ヲ不存無穿鑿故、私ニ身命を差捨候儀忠孝之道ニ茂相背、一類迄茂迷惑仕儀幾度茂有之不便之至ニ被思召上候、傍輩中下々ニ而茂不屈之儀有之候ハ、、楚忽ニ事を破り不申、其場を致堪忍遂披露候ハ、、尤明日ニ御沙汰可被仰付候、依之學文ニ志少々成共道理ニ通達いたし候ハ、、右躰之無所行者無之筈候、毎度被加御憐愍候而被仰出候得共、其譯不相立儀御仕置不相屈儀有之、御氣毒ニ被思召上候間、右之譯ヲ得と奉承知候様可申聞候、

一若キ者共者山坂之達者ヲ心懸候儀尤可宜事候、右式之業者一身之嗜ニ罷成、人之障ニハ不罷成筈候、然共武藝を習、山坂之達者を仕候得者、平生之様躰茂見苦敷仕、諸事人之障ニ罷成候を手柄之様存候儀別而心得違ニ候、御奉公ニ付而は何れ茂身命を輕々敷いたす心底候得者、御爲ニ不宜儀と實々落着仕候ハ、、成程心安き御奉公ニ候間、行跡をも相改可申事ニ候、

一屏垣を崩、礫を打込候儀、士之家來其外寺門前町人之子共士之真似をいたし、右之働仕儀茂有之と相聞得候、此段士之風俗宜時者下々迄茂其風格ニ可相成候、又士共行跡不宜候得者其仕形を相真似候、畢竟者士之子共行跡之善悪ニ依末々相懸事候得得、專可相嗜事候、

一士之子共學文武藝を心掛行跡能者者組頭中ゟ相糺可申出候、左様成ものハ連々宜被召仕候、

一所行不宜者者無藝無能ニ而平日徒ニ罷居、依之業をも不仕候付、悪行を仕外無之筈ニ候、

殿様ニ御世話を掛ケ上、其身者勿論親子、類迄茂迷惑ニ成御事をいたし候ものハ不忠不孝之者ニ候、此旨能々親々ゟ子共江可申聞候、

右之段々　思召之趣ニ候間、御家老中奉承知、先様最通候様可被致相談旨　御意候、以上、

寅八月　　御取次
鎌田六郎太夫
谷山角太夫
平岡八郎太夫

右者寶永七年
(島津吉貴)
総州様御代仰出之由、

(鹿児島県史料二　二九七四号)

一先年増上寺火御番御勤之節、御家中之士并一身者、又者ニ至迄火事之節着用之羽織、月印被仰付置候、依之向後共火事之節は

着用之羽織は可爲右月印候間、持合不申者、早々相調候樣ニと
去年於江戸被仰出置候、於御當地も火事之節着用之羽織、火頭
巾、相調候者、江戸より被仰は置候目印同前ニ相調、可然之旨、
御意候間、目印之仕儀左ニ相記候、
一士并御直之一身者人足迄は、羽織之裾ニ八寸之百地、火頭巾調
候人も頭巾之裾ニ三寸之白地、
一家中、又者羽織は腰五寸之白地、火頭巾調候者、是又しころえ
中程ニ三寸之白地、
右之通可相調之、調樣之儀は先年より致來候通、惣而御家中之
目印候条、下人共之羽織迄調候儀勝手次第ニ而、難成くは衣服
之腰ニ白地縫付置申候而も、布木綿之糸ものニ調申ニても、御
家中一統之目印は右之通仕候而爲着候樣、可相心得候、此旨與
中へ、可中渡者也、

宝永七年十一月廿一日　　評定所

寫

又三郎樣江被　仰進候御口上之覺

從東照宮御先祖至龍伯樣　惟新樣　中納言樣段々　御懇之旨有
之、猶又御當家從御代々樣茂不相替　御懇意有之候付、聊其旨
御忘却不被成候、依之先公方樣江者格別之御用茂候者、可被仰
付旨御内々爲被仰上置趣有之候、然者御當代樣ニ茂勿論御同前
之御事候故、右御心底之旨此節嶋津帶刀御使者ニ被差上、御内
々より被仰上置候間、又三郎樣ニ茂右之段急度御承知被成可被
置候、
右御口上申上候節者、嶋津大藏并御守役又者御側江相勤候者
共
御前ニ相詰候樣仕置、右御口上申上候後、相詰候者共江直於
御前、帶刀咄ことくニ可申聞、趣者、
御先代樣以來格別之御用と被仰上置候者、尋常之御奉公ニ而
者勿論無之候、萬一世上騒敷儀茂可有之節、其向之御用可被
仰付と之御事候、此節何そ御別條可有之と不被　思召候得
共、
御代替之節候故、改而右之趣被仰上置候、前々より被仰上置
候御心底者
御曩祖以來不忠不義之御仕形曽而無之候、然處從
東照宮以來　御當家御代々樣御懇意之旨有之付、御奉公之儀御
深切ニ被掛　御心、其段　御先祖御代々堅御傳續被成候、依
之先年風説抔有之候節、先
公方樣者　常憲院樣（徳川綱吉）御兄樣之御筋ニ而、御筋目付而者餘儀茂
不被成御座御事候故、末　御城江不被爲入前、　大玄院樣（綱貴）
より御心底之程被仰上置、其思召を大守樣御繼
目被　仰出候節、且又其後茂御内々より御心底之程被仰上、
其御覺悟ニ而被成御座候、然上者縱者萬歳之後、世上轉々之
節及候共、
御當家樣御懇之一筋御忘却被成、時之宜方ニ可被應御心底少
茂無之候、不義不忠之筋を以何程御家結構ニ成候而茂無全候、
且　御先祖御代々之　思召を被背儀候得者、差當御不孝之至、
彼是以道にあらさる事候間、如何樣之被及　御難儀候共、御
當家樣江偏ニ御奉公可被成と御治定被成被置候、右之旨趣此
節御治定被成被　仰出儀ニ而ハ無之候、ケ樣之儀

御父子様御間ニ而茂不圖被　仰出候儀者、却而如何候、其上又三郎様未御若年ニ被成御座候付、被扣置候得共、當時　御代替之節候故、乍御若年此砌御心底之程急度被仰進置候者御一生之御心恨ニ茂可成と被　思召被　仰進事候、大藏并御側之者共右　思召之旨承知仕心底一頭ニ治定可仕置候、未御若年候間、於　御前縦初之咄ニ茂世間騒敷成行候時者、進退如何可仕哉抔無正躰儀共聊申間敷候、右之旨具ニ可申聞置旨御意候、以上、

正德二年辰十月廿六日　御使　嶋津帶刀

（鹿児島県史料巻三　一四八号）

藩法集（列朝制度）

418

覺寫

今度從　太守様又三郎様江拙者御使ニ而被仰進候　御口上書寫渡置候間、後年代合之節慥可被次渡候、高橋民部・大嶋孫右衛門・和田次兵衛事京大坂江被差置儀候間、此節　又三郎様江被仰進候御口上書寫相渡、兼而其旨堅存可罷在旨可申渡由被仰付候、拙者儀者急キ江戸江被遣事候間、於大坂孫右衛門江右　思召之旨趣并御口上書之寫、民部・次兵衛ニハ孫右衛門より相達候様可申付旨御意候故、孫右衛門迄ニ中渡　御口上書寫相渡、平日之御用茂此節被仰渡候旨を心底ニ挾置相勤可申候、勿論役替之節茂今度　御意之旨申傳　御口上書寫茂慥可次渡旨ハ拙者書付相添孫右衛門江渡置候、以上、

正德二年辰十二月廿五日　嶋津帶刀

（鹿児島県史料三　一四九号）

右、正德二年壬辰十月十四日、文照院家宣公様被遊薨御、有章院家継公様御幼年之節、吉貴公より継豊公へ被仰遣御口上書ニ而候、

419

一小番被仰付候格之者、御役相勤、又は餘事之御奉公、御番入不仕ものは、申出次第小番帳可被載候、不申出御番入之不仕者は、中絶可被事、

一家筋之儀を申立、小番入之儀新規ニ願申出候而も、御取場有之問敷候、御奉公之依次第、品能可被仰付事、

右之通、此節御格式被相定候間、堅固ニ可相守候、

宝永三年戌三月

420

一組頭格、三男迄は小番、　當分寄合之事、

一直觸格、二男迄は小番、　當分寄合并之事、　之

一小番之者、二男は大番、

右之通、此節被仰付候条、向後右之格を以、相調候様、御記録所へ、可申渡置旨、被仰出候、

正德二年辰九月

421

一高屋敷所持いたし候者、定役儀相勤候節、役儀之内御番入之願出ニ不及候、役儀不相勤節、は御番入之儀可願出候、

一無高無屋敷之面々、有來通之御番、御免之事候間、先年被申渡置候通、御番入、願出ニ不及候、

一高屋敷所持いたし候醫師、御番之儀は有來之通ニ候、御番醫師外御番帳ニ被召入置、高致所持、御番不相勤ものは、小普請銘致上納、御法之通、此儀は有來通、可有之候、

正德二年辰十一月　　蔵人

422

若君様弥御機嫌能被成御座、恐悦至極奉存候、然者格別御用も候はば、可被仰付旨、御先代ニも申上置候、弥以其覚悟ニ而罷在候、世上爲異成聞得も無御座候得とも、御代替之儀ニ候間、此段被聞召置、可被下候、以上、

正德二年壬辰十月　　御名

423

又三郎様へ被仰遣候、御口上、

権現様ゟ、御當家様御代々、此御方様ニも御先祖様御代々、別而御懇意有之、先公方様猶以御懇意之御事候付而、其旨御忘却不被遊候故、先公方方様へは格別之御用候はば、可被仰付旨、御内々爲被仰上置旨、有之候、然者到御當代様も、尤御同前之御事候故、此節其旨島津帶刀御使者ニ而御内々ニ而、右之趣被仰上置候間、又三郎様ニも其旨を急度御承知被成可被置候、

右之通、御口上申上候節、島津大蔵殿、其外御守役御近習之者共御前へ相詰候様ニ可仕候、右御口上申上候後、於御前右何れもへ咄可申聞は御先代様已來、格別之御用と被仰上置候は、尋常之御奉公之儀ニ而は勿論無之候、萬一世上騒敷儀も有之節、御用被仰付度旨、此節御代替之御事ニ而候故改而右之趣被仰上置事ニ候右之通御先代様以來被仰上置候御心底は、此御方御先代様御代々之思召を被継、先公方様は常憲院様御兄筋ニ而無餘儀御筋目ニ候故を以、未御城へ御移徒無之内、大玄院様より御心底之段被仰上置候趣有之、從太守様も不相替右之旨被仰上置、御深切ニ被思召候事は、一々不及申候、少も不忠不義之御仕形無之処ニ被應時節思召を被替、御不義之事有之、如何程御家無御別条候而も、無專事ニ候、差當り御不孝、御不義ニ成事候故、如何程之御難儀ニ及候儀有之候共、御先祖様御代々之思召を不相替、御當家様へ之御奉公を一筋被思召事ニ而は無之候得共、當時御代替之時節ニ候故、此段被仰進候、何れも紛敷儀無之様ニ思召之一筋を落着仕、可申候、又三郎様、當時御幼年被成御座候得共、右思召之段被聞召置候はば、御一世之御心得ニ罷成事ニ候故、被仰進候、於御前段初之御咄ニも、世上騒々敷成行候はば、何行へ可立退なと、惣而無正躰儀共不申上様ニ、御守之者共へ可申聞候、何そ世間別条可有之儀ニ而無之候得共御代替之事候故、右之通、又三郎様へ被仰進旨、御意候、

正德二年辰十月晦日　　御使　島津帶刀

424

大番所へ初召置候御記録、其外御大書箱等、大番之面々より無解怠、毎日掃除いたし可次渡候、且又、座敷掃除之儀も、表坊主相勤事候条、毎月十月廿五日ニは、表坊主申談、右箱取除掃除可仕旨、堅固ニ可相守也、

宝永七年　八月　　御家老座

425

新照院と申所之名、向後は新上橋と唱可申候、右之段可致通達旨、内記殿被仰候、以上、

正徳五年乙未十二月十三日　　谷山角太夫

426

ぬめり川之儀は、なめり川之唱違ニ候間、向後は以前之通、なめり川と唱可申候、

右の通、通達可有之候、以上、

正徳五年未十二月十三日

右の通、早晩之通、与中へ通達可有之旨大蔵殿(島津久明)被仰候、

十二月　　中神与五左衛門

427

先比若ヶ者共相集居候内、致喧嘩候処、さかえ刀を入候事有之候、さかえ刀之儀者以前より有之事相聞得候得共、紛敷方ニ候鞘共ニ入候儀は、左も可有之候得共、刀を抜候得ば何方を相手共不相知筈ニ候、不意之儀ニ而居合候人は、折角と取さかえ可申儀ニ候、男道之儀ニ候得は何様致怪我候共、無是非儀ニ候、さかへ刀入候儀は不謂事候、向後さかへ刀入候儀無之様ニ候御(ママ)沙汰も有之候間、爲心得致通達置候事、

三月七日

428

右之通被仰渡候間、地頭所、私領并支配有之面々、其外不洩様、可被申渡旨、主殿殿(肝付兼柄)被仰候、以上、

正徳六未三月七日

一客屋預、　　一御春屋

右之通唱候様、此程被仰付置候得共、客屋、評定所預、御春屋役、と向後相唱へ可申候、御用之節御用之儀をも御春屋と唱、又は御春屋御用を、客屋なと、唱違書違候儀とヶ有之、不宜候条、向後客屋、評定所、御春屋、其外御用之向々ニより、唱違書違無之様、與中へ可被申渡者也、

正徳六年申六月二日　御家老座印

429

一三月三日、　　一五月五日、　　一七月七日、

一八月朔日、　　一九月九日、

右者、毎月御家老を初、諸御役人右之日も、平日之通、四ッ、八ッ星合被仰付事ニ候得共、節句日ニは差而御用も無之、何れも毎日罷出候而御用弁候事、依之休ニも可罷成候間、向後は右節句日者八ッ星被成御免候間、八ッ同前九ッ之星合被仰付候間、九ッ之星合何れも退出可致候、尤正月三ヶ日は此内之通、被仰付候、小役之儀も右ニ可準候、

右之通、被仰出、今日より仰出之通、星合被仰付候条、此旨支配頭、又は表方支配之座々へ、不洩様、早々可致通達候、以上、

享保三戊三月三日

430

一他國者、依科、遠流被仰付候節、向後は、道之島、七島へは被遣間敷候、遠流之引替ニ、須木、小林、又は遠方外城、人少く致難儀候所、衆中、百姓下人ニ可被下候、尤科之依軽重、一世遠流、相當候者は、一世被下候、又以時節遠流御赦免可被仰付候、且又、他國者抱者私遠流申付儀有之節并、右同断可被仰付候条、私遠流之願申出候砌右之心得を以願出候様、時々可沙汰、

但、依科之訳、難差置儀も、可有之節は、其節之趣次第、吟味可有之候、

一諸人御奉公ニ付、右之島々へ差越候節、他國抱者、年季者、勿論永代者ニても、家來、下人ニ召列、差越候儀、無用可仕候、惣而他國者、御國居付被仰付置候者ニても、其身代自分爲稼抔、右島々へ参候儀、曽而差免間敷候、

一櫻島之儀、折節被遊御越御事候故、外ゟ猥ニ不差越筈ニ兼而被仰付置候条、惣而他國者差越候儀仕間敷候、尤御國者ニ而も所行不宣者を科賣等ニ遣候儀、兼而仕間敷候、

右之通、此節被相定候条、与頭、諸地頭、私領は領主、其外諸役座へ、不洩様申渡、与中所中支配中へも、不洩様、可被申渡旨、可致通達候、以上、

享保三戌四月十六日　　將監　佐寿島津久當

431

一昨日南泉院邊ニ而、士之子共と相見得、前髪角入有之候もの共、刀を後ニ指候者有之候、刀を後ニ指候而者、急ニ抜候儀難成筈候得者不心掛ニ候、且亦大りはヲ取、衣裳を短ク着候而致徘徊候、此節初而右躰之無行跡被成御覧、見せ物なとの様有之候、右行跡之儀ニ付而者、前々ゟ段々被仰出趣有之候得共、今以右通無行跡有之、不宜候、早意者興頭大形故、今ニ不相直候と被思召候、右ニ付而者角入前髪有之者拾三ゟ上之者、惣様相集、御家老見分いたし、行跡不宜ものハ、御意無之内者、前髪取角入り事差免ましく候、尤行跡宜ものハ致見分、御意之通可差免候、

一興頭ゟ東郷藤兵衛江可申聞候、藤兵衛者武藝之師を仕候得者、稽古ニ参候者之内、若年之者共茂可有之候、後ニ刀ヲ差候而者、抜候事茂不相成、せハき道ヲ歩行候事茂不相成筈候、刀指様茂不存様ニ有之候而者、士之心掛大形ニ相見得候、ケ様之事を氣を付不申候段、指南之いたし候様不宜と可申聞候、藤兵衛外ニ茂武藝指南いたし候ものハ、刀之指様行跡等之儀迄茂若年者江者可申聞候間、組頭ゟ是亦可申聞候、

右之通被仰出候事、

右吉貴（吉貴）公御代　享保三年戌四月

（鹿児島県史料一、九二二号）

432

一諸座付之者其外、御奉公之依功ニは、以前より士ニ御赦免被仰付事ニ候、此已前は御人少之事ニて、他所よりも被召抱候儀も有之候ゆへ、右通御赦免爲仰付事ニて、子孫迄士ニて罷在儀候、然ば士之二男・三男迄太分之人數罷成、近年は無據被仰付方候方も、御断被仰達、不被召抱事候、右之次第ニて、御人御不足ニも無之候、依之、向後御赦免は、左之通御法被相定候、

一諸座付之者、別て勤之功も積、御調法罷成候者、其身一代座付ニ可被仰付候、三代相續、首尾よく相勤候ハバ、三代目より、永々座付士ニ可被仰付候、

一右同断之者、無隠働之者、又は及數年、勝て勤方宜者ハ、其身より、永々座付士ニ可被仰付候、

一御船頭之儀、有來通、永々士ニ可被仰付候、

一脇船頭之儀は、當分ハ外城衆中御赦免被仰付事候へども、向後

座付士同然ニ、依功は、其身一代御船手附士ニ被仰付、三代相續、脇船頭をも相勤、功有之候ハバ、永々御船手附士ニ可被仰付候、若到子孫、御船手士之御奉公之御用無之者ハ、御納戸・御兵具所座付士ニ可被仰付候、勿論御船頭をも相勤候程之功有之者ハ、有來通、其身より永々士ニ可被仰付候、

一何ぞ御用相立候程之儀有之者ハ、吟味之上、外城衆中可被仰付候、

一右同斷ニ付、座付士、又ハ一身者躰之者、被召出候ハバ、其身計可被仰付候、三代相續、御用向首尾好相勤候ハバ、永々士ニ可被仰付候、

右之通、此節被相定候、勿論右之外何ぞニ付、被召出候者有之候節は、右ニ準ジ、其節之様子次第、可被仰付候條、此旨、支配中不洩様、承知可仕旨、支配頭へ可通達候、

享保三年戊二月廿二日　　將監

433

藩法集（列朝制度）

子細有之、親子兄弟其外、近き親類、義絶いたし候節は、向後支配頭、外城は地頭、私領は領主へ、可申出候、左候而申出候節は、大目附へ支配頭、地頭、領主より可申出候、若、義絶之段兼而不申出、何そニ付及沙汰候節、義絶いたし申出候とも、取揚間敷候、此段不洩様、与中へ可申渡候、

但、此内より義絶いたし候者於有之者、則申出候様、可申渡候、尤、自今以後之儀は、右之通可相心得候、

享保三年戊三月七日（イ九）　　御家老座印

434

御上下之節、道中船中共ニ御供立ニ出家も召列候者有之候者、有之（衍カ）候向後無用可仕候、

享保三年戊七月　　彈正

435

江戸御國許共ニ、御家老ニても罷紗之合羽、栖袋類、仕間敷、此旨堅可相守候、

三戊六月十五日　　彈正

436

不別立候而相果候者之子、別立願出候節、高并居屋敷一ヶ所附屬いたし別立御奉公爲仕度願出候者は、願之通可被仰付候、無高、無屋敷者願出候共、御免被仰付間敷候、

不別立罷居候者、訳有之、一世御奉公不被仰付者は、子孫ニ至而も御奉公被仰付間敷候、尤別立願出候而も被仰付間敷候、乍然至子孫依器量者別立并御奉公可被仰付候、

享保三年戊七月　　彈正

437

一其身より願ニて、致外城養子候者ハ、其養子代ニは、高五拾石ニは被仰付間鋪候、悴代ニは、五拾石以上ニも可被仰付候、座付士より表方士之養子ニ罷成者候も、右同斷右躰之者ニ四代過候ハヾ、百石成御免可被成候、座付士より表方士之養子ニ罷成者も、右同斷、

一右貳ヶ條之通之御定ニ候へば、其身之功、又は無隠手柄等いたし候者ハ、其身代ニも、鹿兒嶋代々士同前之御法ニ可被仰付候條、諸奉行等ニも、右躰之者見合可申候、

一依願外城養子被仰付候者、御太刀進上、又は御番相勤候家筋致

相續候ても、其家之格式一段被召下御法ニ候へども、御見合を以養子ニ被仰付候者、向後其家之格式之通可被仰付候、

一座付士、其座ニ相勉候内ハ、三拾石ニは被仰付間鋪候、

一外城養子へ罷成候者、座付士座を離レ御奉公仕候者ハ、三四代相過候ハヾ、百石成御免可被成候、三四代之内ニても、諸奉行之格、無役ニても御馬廻り又は小番御免被成候者ハ、百石成御免可被成候、

享保三年戊七月

藩法集（列朝制度）

438

座付士之儀、何方座御赦免士と唱候事、有之候、右御赦免と唱候事、如何候間、向後者何方座付士と、唱可申旨、支配中へ不洩様、例之通、通達可被致候、以上、

享保四亥十一月十一日　内膳黒木久丘

隼人比志島範房

439

出水賀志久利大明神を薩州之宗廟と唱來候得共、向後ハ薩州之惣社と唱候様ニと被仰出候、

右可申渡候、以上、

享保五年正月　彈正

（鹿児島県史料巻三、一一五号）

440

河内之文字、川内、又は千台と、両様に申候、文字書來候得共御調進之上り御絵図に、川内川と目書有之事候条、向後川内之文字御用候間、此旨致承知、書付等にも川内之文字可書記候、

右之通、不洩様、可致通達候、以上、

享保五亥正月廿二日　内記　永吉（子カ）　島津久貫

441

一嫡子并二男迄、御直元服、且又、嫡子御直元服、二男御名代元服、并御名代ニ而嫡子元服、又者元服之御礼計被仰付候家筋之面々は、先年御格式被定置候、右通家筋ニ付而は、段々元服被仰付候次第有之候、然は、寄合并以上之面々、右家筋ニ付而者元服被仰付候人ニても、尤二男三男末々之子共、角入、前髪取、之儀は御家老老組（ママ）、月番へ可願出候、追而於御城御家老見届、其上ニ而御免可申渡候、勿論家筋ニ付而元服被仰付人ニても角入、前髪取、於與所見分いたし來候人は、有來通ニ候、

一諸士角入、前髪取之儀、申出候儀ニ付而は以前ゟ被仰渡趣有之候得共、未た勢大きくも無之者、角入、前髪取候者も多く相見得候、尤御見合を以被仰付候者は格別、大小身共ニ向後十七之五月、角入、十八之二月前髪取候様、可仕候、此内角入、前髪取居候者之内も、十五才より内之者は、又々角入前髪立可申候、左之通（ママ）御定之通、年月筈合候節、角入、前髪取、可申旨、先年被仰渡置趣有之候、

一右通被定置候得共、其身行跡宜様見分見苦敷不仕者は、角入前髪取年生ニ無御構、御免被成事候、見分不宜躰ニ有之者は、御免不被成事候、年月被定置候得共、行跡宜敷見苦敷躰ニも無之者多々と、角入前髪取不申出罷在候儀、迷惑ニも可存儀ニ候、依之此以後は年生無御構、御吟味之上角入前髪取御免可被成候

条、與頭見分之者御免有之候而可然者迄之名書、月番御家老へ差出、追々日限相究、於敷舞台、御家老、大目付、致見分、其上ニ而御免之者は相究可申渡候、早竜、角入前髪取不吟味ニ而申付候付、所行不宜者、有之以前ゟ稠敷爲被仰付置事候得共、此節ゟ右之通被相定候間、行跡宣見苦敷様子無之、角入前髪取候而も相応之者は、御吟味次第被仰付被下度旨、與頭へ訴出候様可仕候、

一角入前髪取御免之儀、追而申渡候節、願人共ゟ御礼申出候節、向後不行跡并見苦敷躰爲仕間敷候、若左様之儀も有之候は、、何様ニも曲事可被仰付旨、與頭へ書付差出候様可申付候、

一角入御免以後、前髪取願之儀は六七ケ月過候而可申出候、

一右通御免以後與頭時節を以致見分、若見苦敷様躰之者共有之候はば、屹と可遂披露候、尤兼々行跡不宜聞得之者も有之候はば、是又右同断ニ可被相心得候、

右之通、此節より被仰付儀、難有奉承知、兼々行跡相慎、角入前髪取候而も見苦敷様子不仕様、與中之面々二男三男等ニ至迄、不洩様與頭所へ召寄、屹と可被仰渡候、以上、

享保五子三月　　御家老座印

442

御関狩并福山其外諸所御馬追之節、串目奉行多く諸地頭、領主被差越事候得共、爲惣奉行此間ゟ重立候人被遣候儀、有來通ニ而、串目奉行は以後小番之内より可被仰付候、且又、串目奉行之内江戸へ御馬廻不相勤者は、小番持高ニ応し候者御借馬被仰付、御格式候得共、向後も常々馬をも立候様持高有之小番相勤候所は、江戸へ御馬廻不相勤候得共、御借馬不被仰付候、御賦人数、以前之通、被仰付候、

享保五(カ)子正月　　種子島　彈正

443

外城養子之儀は、養父格式之通ニは不被仰付候、一段被相下御格式候処、考違ニ而鎌田嘉右衛門は御馬進爲付、吉田喜兵衛、山鹿越右衛門は、小番被入置候、此段不吟味故ニ候間、嘉右衛門事は向後御太刀(太刀カ)進上(上カ)之願仕間敷、喜兵衛、越右衛門事は小番相除き、大番可相勤候、不吟味故ニ候間右之儀三人へ可被申渡候、

享保六年丑九月五日

444

一軽キ鹿児島士并外城衆中、其侭不依何者譜代之家來ニ非さる者、一節拘候而召仕候儀、有之候処、其者永代之家來ニ而は無之、と存候心底有之候而、抱主ゟ申付候儀、不相守、致気侭候者多々有之由候、一朝一夕ニても致随身候得は、主従之儀は不通事候間、勿論抱主ゟ申付候儀、堅固ニ相守、惣而主従之礼儀を不乱、譜代之家來同前可相勤事、

一家來奉公いたし候士は、いつれも不幸ニ付而之儀候得は、諸事勤方雑人ニは相替、堅固ニ可相勤とこそ、励可申事候處、其儀を不存元は士ニ而永代之家來ニ而は無之と申事のみを、心底ニ狭み罷在都而気侭をいたし、抱主ゟ申付候儀をも大形いたし、剰主人之供いたし御供先ニ而之下知をも不相守者有之由、不届至極候事、

一鹿児島士、外城衆中外之物者共之儀も、永代之家來ニ而は無之と存候心底故右同断、致気侭之由、不届至極之事、

一右通之者、抱主ニ對し仇をなし候者有之候、永代之家來ゟ主人

へ仇をなし候同前ニ類中之者迄も、重科可被仰付事、

一ニ朝一夕ニ而も致隨身扶助を請候者は、勿論、扶助を不請一旦爲見習致隨身身候者迄も、隨身之致契約候上は、主從之禮義可乱訳無之、尤都而之儀家來之格式、不致候而不叶架候処、其旨を不存致気侭、主從之禮儀を乱し、不謂不礼之儀なといたす者あらば、抱主ゟ永代之家來同前可申付候、無拠儀ニ而打捨候とても御構無之候事、

右之通、可觸置旨、此節被仰付候条、未々之者迄も不洩様、時々可申聞置候、尤、地頭所并一所持之地へも可申渡置候、ヶ様之儀、一旦觸渡候而も、未々致忘却候得者、無詮事候間、向後は召抱候節之手形ニ右之趣、相調候様、可申渡候、以上、

享保五年子七月

445

覺

爲部屋栖料高五萬石差分之候間、萬端被入念、所帶方相續候様可被心懸候、尤家督方と不致混雜様役人共江堅可被申付之者也、

享保五年九月十五日　　薩摩守御判

松平大隅守殿

（鹿児島県史料巻三　一一八五）

446

御奉公ニ付田舍へ參り候者、鉄炮致所持、躾等之儀有之由、御用ニ付被差越候は、御奉公一篇ニ仕筈候間、向後鉄炮所持之儀、無用可致候、

享保五年子三月

享保五年子三月

447

一西手之儀今度吉野村之内、御ア地相成候、一圍之内、唱被相改候間書付ニも其通可相記候、

一江戸御使へ、諸人頼物多迷惑致由候間、以前ニは書状頼物等ニ鈔相付事候処到此比無其儀由、相聞得、向後狀一通ニ鈔三文ッヅ可相付候、其外右ニ準シ可申候、

享保五年五月　　大蔵

448

一上筑地之儀、当分上筑地と、唱候得共、此以後、江崎筑地と相唱右地之内神明社地島津周防殿下屋敷、磯御用屋敷有之候間、江崎周防殿屋敷、磯御用屋敷、神明前と唱、可申候、

享保五年六月　　織部

449

鉄炮打候儀向後は、以前之通御城下より五里之内、御禁止被仰渡候段は、先比委細致通達置候、依之右之道乗之場所へ、此節高札相立候条、存其旨鹿児島之方曽而鉄炮打間敷候、勿論、近名狩躾等御免之人も五里之内ゟ鉄炮打候儀、無用被仰付候、御城下鉄炮場は格別候、

享保五年子二月廿一日　　將監

450

一上總介様と、御改名被遊、内々ニ而總州様と可申上候、

一上總介様之御名之介之字書申事候得共、人冠ニ不懸様介と、書可申候、

享保六年丑七月廿一日　　蔵人

451

一一所持、

島津兵庫殿、　島津小源太殿、　島津左衛門、
川上久馬、　島津（空明）　島津内膳、
島津内記、　島津備前殿、　島津將監殿、
新納四郎左衛門、　椛山助太郎、　島津筑後、
桂太七郎、　喜入右衛門、　町田郷九郎、
伊集院蔵人、　北郷作左衛門、　島津市太夫殿、
大野七郎太夫、　吉利長虎、　種子島彈正、
島津主水、　頴娃長左衛門、　禰寝仙十郎、
入來院主馬殿、　比志島隼人、　肝付主殿、
菱刈孫兵衛、　諏訪甚六、　河田長右衛門、

一一所持格、

島津周防殿、　島津大蔵殿、　島津助之亟、
島津頼母、　島津求馬殿、　島津帶刀、
島津新八、　島津伊織、　島津内蔵、
伊集院半右衛門、　畠山式部殿、　鎌田藤四郎、
伊勢兵部、
寄合、
島津庄太夫、　名越右膳、　伊集院用之助、
町田勘解由、　新納舍人、　新納左京、
平田新左衛門、　島津左内、　川上縫殿、
二階堂新五左衛門、　高橋七郎右衛門、　山田新助、
川上孫八、　樺山助四郎、　北郷七郎左衛門、
桂仁治太郎、　新納伊織、　鎌田要人、

452

仁禮仲左衛門、
寄合並、
義岡左正太、　島津十郎右衛門、　島津六郎太次、
北郷右衛門八、　西金左衛門、

右之通、唱可申段、役人は當時之御役名を唱、申事ニ候、無役を此通唱申筈ニ候、與頭并番頭并と申間敷候、與頭、番頭は御役國此内、無役を組頭番頭并と唱候は、寄合と申筈ニ候、直觸格は此於唱は寄合并と可申候、此段組中觸流ニは不及候、右ニ名書有之候者之内、當分不罷出者ハ、追而可申聞候、以上、

右之通、被仰出候間、可被申渡候、以上、

正徳三年辰
十月朔日

兵庫殿
周防殿
小源太殿

右三人は、當時之御間柄格式ニ付而は、御一門と唱候者其身ニ付而之事候、家筋は一所持、一所持格ニ而候、此事口上ニ申聞候内ニ加可申候、以上、

十月朔日

別紙之通、被申渡候節、於御家中、持高多き人を末々者之より、大名と唱申事も有之由ニ候、向後右之通唱申間敷候、此儀は別而不相應之唱候故、御書付抔ニ而は難被仰渡候間、口上ニ而右之旨、可被申達候、以上、

十月朔日

一服忌令之義は、古來より段々ニ、御代々之思召を以、仰出度々相替候故、社人・神道者等之用候服忌令は、古ヶ書留を不改用、又は中古之書留を用、神道之依法、其家々之家傳を申傳候故、一向無之神道者ニても、段々之傳ニてハ、取違候事も有之候、從　公義被　仰渡置候服忌令は、日本國一同ニ其法を可相守旨、被仰渡置事候へば、從　公義被　仰渡候趣を守候へば、少も無調法ニ相成事無之候處ニ、諸所之社人等ニ尋候事も有之由候、向後一切服忌之事ニ付、神前之勤、　御參詣之御供、其外自分事ニ付ても、紛敷不仕、公義被仰渡候服忌令之趣を、堅ヶ相守可申候、神道者・社人等は、其家々之家傳を以、神前之勤致事候へば、武家之格式ニ可相替候、此趣、諸役人ぇ可致通達候、右之通被　仰出候間、例之通不洩様、可致通達候、以上

享保三年戊八月　　杢

藩法集　（列朝制度）

一今度、領國中支配申付儀、万治年間之検地多年ニ相成、於諸所作人之多少、地面之親疎有之、農人稼穡差支、蔵入給地共ニ徴納相滞所々も有之由、相聞得候付而、此節一統引并ニ而、平等ニ致配当、人配を以作人共召移、以來國中之潤ニ成、上下爲可致安諸申付候条、少事之狹遺恨無用之批判申間敷事、

一右通支配申付候付而は、從以前有來候田地方作法を以、諸事憲法ニ可申付、田地之儀別而大切成事候条、配當ニ付而は到來々

之者迄致安堵農人共不致困窮、縱一往は不勝手ニ有之候、共先様繁榮之基ニ相成候様、專相考家老中折角尽吟味万端宣様、可申付儀、肝要候事、

一種子島彈正、菱刈藤馬、堀甚左衛門儀、一方此節之用係申付候付而は、別而精を出、惣而廉直を以致沙汰附、附之役人迄も無私深切を尽、首尾能致成就候様心懸相勤候節ニ申付、旦又、諸外域相廻、農人共家業集無油断様、宜可申付候、

一郡奉行之儀、諸外城段々差越、其所役人共、致対談、諸事引受可相勤候条、無贔負備頗、向後無口能様、精を出憲法ニ可相勤事、

一農人共、不違耕耘之時節　稼穡專可相勤旨、以前より雖申付置、猶以精を出候様、幾度も其所之役人共へ稠敷可申付候、若不用之族於有之者、其罪可申付事、

一百姓ニ可成者於有之は、家老中吟味之上、可申定事、

一支配ニ付而は、領國中手廣相懸儀ニ而、諸所役人軽ヶ者に至迄、携筈候条、正道心掛私之心入無之様、其頭6稠敷申付、若違背之者於有之者、屹及沙汰、其科可申付候事、

右條々、聊不可有緩疎者也、

享享保七年十一月

右之通、以御袖判、被仰出候条、地頭所、曖共謹而奉承知候様、可被申渡者也、

享保七年寅十一月　　大御支配所印

継豊公御代仰出

御判

今度總州様隠居高壹萬斛ニ而可被遊御續由御意候、其通ニ而者御用可難達候間、此内被下置候部屋栖料高五萬石ニ而御續被成候様ニと段々申上候處、何事茂輕被遊思召候得者壹萬石ニ而茂御續可被遊事候得共、申上候儀御用不被成茂如何被思召候付而、五千石相加可申旨應御意、先御隠居高壹萬五千石差上候條、堅固可致差引候、尤右ニ而難御續節者何度茂可申聞者也、

享保六年七月九日

（鹿児島県史料三　一八九号）

455

御判

今度總州様依御願御隠居、我等家督無相違被仰出候、領國之輩專重公義之御政道、萬端可相慎之、國家之任置總州様御代之通申付候條、不致忘却堅固可相守之者也、

享保六年七月九日　　比志島隼人とのへ

編者曰ク本文ノ宛書ハ前四六二号文書ノモノナルベシ

（鹿児島県史料三　一二九〇号）

456

今度如御願、御家督無相違被仰出、御安堵之御事候、依之御領國之輩に、以御袖判被仰出趣謹而承知仕、第一公義御政道を相守へし、御家之御仕置者總州様御代ニ被定置通を不破改、直に被仰付事候條可奉得其意、御代替之時節候得者他方より諸事氣を附、批判茂可有之候間、古來より之風俗を不亂萬端可相慎也、仍如件、

享保六年七月廿一日　　作左衛門

蔵人

木工

内記

（鹿児島県史料三　一二九一号）

457

石塔之文字ニ箔を込候得共、自今以後箔込候儀一切無用申付候条、此旨組中、地頭所、私領、支配中□、并洩様可致通達候、以上、

享保八年卯十二月　　蔵人

458

神文被仰付候節、神文と唱、又書附ニも神文と被記來候得共、向後は誓詞と書可申候、

享保九年辰正月晦日　　李

459

座付士之儀、表方士之養子願出候節は、外城養子格を以取調可申出旨、先年被仰渡置候得共、右御格式を以取調候得は、致吟味かたく候間、左之通可被相心得候、

享保九年辰二月　　蔵人

六與組頭へ

460

今度、奥附足軽御人少ニ而鹿児島士之二男三男之内、筆算等、相応之者、御雇被召入筈候間、願度者は内々ニ而、人栖相しらへ

一両人三四人ニ而も相記、近日中可申出候、

享保九年辰十二月廿七日　八郎太夫

内　膳

右　膳

將　監

461

御本丸溜之間之儀、此節驚之間と被相改、額相掛候間、向後驚之間と唱、書附等ニも右之通、可相記候、

右之通、與中、支配中、地頭所、私領、明所之外城へ、不洩様可致通達候、以上、

享保十年巳二月　　蔵人

462

御家中、大身、小身、御奉公不相勤、病身又は、老躰ニ而、隠居之願出も不申出、罷居者も、多有之、此比爲御知之上、願出出者共多く、不仕老人ニ罷成、右之趣不申出儀共、不氣附と相見得、隠居いたし候而も、其分限ニより軽々敷可致之処、小身者共、家督之厄害ニ成隠居有之由、総州様御隠居被遊候御様子を、軽き者迄も、于含仕諸事軽いたし候様、御沙汰有之候、

享保十乙巳九月十日　　蔵人

463

一上春日之下、神明方へ渡候橋を、境橋、

一神明方ゟ、祇園之方へ渡候橋を、抱眞橋、

右之通、相唱、諸書付ニも可相記候、

享保十（十一年）巳五月　　弾正

464

同役之内、同名有之節は、新役ゟ致改名事候得共、新役ニても拜領名ニ而候はば、古役之者名替可申付候、古役新役共ニ拜領名ニ候はは、其節可相伺候、

享保十年巳四月四日

465

御下屋敷角、辻番所、御廐角、辻番所、右両所、千石以上高役番所と唱可申候、此旨、組中、支配中、并地頭所、私領、明所所之外城ニも、不洩様可致通達候、以上、

享保十年巳十月　　蔵人

466

來正月二日福昌寺へ被遊御入、御規式有之事ニ候、此儀は御先祖様へ被遊御参詣ニ而無之、御規式ニ付仲翁様へ被遊御入筈候、左候得は、住持は仲翁様御名代罷出事候得は、太守様ゟも福昌寺へ御名代被仰付、二日ニは総州様御方年始之御礼可被遊御入候間、後年左様相心得候様可申渡旨、寺社奉行へ可申渡旨、中務殿、左近允与太夫、取次ニ而被仰渡候間、此段如例、可被申渡旨、御差図ニ而候、以上、

享保十年巳十二月廿九日　中尾与五左衛門

土持平右衛門

467

外城衆中、諸座付之者、又は家來、町人之内より、藝道ニ付而は鹿児島士被仰付候者、此内は其身行次を以、子供迄も永々被召出、子孫迄も鹿児島士ニ罷成候得は、自今以後は、子孫代罷成候而御用立藝道無之者は、本之姿ニ可被相返候、尤到子孫共藝道能有之、御用相立候者は、親引続鹿児島士ニ可被召置候、鹿児島

士、二男、三男迄右分之人数ニ而、御人御不足も無之、無藝之子孫迄も鹿児島士ニ被召置候而は、無益之事候間、右躰之子孫、親引続藝道有之者は勿論、其得手之藝道を以御用ニ相立程之者は、鹿児島士之ニ而可被召置候、

右之通、与中、支配中、并地頭所、領所、明所之外城ニは不洩様、可致通達候、

享保十一年午十月廿日　　杢

總州様御隠居被遊候節、爲御隠居料御高五萬石可被進旨被仰進候得共、壹萬石被進、御隠居御方江被召仕候御役人・小役人御投料米并足輕・人足御扶持等者、表方より被下度之旨

總州様より被仰進候處、何とそ五萬石被進度被思召候得共、右通段々被仰進儀候故、其上者難被仰候得共、貳萬石程者御隠居料ニ被遊度之旨、於江戸御隠居之節從　太守様被仰上候、然共壹萬石にて御隠居料被相濟思召ニ而候得共、押而被　仰進事候得者、此上御斷被仰候儀茂如何被思召候付而、五千石總州様思召より者可被相重候條、都合壹萬五千石被進度之旨御返答被遊爲被相究事候、最前者御役人・小役人・足輕・人足迄御役料・御扶持米等表方ゟ被下候得共、御隠居料五千石相重候付而、去々年より御隠居御方ゟ御役料・役料米并御扶持米等迄可被下と　總州様御意ニ而當分御隠居御方ゟ被下事候、右通壹萬五千石之内より被下事候共、漸々御買入高茂有之、御續方旁付而御不自由之儀少茂無之候、表方江者纔とても御高相重候得者、末々之爲ニ茂罷成事候故、五千石之御高者、表方江、返シ可被進候、左候而當秋之所務米迄者、磯御方江取納被仰付、來秋之取納より表方江相納候様可被成候、若又先様御不由之儀茂有之候ハ、其節者可被仰進候、幾度被仰上候而茂御斷被仰進思召之段被聞召候付、此上ハ　總州様思召之通被遊、以後とも少ニ而も御不自由之儀茂有之節は何時ニ而も被仰遣候様こと被仰上候右之次第ニ而來秋より五千石之御高は表方へ御返壱萬石ニ而御続被遊筈之事ニ候御続方を被相欠乍御不自由五千石表方へ御返し被遊御事ニ而は曽而無之候総州様御続方御不足無之付而思召を以右之通被御返御事候処若末々ニ而取違申儀も可有之候間此段得と承知可仕候右通達可致候以上

享保十一年五月

（鹿児島県史料三　一八五七号）

總州様御意之趣有之、比志嶋隼人殿・義岡右京殿兩人ニ而御城代御家老江申聞せ太守様江申上候様ニと午五月廿二日御家老座ニ而承知仕候趣左之通候、

總州様御隠居被遊候節、御隠料居之儀從太守様被仰上候者、寛陽院様御隠居之節之通、御高五萬石爲御隠居料可被進旨太守様御意ニ而候處、總州様より被仰進候者、壹萬石御隠居料被進、御隠居御方江被召仕候御役人・小役人、御役料・役料米并足輕・人足御扶持等者、表方ゟ被下度之旨被仰進候處、何とそ五萬石被進度被　思召候得共、右通段々被仰進事候故、其上者難被仰進候得共、貳萬石程者御隠居料被遊度之旨、於江戸御隠居之節

太守様より爲被仰上事候、然共壹萬石ニ而御隠居料者被相濟　思

召ニ而候得共、押而被仰進事候故、此上御断被仰進候儀茂如何被思召候付、五千石

總州様思召より可被相重候條、都合壹萬五千石被進度之旨被仰進、壹萬五千石爲被究事候、最前者御役人・小役人并足輕・人足類之御役料・御扶持米等、表方ゟ被下置候得共、壹萬五千石ニ而者御隠居御方ゟ被下候而茂被相續積候故、御下向以後御隠居御方より可被下と被仰進、御隠居御方ゟ御扶持米等今以被下事候、然者右通給分等被下候而茂、壹萬石にて被相續積候得者、表方江者纔とても御高相重候得者、末々之爲ニも罷成事候故五千石被相返候、左候而當秋迄之所務米者、御隠居御方江納り候様被仰付、來年より表方江御返シ可被成候、右之通候而茂何そ御支無之候、若又先様御支之儀も有之候ハヽ、其節者何時ニ而茂御無心可被仰進候、此儀御挨拶迄ニ被仰達儀ニ而無之候間、太守様より此内之通ニ而御隠居御方江被差置候様ニと、強而被仰遣候儀者必御無用可被成候、幾度被仰遣候而茂右之通之　思召候條、此儀も分ケ而申聞せ候様ニと　總州様御意候、右之段々いつれも承知仕、太守様江申上候様ニと被仰出候通兩人より承知仕、右之趣將監殿（島津久當）より太守様江被申上候處、兩人被召出御直可被聞召上旨被仰出候付、隼人殿右京殿　御前江被召出、　思召之趣被聞召上、段々被仰進旨委細御承知被成候、右通之　思召一々被聞召達候、兼而御續方何様可有御座哉、御不自由之儀ハ無之哉と爲被思召御事候處右通之　思召被聞召上、此上何角と被仰上候儀者却而　思召も如何候間、總州様御意次第可被遊候、尤重而少事ニ而も御不如意之儀茂有之節者、幾度茂被仰進候様有之度候、隼人・右京ニも其通相心得罷居候様と御直御意候、旦亦於嚴殿續方之儀付而、御沙汰趣委細御承知被成候由を茂被仰上候、右之通御受兩人江被仰聞せ候、其節將監・内膳・蔵人・内匠御座末ニ相詰申候、

享保十一年

（鹿児島県史料三　一八五八号）

470

御記録奉行江

總州様御隠居料之内、來秋ゟ五千石表方江可被相返旨、午五月廿二日比志島隼人殿・義岡右京殿兩人を以被　仰出趣有之、於御家老座　御城代御家老承知仕太守様達　貴聞、段々被　仰出趣被聞召上總州様思召次第可被遊旨御返答被仰上、來秋ゟハ右五千石表方江受取取納有之筈候、然者御隠居被遊候節、壹萬五千石爲御隠居料被進旨、隼人殿宛所ニ而御袖判被渡置、右寫御記録所江茂被渡置候、右之次第ニ而五千石被相返候而も、御袖判者被相直不及、本之通壹萬五千石ニ而被差置事候間、五千石來秋ゟ相減筈之譯者別紙之趣を以書留置、御袖判寫と一所仕置、向年紛無之様可致置候、依之

總州様ゟ被　仰進趣、旦又

太守様御返答被遊候儀共別紙寫相渡候、右付而通達有之候書付是又別紙渡置候

享保十一年六月　　杢

（鹿児島県史料三　一八五九号）

471

興中之面々、角入、前髪取之儀、此内は年生ニ無構、見分之上

差免事候得共、此節ゟ被相改、十七戈之五月、角人十八戈之二月、前髪取被差免筈候条、角入、前髪取候者共、致吟味可被申出候、尤見分其外之儀は、此内之通、諸事可被相心得候、已上、

享保十二年未二月二日　　中務

472

大番人、平日上下致着、御番相勤候得共、自今、年頭、節句日外は袴計致着、御番可相勤候、大番之儀、於江戸も袴迄ニ而、御番相勤事ニ候故、右之通被仰付事ニ候間、此旨可被申渡候、以上、

享保十二年丁未九月　　主計

473

諸人墓石葬禮、比日段々結構ニ相調、分限不相應ニ相見得候ゆへ、向後左之通相定候、

一石塔壹通地上五尺五寸、代銀百四匁、

但石形望次第結構之模様等と望有之候とも、彫付申間敷候、

右寄合以上、

一同壹通地上四尺、代銀三拾六匁、

但書同断、

一同壹通地上三尺五寸、代銀拾五匁、

但書同断

以上

一同壹通地上三尺、代銀拾貳匁五分、

但書同断、

右諸士以下末々迄、

一井垣者一間ニ付、代銀三拾目ニ而相調事候間、寄合並以上之人より頼來候とも、右之直段ニ而可相調候、夫より以下石塔に井垣いたし候儀無用申付候間、何方より頼來候とも右之段申達、石切とも不受付様にと申渡候、

一四尺五寸土壹棺壹通、

但廚屋四方門垣廻り迄、

右寄合並以上、

一三尺五寸土壹棺壹通、代銀四拾六匁、代銀貳拾四匁、

但紙にて調候處を木綿・芭蕉ニて相調、又者花籠等相付候ゆへ直段兩段有之事候由、

右諸士以上

一三尺五寸土壹棺壹通、代銀拾四匁、

一三尺土壹棺壹通、代銀拾匁、

右諸士以下

右之通被相定候、

享保十二年十月廿六日　　彈正

（鹿児島県史料三　一九六七号）

474

御旧式之御関狩、以前は、谷山、春山、兩所ニ而隔年被仰付置候処、其以後、吉野一ヶ所御関狩場被相定候得其、當年ゟ又々、谷山、春山、に於て隔年被仰付候、鹿児島六組之儀は、二組ッヽ、二年ニ一度、罷登外城之儀も三年一度之狩立被仰付候、依之組分井外城賦、左之通、

一三番四番組、谷山、知覧、山川、川邊、加世田、田布施、伊作、久志、秋目、鹿籠、指宿、

右組合、當申年登前、

一二番六番組、伊集院、喜入、坊、泊、川邊郡川邊郡山田、日置、吉利、川内山田、樋脇、隈之城、郡山、永吉

右組合、來酉年登前、

一一番五番組、帖佐、蒲生、入來、薩州吉田、隅州山田、阿多、百次、串木野、櫻島、加治木、穎娃、市來、

右組合、來々戌年登前、

一右之内、久志、秋目、坊、泊、川内山田、樋脇、隈之城、入來百次、櫻島、加治木之儀、已前谷山・春山へ不罷登候得共、當年より三年ニ一度ヅッ狩立ニて、惣人數致減少候故、右諸所新規狩立申付候、

一花野村、塩屋村、西田村、小野村、下田村、吉野村之儀は、跡跡より御關狩不罷登由候條、向後共ニ被差免候、

一已前谷山・春山ニて御關狩被仰付候節、御名代其外勤ニ付差越候御役々、御扶持米・送人馬等爲被下事候得ども、御關狩は格別之儀ニて、組中・諸外城共、人役ニ罷登之事候條、御名代を始、御役人・小役人都て、御扶持・送人馬不被下候、

享保十三年申正月十四日　中務

藩法集（列朝制度）

475

仰出

近年所帯方不勝手之上、領内凶年打續、年貢不足又者諸士以下末末ニ至及困窮、飢をも助彼是ニ引入、且上方向之戈覺茂難達砌ニ而、別而續方支ニ成候由、依之城代家老共より段々儉約之事共申越委聞届候、公義向勤等之儀者格別之事なから、是もいたし様於有之者可相減候、尤此方之用事者隨分不如意ニ而濟候了簡ニ候之條、内證向者猶以減少候様可致候、畢竟領國中之者共往々致心安候様ニとの事候、此旨得と致了簡、都而減少之儀相しらへ、近年中其詮茂見得候様心得可申候、右次第付而、從前々有來候格式をも不相替候而不叶品茂可有之事候、然者政務ニも懸大切之事候間、萬端委細致沙汰、無費事を專ニ可致吟味候、今度之儀者尋常之儉約と、替候間、面々隨分心掛可出情候、しらへ方ニ付城代家老并若年寄・大目附江茂申談事有之節者、余事を差置、此儀ニ係片付可申談候、以上、

享保十二年朱末六月　朱カキ

（鹿児島県史料巻之三　一九七五号）

476

一於御領内、本不慥之奇妙ヶ間敷祈祷いたし候儀、從前々御禁止爲被仰付置事候、向後、猶以右躰之儀、無之様可相守候、

一居屋敷、又は下屋敷等ニ、自今以後、輕き寺社たり共無故取立候儀、可致無用候、無拠訳合せ以、新規ニ取建候はゝ、寺社奉行へ申出、免許之上可致造建候、只今取建候分は、御構無之候、右は從公義、被仰渡趣有之、右之通、申渡事候条、堅可相守候、

享保十三年申正月十七日　御家老座印

477

御家中之面々相用候幕、白地ニ被仰付置候得共、向後何染ニ而も心次第可相調候、當分調置候幕を、用候儀、是又勝手次第、可仕候、此旨與中へ可致通達候、以上、

享保十三年二月　大蔵

あま殺しの事　耳取之事
一潮見坂、　一櫻多尾、
目くらほきの事、　藤内か宇都の事
一杉か谷、　一櫻谷、

右之通、あさ名被相改候条、可致通達候、以上、

但、可承座々へも、帳面相直候様、本文之趣を以、如例可申渡候、

享保十六年亥四月　　杢

478

諸御奉公願付願之趣、銘々口上書を以申出事ニ候、向後右口上書之内ニ親類中御咎目被仰付候訳、書加差出候様、可致候、此段、与頭、地頭へ、可致通達候、

九月

479

南林寺門前へ、諸人用候馬乗馬場を被召建候条、馬乗之儀、勝手次第可仕旨、寄々可致通達候、

右之通、致通達、御廐別當へも可申渡候、

享保十六年亥三月　　杢

480

田之面崎、

右之通、永吉村之内、徳姫様御屋敷之内、右之通被唱候様、被仰付候、

享保十六年八月　　金太夫

481

醫師之儀は、忌中ニ而も無拠療治相頼、尤、見舞之儀、不苦候、御醫師之儀も、出勤は遠慮いたし、脇方療用付療治相頼度儀は、不苦候、此段御醫師へ可申渡候、

享保十六年三月　　左京

482

小番、大番、人数之内、夜廻り奉行、谷山角太夫取次ニ而、依組者、大小差候而相廻り候者、申出候様、同廿二日、同人より被仰渡候、又脇差計ニ而殿中夜廻、被仰付事候間、向後は大小差候而相廻申筋ニ被仰付度、申談、此段申出候、

享保十六年亥七月廿六日

483

馬場長軒儀六人賦ニ被仰付、新番御格入之願申出候へ共、御醫師、沙門、検使類、六人賦ニ被仰付候而も新番ニは不被召入候、

享保十六年八月　　主計

484

自今以後、致喧嘩候者、及切腹候節、喧嘩之次第、意趣、親類共得と聞届、横目へも其場之次第、横目へ申聞置可爲切腹候、若大形之儀有之候は、、親類共可爲越度候条、此段可申渡旨、被仰出候、

享保十六年亥十二月

内匠　平岡久品
種子島伊時
彈正
伊集院久矩
蔵人
島津久豪
杢
島津久春
大蔵

奥頭へ

別紙仰出之趣、与中之面々、与頭宅へ召寄、承知仕候様、可被致候、

右、申渡、別紙を可相渡候、以上、

485

十二月　　杢

一與中之諸士より杉差立之候、何様之譯ニて候哉、且又、何年間より始り候哉、屹と爲被仰渡儀ニてハ、無之候へ共、御用候間、内々ニて相紏可申出旨、被仰渡候へ共、當座へ相知不申候故、島津圖書方へ承合申候處、左之通申出候、

一植杉・差杉之儀ハ下野久元代、爲申付と申傳候、左候て、至圖書久通、猶以仕立杉申付、又江戸杉之實持下り、苗ふせ置、方方ニ遣、或ハ土佐御家老桐間將監殿え申遣相求、或は屋久杉之苗をも植付、夫より組杉人別等も始、專久通代ニ繁昌爲仕と申候、久通平生自賛咄ニ、杉之親ハ己レ也と、爲被申居と、古キ者共申候、承應元年、吉野へ山屋敷被致拜領、野ニて御座候を、折々白分差越、大境（右カ）ニ松（ママ）を植付、柵内ニ杉松等被仕立置候事、

一杉ニ限リ不申、久通代、長門・周防より楮之苗木取寄、紙漉師松岡氏杯召下、又は宇治より茶實を下シ、園を仕立、其外、桐油、之木など植初、夫より方々弘まり爲申と申傳候事、

一久通事、承應三年之冬、伊集院地頭被仰付、其後四年め歟、明暦三年之冬、伊集院通道之松栽爲有之と、申傳候事、

一久通代、寛文十三年七月、杉改帳差出可申旨被仰渡、宮城内改候帳面、植杉・苗杉廿四萬七千百九拾八本と、相見へ中候、其内、大キ成杉は、久元代仕立爲被申杉と、相見得申候事、

右之通申出候間、此段申出候、已上、

享保十七年子十一月十六日　　御記録奉行

486

一御勝手方（カタ）、　一異国（ホウ）方、　一寺社奉行（トコロ）所、
一御番頭詰（トコロ）所、　一御近習役（ショ）所、　一御使番役（ショ）所、
一高奉行（ショ）所、　一御月付役（ショ）所、　一郡（カタ）方、
一金山（ホウ）方、　一屋久島（ホウ）方、　一代官（ショ）所、
一御書院（カタ）方、

右之通、唱書付等ニも致候様ニと、被仰付候、其外は、此内之通、相心得候様被仰付候条、此旨表方へ致通達、御側方、御勝手方へは、写を以可相達候、

享保二十年七月九日　　大蔵

487

御厩別當之事、

御馬方、

右之通、御役名被相改候間、書付等ニも御厩御馬方と、書記、唱ニも右之通、相唱候様ニ可相心得候、此旨可申渡候、以上

享保二十年卯九月七日　　大蔵

488

一高上之儀は幼少之者、御免被成間敷候旨、被定置候、得共左之通被相定候、

一寄合並己上之儀は、其身幼少ニても、間ニは人數（は歟）等差出候御用（ママ）をも被仰付、御見合を以被召仕儀も候へども、幼少ニても高上り可被仰付候、

一右より以下之者、幼少ニても勤方有之者ハ、有来通高上り御免被

成、勤方無之者ハ、却て十五才より高上り御免被仰付、十四歳迄は、高上り御免被仰付間鋪候、

元文元年辰十月　　主殿

489

藩法集（列朝制度）

一御元祖之御二男、因幡守忠綱、中絶候故、右家壮之介殿へ相続被仰付、高壱万石被下置、居屋敷は御用屋敷を被下候、

一家格連名は、島津善次郎殿上ニ、被仰付候、

一當分座席、玄番殿、善次郎殿と可被仰付候、

一紋所、十文字、可被相用候、

一島津と、可被名乗候、

右屋敷へ、被引移候而ゟ家格之通、諸事被致筈候、今程は此内之通候、

元文二年巳三月十九日　　主殿

490

病氣付、及百日不致出勤候者、御役人、小役人、軽き御扶持人迄も、其頭々へ届可申出候、又其上ニも百日ニ及候節は、又々可申出候、

元文二年巳四月　　主計

組頭へ

491

新御番、

右御台子之間へ御番相勤候得共、向後大番所へ御台子之間ニ相勤候節之通、相詰、入番支候節は、差分小番所へも可相勤候、

元文二年巳七月　　主計

492

新御番之儀は、此節大番所へ相勤候様被仰渡、支度之儀は、此内之通上下着用ニ而可相勤候、右之通、大番所へ相勤儀ニ候得は、大番人差支之節迚も大番人之方へ差寄、相勤候儀ニ而は無之、此段爲心得申達候、

元文二年巳七月　　取次　西彦次郎

493

人道号之儀、高位之人外は相用間敷事候、當分は猶以遠慮仕筈候処、石塔類ニ人道と相記事、間々有之候条、向後堅可爲無用候、享保十七年以來石塔其外ニも記置候、入道号者、可消除候、

右如例可致通達候、

元文二巳年十二月　　主計

494

嶋津玄蕃殿

嶋津壮之助殿

嶋津兵庫殿

右者今度一所持之列相離、別格ニ被仰付候、右ニ付而者玄蕃殿兵庫殿江者只今迄觸流等有之候節、一所持之列ニ而御家老與より相觸來候得共、向後觸流等有之候節者、一所持之列相離、別立而御家老與より相觸候様被仰付候、壮之助殿江者いまた觸流之儀者無之候得共、以後觸流等有之候節ハ右之通ニ被仰付候、此旨御家老與江申渡、其外首尾係へも可申渡候、以上、

元文三年戊午十二月十九日　　左京

十二月

（鹿児島県史料四の一二八〇号）

495 島津壮之助殿、私領、惣名重冨と被名附候条、此旨、組中、支配中、池頭所、私領、明所之外城へ、不洩様可致通連候、

元文三年午十二月　左京

496 七歳未満之子共、女中同前之事候故、寄合并以上之子共、駕籠ニ而も罷過候節、御城下并諸屋敷下下乗ニ不及事候条、此段御門番へ申渡候様、物頭へ可申渡候、

元文四年未五月晦日　左京

497 島津玄蕃殿
島津壮之助殿、
島津兵庫殿、

右三人御城下并、下馬札被建置候所ニ而も、向後乗輿被成御党候、此旨承置候様被仰渡候事、

元文四年未五月廿四日　取次　西彦次郎

右三家、部屋栖之儀も同断、可致候、

但壮壮之助殿儀は、當分御丸之内ニ被成御座候間、當時は右同格無之候、以後鞍川屋敷へ被引取候者、諸事家格之通、可被致候、

元文四年未五月

右文書薩藩舊雑録追録巻八三（鹿児島県史料巻四ノ五三三頁文書番号一三二一）に正文を收む、大差アリ参看スベシ

498 今月四日、芝御屋敷へ水野壱岐守様御出、又三郎様へ松平之御称号被成御名乗、御代々御嫡子様ゟ、松平御名乗被成候様、上意之旨、松平左近將監様、壱岐守様、被仰出候段、被成御承知候、

元文四年未八月廿八日　御家老座印

499 かせとり打從己前有之候得共、向後停止申付候、

元文六年酉正月　李

500 琉球并道之島、島々へ音信物、贈答品物を以可遣候、金銀遣候儀、無用ニ候、

寛保二年戌六月　主計

501 御城下供屋邊ニ而、家來、下人等、煙草呑候儀、不致様、主人より可申付候、

寛保二年戌七月　大蔵

502 御法度を背候者、又は悪意之企をいたし候者、有之候節、其訳を存候者より、有筋を可申と存候者、御当地士并外城末々之者ニても、筋々之役目ニ相付申出候儀有之候而は、廻遠有之候間、向後右躰之儀可申出心底之者は、大御目附、與力へ相付、申出候而も御目付相付申出候ても、直ニ其訳可申出候、尤右之通申候者は、申出候者之名書をも相記置、直ニ致持参司申出候、名書をも無之、越訴ことくのいたし方は曽而不被取揚事候間、此取違無之様、可相心得候、

右之通、不洩様与中へ可被申渡者也、

503

寛保二年戌八月十四日　御家老座印

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、前攝政様弥御勇健被成御座珍重奉存候、然者同氏上總介賀之屏風相調候付而、色紙形御清書之儀從　左府様被仰上候處、今度之祝儀格別被思召、御染筆被成被下、頃日相屆致拜見候、右御清書者故實有之、不容易御事之由候處、被盡御心候儀誠以御懇之至忝次第奉存候、御禮爲可申上如此御座候、隨而目録之通致進上之候、此旨宜預洩達候、恐々惶謹言、

享保九年八月四日　　継豊

中川石見守殿

（鹿児島県史料三）

504

芳牘披見、内々令約諾候、賀之屏風相調候、仲謝蒙如目録賜之、丁寧之至、怡悦之事候也、

九月八日　　近衛　家久御判

薩摩少將とのへ

505

過六日、私領内、奥州牡鹿郡遠島之内、寄磯濱と申所へ、薩州平島之船、遇難風漂着仕候処、松平大隅守領内之船頭、水主、貳拾四人、琉球人、十九人、致乗合候由、國元役人共、申聞候、仍、右琉球人、早速陸を為差登、大隅守方へ送届候様可仕哉、相伺申候、御指図被成可被下候、以上、

五月　　松平陸奥守

506

薩州より琉球江致渡海候私領平嶋之船頭水主人數廿四人・琉球人十九人乗組逢難風、今月六日奥州牡鹿郡遠嶋之内寄磯濱と申所江漂着仕候由、松平陸奥守（伊達宗村）より注進申來承之候、委細之儀者相知不申候得共、右之段申上候、以上、

延享二年丑五月廿二日　　松平大隅守

（鹿児島県史料四　二一二六号）

507

右之段、陸奥守様御方ゟ、御注進御届書を、以被得御差図候故、被聞召上候、上此方ゟも一通之御届、可被仰上旨土佐國へ、先年琉人漂着之例を以、相認被差出候事、折田清十郎殿　所新古文集ニ相見得候、

508

島津三次郎殿

右和泉家相續被仰付候節、一所之地可被下旨、被仰出置候間、昨廿一日、顯娃、指宿之内、被下候、所之名、今和泉と可相唱旨、於磯御直ニ被仰出候、

延享元年子二月　　右衛門

次ノ月日付前後歟可糺

509

一三次郎殿、和泉名跡、総州様御三男ニ被定、島津之御称号拜領、御一門之列被仰付、家格之儀は、玄蕃殿次ニ被仰付候、當当之座席は、玄蕃殿、周防殿、三次郎殿、兵庫殿之筈ニ候、

一礒附御高壱萬六千斛（イ二五千）、被下筈ニ候、

一一所之地、拜領之筈ニ候、

一紋所之儀は、十文字桐之丸、可被仰付候、

延享元年子五月廿六日　　大蔵

510

元服被仰付候人、素袍着いたし罷出候節、木賡持候儀有之候得共、無官之者、持不申筈之由、向後無用可致候、屹と被仰渡ニては無之、尤御前道具之扇子持候儀、不苦候、此旨承知仕置候様、可承役々へ可申渡候、

元文二年巳十月　　主殿

511

一頼之字・朝之字・忠之字ハ、向後於御家中名乗之字、一切用申間敷候、

一當公方様御名乗之字、於御家中名乗之字ニ一切用申間敷候、

一從家久公至綱貴公、御名乗之字御當代ニ者、於御家中名乗之字ニ一切用申間敷候、

一足輕并諸座附又ハ諸上之家來、又者寺門前・町・浦・在郷之内、御家・御氏族之端と申傳候由ニ而、御直別等之家號、又ハ御家之字、名乗來候者有之由候、向後左ニ相記候家號又ハ御家之字名乗申間敷候、

川上　佐多　新納
樺山　北郷　桂
喜入　町田　伊集院
亀山　山田　碇山
大嶋　義岡　迫水
阿蘇谷　相馬　石坂

一御直別又ハ伊集院・町田家抔之家中、慥同名筋之者家來ニ罷成、今迄致随身來主人之名字名乗來候者ハ、其家中ニ而其家筋之嫡家之嫡子迄ハ主人之家號被遊御免候、勿論其家を罷出、他家ニ致奉公候節者、右之家號名乗申間敷候、

一諸士・家來之内、無紛其主人家ニ御附人筋之者、又ハ其家ニ罷在、前々御奉公之筋を以、爲抽働無紛者ハ、今迄名乗來候御直別又ハ伊集院・町田等之家號ニ而茂、其者嫡流之嫡子迄ハ被遊御免候、勿論他家ニ致奉公候節ハ、是又右之家號名乗申間敷候、右之通被　仰出候間、承知仕堅固可相守候、此旨支配中江可被申渡者也、

享保十年巳七月廿五日　　御家老座印

御勝手方

（鹿児島県史料ハ、正徳三年ニ、編年シセリ、）

（鹿児島県史料ニ　二四三号）

512

仰出

諸所地頭申付候者は、其所を預置候事候間、自分了簡を以、諸事致差図筈ニ候処、地頭申付迫之儀と存、引受致差図儀も無之、罷居事ニ而は無之哉、其故は何之訳有之、地頭了簡迫ニ而は難成儀は、格別、輕き儀抔を申出候節、家老共へ、申聞ニも不及、地頭手前ニ而成事不成事と、致落着可致差図を、うっかりと存、其通ニ申出候付、家老共承り不成筋ニ申達候得は、其分を申渡候儀も、間々有之由、内々聞候、右之次第ニ而は、地頭之詮無之候間、向後は地頭所之儀、諸事地頭引受、可致差図候、ヶ様ニ申付候上、此以後地頭勤りかたき者も候はゝ、其節は地頭断申出可然候、此段家老共より諸地頭へ、直ニ可申渡候、以上、

513

享保十一年午七月

仰出

役目ニ付而、地頭申付候者、又は此方存寄ニ而、無役之者ニも、地頭申付候事は重儀候得共、其外城は地頭申付候者ニ預ケ置事ニ候故、地頭所之者は、惣而家来同前之筈ニ候處ニ、外城衆中其外所之者、地頭を輕々敷存候故、時々對地頭、大形之事も有之、不届候、以後は、地頭所之者、右之旨を能々存、大形無之様ニ、可申渡候、以上、

午七月

右仰出、何年鑑不相知、暫く継豊公、御代載置、

514

御守殿御掟

一姫君様御爲、第一ニ奉存、松平大隅守儀、是又おろそかに不存、御奉公油断あるましき事、

一表方の面々申分なと、仕へからす、并表方へむつかしき儀、申間敷事、

一奥より大隅の守へ、人のおこして訴訟之儀、申間敷事、

一寺社の輩、并諸職人、町人以下奥方へ進物、さゝくへからす、又は子共、女房、御礼不申上して不叶ものは、とみ岡局、藤元、相談之上差図いたすへき事、

一女房衆、上下共ニ一年ニ二度之外、宿へ出すへからす、其上さきもたしかならさる所へ、つかわすへからす、わかき衆の事は、とみ岡局、藤元、念を入申付らるへし、若不叶儀有之時は、とみ岡局、藤元、相談の上さしついたし、宿へ出すへき事、

附、男女不行儀有之におひては、その身は勿論、親兄弟まて、御かゝりなさるへき事、

一台所かたへ、みたりに用事申間敷事、

一火用心の儀、所々に不寝の番を申付置、念を入らるへし、并おく方いろりの事、ゆるしの外、一切有へからさる事、

右此旨を、相守らるへきもの也、

享保十五年七月　伊豆守　讃岐守　左近將監

515

御當地ニ而は萬石以上乗物被成御免候、玄蕃殿、壯之助殿、兵庫殿、家格は部屋柄迄も被成御免、其外は家督計、年生ニ無構被成御免候、萬石以下大身分、大御目附　以上は五拾歳ニ罷成候はは、乗物被成御免候、大御目附以下之御役相勤居候而も、萬石以上は年生ニ無構被成御免候、且又大御目附以下ニても、五拾戈以上ニ罷成、於江戸乗物御願被下程之者、御當地ニても願出次第、可被成御免、尤於江戸被成御免置候はゝ御當地ニ而猶以、被成御免候、

右之通、被仰付候間、承知可仕面々へは、不洩様、可申渡候、

但、大御目附以上之御役人へは、申渡不及候、

午十二月　大蔵

右仰出、何年鑑、不相知、暫く継豊公御代、載置可紀、

516

宗信公御代仰出

近年士之風儀悪敷、耽利欲候者有之由相聞得候、甚以不可然候、

末々之者迄も、邪成心底無之様ニ可相嗜候、

延享四年卯十二月

別紙之通、被仰出候条、不致忘却、可相守候、此旨、與中支配中諸外城へ可申渡旨、地頭、領主、與頭、支配頭へ、可申渡候、

十二月

左衛門　樋山久初　島津久甫
主計　島津久郷
右平太　郷原久雄　轉
典膳　鎌田政昌

517

御目附へ

一正月之門松、近年大き成を用候、來年ゟ小き可被相用候、
一端午之昇、追々大き成用候、布木綿、紙昇、迫を小ク取拵、小差可爲無用候、
一二季之彼岸ニ餅團子之類相調、親類中近隣へ遣候儀有之由、餅團子佛前へ備候儀は、格別ニ候、無故親類近隣等遣候儀、可爲無用候、

右三ヶ條、屹と被仰渡儀ニ而は、無之候、御役人中其心得被致候様、寺社奉行、御役々へ可申渡、

延享四年八月　主計

右引札町屋小路狹き所、松飾大き成は、往還之障ニも相成候間、町奉行其心得可有之候、彼岸ニ餅團子類、親類、近隣へ遣候儀、專末々ニ有之、御役人寄々支配下へも、通達有之可然候、

518

御記録方添役、
六人賦、

日高甚兵衛
外三人

右之通、此節被相改、添役被仰付諸、奉行格ニ而中通被仰付候条、諸帳面等記置候様、可申渡旨、織部殿御差図ニ而候、以上、

寛延元年辰二月廿一日　河野八郎左衛門

519

一寛延二年巳五月十八日、四ッ半過　大守様被遊御着城候事、
一太守様御不快被遊御座候付、同年六月廿五日御機嫌伺之諸士千五百八十四人、於敷舞台、御家老、典膳殿、被爲逢候事、
一太守様御同篇なから、御勝不被遊候付、同七月八日、御機嫌伺之諸士千九百四十八人ニ、仕切ニして、敷舞台ニ而御家老被爲逢候事、
一太守様、御病気色々御養生被爲尽候得共、無御叶今日巳刻被遊御逝去候、御家督御相続之儀、島津兵庫殿へ御願、被仰上候、

右之通、承知仕候様、與中人躰之面々、其與之與頭宅へ召呼、可申聞候、

七月十日　兵部

520

同七月十一日、隅州様へ御機嫌伺之諸士、千九百五十六人、御帳ニ相付、退出、

兵部
典膳
靭負

521

鎌田典膳殿

右隅州様御直、來午年江戸詰被仰付候、

同人

右慈徳院様、御遺髪、高野山御登山、御供被仰付、右御登山相濟直ニ江戸へ罷越候様、被仰付候、

右之通、表方へ致通達、御側方、御勝手方へは、写を以、可相達候、

寛延二年九月　　主計

522

洲崎銕炮之場、三ヶ所別紙繪図之通、申村候条中村銕炮場普請之格を以、可相調候、右場所之内、南泉院墓所之儀、返地追而何分可申渡候間、首尾掛へ可申渡候、

本文ニ付、組中諸士、勝手次第致稽古、可然哉と、寛延二年巳十月晦日、島津市太夫より主計殿へ御尋申上候処、弥勝手次第致稽古、玉目十匁より以上之銕炮被差留候間、可申渡旨、同人へ被仰渡候、

原書以亡岩切清太本、寫之、

明治二十年八月　　筆者　　児玉五兵衛

同二十一年三月二日紀合　　同人

同　　五代徳夫

既刊史料名

三十四年	第一集	薩藩政要録
三十五年	第二集	丁丑日誌（下）
三十六年	〃	（上）
三十七年	第三集	薩摩国新田神社文書
三十八年	第四集	一向宗禁制関係史料
三十九年	第五集	薩摩山田文書
四十年	第六集	諸家大概・職掌記原
四十一年	第七集	薩摩国阿多郡史料・山田聖栄自記
四十二年	第八集	御登道中日帳御下向・列朝制度
四十三年	第九集	明治元年戊辰戦役関係史料
四十四年	第一〇集	伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並解説
四十五年	第一一集	管窺愚考・雲遊雑記伝
四十六年	第一二集	川上忠塞一流家譜
四十七年	第一三集	本藩人物誌
四十八年	第一四集	薩陽過去帳
四十九年	第一五集	備忘抄・実久公御養子御願一件
五十年	第一六集	鹿児島県地誌上
五十一年	第一七集	鹿児島県地誌下
五十二年	第一八集	薩藩舊士文章
五十三年	第一九集	薩藩先公貴翰　乾
五十四年	第二〇集	薩藩先公貴翰　坤

鹿児島県史料刊行委員会

五十音順

川越政則　南日本新聞社
芳即正　鹿児島県立短期大学
北川鉄三　鹿児島大学名誉教授
桐野利彦　鹿児島女子短期大学
桑波田興　鹿児島大学教育学部
五味克夫　鹿児島大学法文学部
郡山良光　鹿児島短期大学
小西四郎　前東京大学史料編纂所
犀川碇吉　甲南高等学校
竹内理三　前早稲田大学
原口虎雄　鹿児島大学法文学部
福満武雄　鹿児島新報社
宮下満郎　鹿児島県維新史料編さん所
村野守次　鹿児島女子短期大学
桃園恵真　前鹿児島大学法文学部

薩藩先公貴翰　坤（非売品）

昭和五十四年九月三〇日

発行　鹿児島市城山町一の一
鹿児島県立図書館

印刷　鹿児島市山下町四―一八
鹿児島県教員互助会印刷部